

モンスターハンター～  
狩人レナードの軌跡～  
《改稿前》

ATA999

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある事情から生まれ故郷の村に居辛くなった新米ハンター・レナード。彼は祖父である村長の紹介で、若き竜人族の男が村長を務める新興の村ジャンボ村へと向かう。

「ジャンボ村……ゲームでやったあの場所に、本当にお目にかかれるなんてな」

そう、彼はかつて現代日本で生きていた。そして『モンスターハンター2』を経験していた。

かつての記憶の残り香に誘われやってきた彼に待ち受けている運命とは……？

※2014/12/9追記：もしもまだ見てくださっている方がおられるようでした

ら、この小説の改稿版がございます。お手数ですが、そちらの方を改めてお気に入りな  
り閲覧なりして頂きたく思います。ご了承くださいます。

# 目次

始まり	1
密林探索と青き狩人	16
師弟（仮）、結成。	44
怪鳥、遭遇	67
怪鳥、決着	92
アイルールの集落	122
師弟、砂漠へ	144
盾蟹退治と新たなるハンター	161
幼馴染と竜人族のお姉さま	191
砂漠にて、女ハンター二人。	213
嵐の前の・・・	234
激流上り	251

前哨戦

# 始まり

……遂に、ここに来た。今はまだ小さく、村と呼ぶのもおこがましい程の規模でしかない。

だが、人々の顔は活気に満ち溢れており、誰も彼もが開拓者魂のようなものを持ち合わせているように感じられる。

村の入り口にあたる西の棧橋に、一人の若者が船より降り立つ。若者は、真新しいランプスシリーズと大剣であるアイアンソード改を身に纏い、旅の影響で少し長くなつた明るめの茶髪を後ろになでつけながらも村を見渡す。その表情は希望に満ち溢れており、これから先どんな困難が待ち構えていようが、ねじ伏せてみせるという気概をも感じられる……。

とまあ、調子のいいことをナレーション風に言ってみたわけだが、つまるところ俺のことなのだが。なかなか今の自分の事を客観的に述べるとなると気恥ずかしいものがある。脚色気味に述べたので尚更だ、主に気概のところ。

苦笑いを一つ浮かべ、気を取り直してここから見える景色を堪能する。

辺りからは、商品の新鮮さを半ば叫ぶように歩く人に訴えている声や、人が住む家や橋などの設備を組み立てている大工の人達の振るう金槌のトンカン言う音が響き渡り、今まで落ち着いた村での生活しかしていなかった俺にとつては前世でのお祭を髣髴とさせるような賑わいを見せている。そして、俺はこの村がいずれその名に恥じぬ大きくなる事を知っている。

そう。

この村の名は、「ジャンボ村」。

一度は死に、再度生まれてきた俺にとつて最後の思い出。かつてとの繋がりとでも言うのだろうか。俺にとつては最もハマったのが、このジャンボ村が舞台の『モンスタ―ハンター2』なのだ。

もうこの世界で18年も暮らして、あちらには全く未練もないとは思っていたもの……。どうにも、思ったよりこういつた感傷は尾を引くらしい。まあ他にも生活に不便を感じた時にはちよいちよい懐かしんでいたというのは言わぬが華。

俺の生まれた村に、このジャンボ村がしばらくの間長期的な滞在をしてくれるハンターを募集しているという話が届いた時には、その報せを持ってきてくれた祖父に飛びつくように受けてしまった。

元々あまり人生設計をよくたてていなかった俺は、自分の生まれたトコだしこの村の

ハンターにでもなるか」と適当に考えていたし、一応は背中を預けられる相棒と言えるような幼馴染もいたのだ。だが同時に、ある出来事があった。以来何となく居辛くなつた村から離れる丁度良い機会だとも感じた。

村には、短期間ながら俺に色々と教えてくれたベテランのハンターもいる。それに後継者としては、さつき言つた俺とは幼馴染の同期もいる。そのため、あちらの村には何も心配事を残さずこちらに来る事が出来たのだ。

「あのーすみません。村長さんはどちらにおいででしょうか？」

「ん？ 見慣れん顔だな。……ああ、新しくここに来たハンターか、村長ならさつきその坂を下りていったぜ」

俺は近くにいた大工仕事をしている人に声をかけた。

「おお、角ばつた顔に限界ぎりぎりまで細まつている目と言ひ、その目尻には今までの人生の苦勞が刻まれているかの如く皺と言ひ。……正しくこれぞ職人と言える風貌といった具合だ。イカすね、これは。」

「や、どうもありがとうございます。俺の名前はレナードつて言ひます。色々とご迷惑をおかけしてしまうかもしれませんが、これからよろしく願ひします」

言つて、頭をぺこりと下げる。やはり最初の挨拶は大事だ、初対面で悪印象を与えな

いためには必須と言つてもいいだろう。

「これぐらい礼儀正しいハンターは珍しいな」

「はあ、そうですか？」

「まあ、ふざけた態度をとられるよりはマシだが。若い頃の謙虚さは必要なモンだ」

昔取つた杵柄とでも言うべきか。どうしてもこういう些細なところでちよつとした周りとの差異が出てしまう。少しづつこの世界の常識とは噛み合わせてきていたのだが、元いた村では結局最後までちよつと変わった奴というレッテルが貼られたままであつた。

こちらとしては、自分よりも年上で、更にこれから色々とお世話になる人なのだから普通にきつちりと挨拶をしただけなのだが、ハンターつてのは基本そういう殊勝な態度は取らない荒くれ馬鹿が多いのもまた事実。他者に対する敬意も持つてる場合は多いし、軽い挨拶とかなら基本的には行うが、馬鹿丁寧にお辞儀なぞするわけも無いのだ。

まあともかく丁寧に接して悪印象を与える事も無い。やはり挨拶はコミュニケーションの第一歩だと確信しながらも、ダイクさん（本人から俺は只の大工だ、呼ぶならそう呼べ……、と言われた。無駄にかっこいい）の元を後にした。……いぶし銀とはああいふ人の事を言うのだろうか、俺もいつかあんなセリフを言つてみたいな。また人のいないトコで練習しておこう、何かの役に立つかもしれない。





その後、村中を走り回っているらしい村長を捕まえることがなかなか出来ず、結局村に住んでいる人にあいさつ回りをするかのようになってしまいへとへとになっていた俺は、酒場のカウンターの奥から駆けてきた女の子に声をかけられた。

「あ、いたいた。レナードさんですよね、初めまして！私はギルド受付嬢のパティって言います。あつちで村長がお待ちですよ！」

(ええ、なにそれ……)

顔が引き攣る事を止める事は出来なかった。

何故なら、なかなか可愛らしいギルド受付嬢、パティに連れられてやってきたのは最初に俺が降り立った付近にある酒場であつたからだ。こんな事ならここで休憩しながら何か飲み物でも飲んで待つてたら良かった……とは思うものの、村全体に挨拶周りが出来たし結果オーライと言う奴である。そう思い直すことにした。レッツ、ポジティブシンキング。とにかく今は、にこやかに人懐っこそうな笑みを浮かべながらこちらに握手を求めてくる村長との会話に集中しなければならぬ。

「やあ、よく来てくれた！ようこそ、オイラの《ジャンボ村》へ！」

ああ、この言葉を生で聞ける日が来るなんて……と心中で感動しながらも、俺は目の前の人物の観察を続ける。

村長は、純粋な人間では無い。彼は竜人族と言われる種族なのだ。

竜人族とは、寿命が数百年以上と長く、身体的な特徴として耳が長く、全体的に若い頃は容姿端麗な者が多いという。東洋のテイストが混ざったエルフのようなものと考えればいいだろう。

但し相違点も存在しており、年をとつてくると体の縮み具合が半端では無く人間の老人よりも小さくなってしまう。

人と共存をしている竜人族はそのほとんどが老人であり、目の前の村長のような若い竜人族はほとんどいない。隠れ里のような所で隠れ住んでいるようで、村長は数少ない例外というわけだ。

付け加えると竜人族は非常に優れた知能を持つており、この世界は一部を除けば絶対王政が敷かれていたりと中世の世界観にも関わらず、現実的な物事の考えをしている。かつ、一方で自然との一体化も重んじているらしい。

まあとにもかくにも、村の発展には彼らの知識は無くてもならないものとなっているのだ。

その為、村の村長のような重要な役職に彼ら竜人族が就いている事は決して珍しい事

では無い。

「？ オイラの顔に何かついてるかい？」

「あーいや、すみません。ちよつと若い竜人族の人を見るのが初めてで……」

「オイラ達はなかなか里の外には出ないからなあ、もつと皆世界に目を向けなければいいのに！」

身振り手振りを交えて興奮気味に話をする村長。想像通り、良く言えば行動力のあ  
る、悪く言えばかなり落ち着きの無い性格の持ち主のようだ。今もパティに話を元に戻  
すよう窘められている。

「いや、悪かったね一人で盛り上がっちゃって！ さて、これからの事なんだがキミさえ  
良ければ村のみんなにも挨拶してもらえないか？ 何しろこれから一緒に村を  
盛り上げていく仲間なんだから、みんな喜んでくれるはずさ！」

「や、それならもう済ませてきました。……本当に歓迎してくれましたね、ええ痛いほど  
に」

村の南側で食材を売っていた、見た目が完全な肝つ玉母さんな感じの人に思つくそ背  
中をバシバシと叩かれました。あれ絶対に元ハンターに違いないよ、それで愛用してた  
武器がハンマーで、ガノトトスに怪我を負わされて引退したんだそうに違いない。……  
違うか。

「おお、なかなか早いなあ！ どうだい、皆気の良い人たちばかりだったろう？」

俺の言葉に含まれている棘を全く意に介さず、村長はこちらに同意を求めてくる。

ああ、なんとなくこの人の性格がわかった気がする、と嘆息をしながらもその意見には何の疑いもなく同意をする。本当に良い人たちばかりだったのだこの村は。

こちらの心境を察したのか、嬉しそうにウンウンと頷く村長。

「それと、《緑色の屋根の家》をキミが寝泊り出来るようにしておいたんだ。家の中には給仕のアイルーを雇っておいたよ、何でもキミの知り合いだから丁度いいと思つてね」

「知り合いのアイルーって……」

まさかアイツか!? こんなトコまで追いかけてくるとは……。

「それじゃ、こいつが約束の手付金だ。これからよろしく頼んだぜ！」

そう言つて、まさかの存在に手を組み唸つていた俺に村長が約束の1500zを手渡してくる。大きくなってきたならともかく、この時点ではなかなかの大金。

村長がハンター誘致にどれだけ本気なのがわかる。

これからは俺も、この村の一員として発展に力を注いでいこう。

そう胸に誓いつつお礼もそこそこに、俺はいそいそと足早に新しい我が家へと足を向けるのであった。



「思ったよりも、頼りなさそうな人でしたね〜」

先ほどの会合の感想をパティはポツリと漏らす。その目線の先は屋根が緑の家へと向けられていた。

パティは大きな街に出てギルドの受付嬢の教育を受けてきている。その時に見ていたハンター達の粗野さの中に秘められていた自信と自負に満ち溢れていた様子とは明らかに違うからだろう。村長はそう判断をした。

「なに、誠実そうで感じは良さそうだったじゃあないか!」

「それはそうでしたけど……」

それでは街はいつまでたつても発展なんか夢のまた夢じゃないのかという思いを込めて村長の顔を見つめてくる。出来れば、もつといかにも熟練の技を持ったベテランという風なハンターに来て欲しかったのだろう。アヒルのように尖らせた唇は上手くいかなくていじけた子供を思わせ、村長はつついハハハ、と苦笑する。

「まだ、オイラたちのジャンボ村は出来たばかりでこれからなんだ。カレ、レナード君と同じようにね。これから、一緒に苦勞を共にしながら大きくなっていけばいいじゃあな

いか」

カレももう、この村の一員なんだからね、と締めくくる。パティは、その言葉を反芻するように口の中で繰り返しながら何度も小さく頷いている。

「そう……そうですよ、これからなんですよね……。くっつ、今はまだ私たちのこの村もまだまだですけど、もつともくつと大きくなつていくんですもんね！ ……ああ!!」  
村長、私いいこと思いついちゃいました!!」

「うん？ 一体何を思いついたんだい？」

突如、何か大事なことに気が付いたかのように大きなリアクションをしながら村長に話しを持ちかけるパティ。それに対し、しっかりと村長は耳を傾ける。いつだって、何気ない会話や想定外のところからいい案が思いついたりするものなのだ。村を束ねる村長としては、村で実際に暮らす仲間の一員からの言葉は決して聞き逃せるものではない。

「この村のシンボルなんです、家より大きな水車つていうのはどうでしょうか!」  
「……………」

「あ、でもやっぱり風車の方がいいんですかね？ 一番高い所の目立つ場所にあった方がシンボルっぽいし……。村長はどう思います？」

「ああ、うん……。まあ、村のシンボルはおいおい考えていくとしよう。まだ住人もそ

んなにいないし、やることは山ほどあるからなあ。ハハハ……」

未だ村は発展途上。と言うか未だ村というのもおこがましいほどのこじんまりした状況だというのに、彼女の頭の中ではこの村はもうドンドルマにも匹敵するほどの大きな規模になっているらしい。

村唯一の酒場の看板娘にしてハンターズギルドの受付嬢であるパティ。天真爛漫で愛くるしい彼女ではあるがその想像力の逞しさは、やはりアクの強いこの村の住人らしいのかもしれないなあ、などと自分のことを柵の上に押しやって村長はそう心の中でぼやくのであった。

「いやいやあの新米、存外我輩たちが思っているよりも出来るやもしれんぞー」

突如二人の会話に又ハハハハ！ と大きな声をした男が加わってくる。黒いインナーを身に纏い、クロオビシリーズと呼ばれる、頭や腕などの要所要所に赤い色をした防具が装着されている。ハンターの教官として、その実力をギルドに認めてもらえた証である。

村の人から教官と呼ばれているこの男。実はその粗暴そうな印象とは裏腹に、事実これまでにも何十人も新人ハンターを育て上げてきた経験を持つ優秀な人材なのである。村長は、彼の未だ若輩故に乏しい人脈を、それでもどうにか駆使してなんとかして一人の元ハンターを村に引き入れることが出来たのだ。

「試しに狩りについての知識を訊ねてみたら、まあ少しうろ覚えのところもあったが、あの年にしては優秀と言つてもいいほどの知識量だったからな！」

「へえ、それはそれは……」

ハンターの腕前としては、知識は決して外すことの出来ない要因である。例えば、狩猟対象の習性を知らないとは知つてゐるのでは狩りの成功率は段違いに変わってくる。腕っぷしだけでは、ハンターは務まらないのだ。

それ故自然と知識に関することはハンター教官の目も厳しくなる。その教官をして、優秀と言わしめるほどのものを一つ持つてゐる。このまま順当にハンターとして成長をしていけば、間違いなく優秀なハンターになつてくれるだろう。

レナードがもしこの場にいれば、ゲームの知識を述べただけにも関わらずの好評価に、恐縮しつぱなしの状態になつていただろう。どこの勘違いものの小説なのだ、と。勘違いも何も正当な評価なのだ。

このジャンボ村のような辺境の地では、言い過ぎでも何でも無く行商の邪魔となるモンスターを狩猟するハンターがいるかないかで天と地ほどの差が出てくる。それが優秀であれば尚良い。優秀なハンターは村で最も高価な宝と言つてもいいほどの煌びやかな価値を放つのだ。



捕らぬ狸の皮算用だとわかつてはいても、大きくなった未来のジャンボ村を想像して村長はつい頬が緩んでしまう。酒場の椅子にドツカリと座った教官の横に座り、新たに村へとやってきたハンターの話をツマミに、いい気分で酒を飲んでいくのであった。



「ごっしじんさま〜！ 会いたかったですミヤ〜〜ッ!!」  
「どわあ?」

これから長い付き合いになる我が家へと入った俺を初めに目にしたのは、飛び掛ってくる見慣れたアイルーの嬉し泣き姿であった。

「おいニヤー、ちよつと離れろつて!」

「いやミヤーいやミヤー! もう絶対離れないですミヤー!!」

こいつの名前はネコニヤー。アイルーのメスだ。昔、村外れの草むらで行き倒れていたところを助けた結果、非常に懐かれてしまった。それ以来、家族同然の扱いをしてきた奴である。

ちなみに、名前を5秒で適当に決めたのは最大の秘密。コイツには由緒正しいとか何とかそれっぽい理由で説明しておいたものの、鳴き声がミヤーなのに名前をニヤーにし

たのは今でも痛恨のミスと自分を責め続けている。ぶっちゃけ凄く紛らわしいのだ。

その紛らわしきは名前と語尾だけではない。見た目猫なのに犬のような性格をしており、村ではいつも俺の後をついてくる可愛い奴なのだ。犬の従順さと猫の愛くるしさが両方備わり最強に見える。前いた村でも、拾いアイルーとしてではなく家族として、まるで仲のいい妹のように接してきたつもりである。

が、こいつには一つ欠点がある。いや、人によつては長所だと言う人もいるかもしれないが……コイツはドジツ子なのだ。それも、普段は特にミスをせずに優秀なのに肝心なところで物凄い大ボカをしでかす、というどこぞのあかいあくまタイプ。実際、村から離れることになった理由の一つがコイツのしでかした事なので、そのことについては弁解のしようもない。

であるならば、だ。常識的に考えて、そんな疫病神みたいな奴とはとつと縁を切ればいいと考えるのだろうか……

「はあ……。少しだけだぞ?」

「ぐしつ……わつかりましたミャー♪」

どうやら、そうするには少々コイツに情が湧きすぎてしまったらしい。

既に家族なのだ。だから俺は、どんなにコイツがバカな事をしたとしても決して見捨てられないだろうし、その逆もまた然りだ。

ただ。そう、ただ一つだけ言わせてもらおうならば。

家の天井を見上げて寝転がり、ニヤーの奴がゴロゴロと俺の体にじやれついてくるのを好きにさせながら。コイツが人間の女の子だったらなあ……とかついつい思ってしまうのは。

これは、誰にも責める事は出来ないだろう。

## 密林探索と青き狩人

次の日。最低限の身の回りのものを整理したのだが、まあそこまで多くも無かったおかげで昼頃には全ての作業が終わった俺は、一体どんな依頼が貼り出されているのかと暇つぶしがてらに酒場へ行ってみる事にした。

「あ、レナードさんこんにちは！ ダメですよー、昼間からお酒なんて」

「違う違う。その依頼掲示板の内容を見てみようとしただけだつて」

イタズラめいて人差し指をピンとたてながらこちらに言ってくるパティに対して簡単に返しつつ、確認に向かう。ちなみに、基本的にこの住人達はフランクな関係を望んでいるらしく、俺の態度や言動も速攻で砕けた物と変わり果てている。

(……………?) 掲示板に何も貼り出されてない?)

「なあ、パティ。何で掲示板に何も依頼の紙が貼り出されていないんだ?」

「ああ、それはですね…………」

「それはだね。キミの力がどれくらい分からないから、まずこちらが指定するクエストをやってもらおうと思つてね。それにまだ近隣の村々にはここにハンターズギルドの支部があることも行き渡つて無いからね、依頼が来るにはまだ少し時間がかかるの

「  
」

パティの言葉に被せるように、タイミングよくここに来た村長が後を継ぐ。

(……成る程、力試しか。考えてみれば当たり前だな、折角大枚はたいてやってきたハンターが身の程知らずなクエストを受けて帰らぬ人となつてしまえば大損だ。それにどうやら昨日聞いた話によるとこの地に定住する事を決めたハンターは未だ俺一人)

となれば向こうが慎重になるのも頷ける、というかむしろ当然だ。

「あゝわかりました、じゃあ何のクエストなんですかね?」

「ああ、まだこの辺の狩場の事を詳しく知らないだろうと思つてね。一番近い狩場なテロス密林に行つてもらおうと思つてるんだよ。詳しい依頼内容はこれだよ」

そう言い村長が差し出した紙によると、ドスランポスの狩猟と言うものであった。

今現在装備しているランポス装備を見ての判断だろうか、と考える。

ハンターは自分が倒したモンスター素材を使って、狩場にて己が身を守る鱗の代わりの鎧を、あるいは頑強なる甲殻に突き立てる牙の代わりの武器を作る。それは、純粹にそうした方が性能が良く生き残る確率が上がるという考えの他にも、そうすることで自分はこの装備に使われているモンスターを狩ることのできる実力を持つているのだと周囲に知らしめることができるという副次的なものも含まれる。厳つい恰好をするだけで一つの権威付けにもなるというわけだ。まあ中にはそれ以外の理由、常にこの肌

触りを味わっていたいとか言う人やなんか宗教的な意味合いでもってやっている変わり種もいるらしいが、それは横に置いておく。

ともかく、金属製の鎧を除くならばハンターの鎧はそのほとんどがモンスターの素材を用いているといっても過言ではない。

懐かしのゲームでは、装備が整っていなかった序盤だけでなくバカ高い装備を作ってもらった後にも、クエストの契約料すら払えなくなった時にもこのクエストにはお世話になったものだが。

「おや、ひよつとして自信が無いのかい？」

ふと郷愁の念に駆られて苦笑いを浮かべるおれの表情に、自信が無いと思ったのだろう村長が茶化すように聞いてくるので適当に返事をしてお茶を濁す。

「さて！ あんまりグダグダやっているといつまで経っても出発出来ないんで、そろそろ行つてきますよ」

「ああ、それがいい。君の可愛い恋人も、家で君が帰ってくるのを今か今かと待っているだろうしな！」

「ですね、ふふふ」

3人して、その村長の言うところの『可愛い恋人』の方をチラリと見る。

「ミヤツハ〜♪ そんな、恋人だなんてそんな恐れ多いミヤ、でもでも……」

こつそりと後をつけてきて、今現在は先ほどの発言を受けてクネクネと妙なダンスを道行く人々に披露している我が小さな家族を尻目に、俺はいそいそと船着き場へと向かうのであった。



巨大な組織であるハンターズギルドの構成員は、何もハンターだけではない。

むしろハンターは氷山の一角という表現が的確なほどに、表には出ないところで実に様々な人員が働いているのだ。

代表的なところではクエストを斡旋する受付嬢だろうか。少なくとも今後100年は安泰であろう組織において、女ハンターと違って命の危険も無く、かつオマケに言えば制服が可愛らしいという事もあって、特に辺境の女性たちの間では結構な倍率になっていると聞く。

当然、全員を無条件に採用するわけにもいかないために結構な難関である試験やら面

接やらを課すことになる。また、ギルドの顔な為見た目の麗しさも審査項目には課されている事も付け加えておく。

更に、狭き門を潜り抜けた後にも試験はまだ残っている。

ハンターの力量に適切なクエストを。

受付嬢には、クエストを受けにくるハンターの力量を見極める観察眼が必要ともなってくる。当然、見極めるためにはハンターの事についても知っていなければならぬのは当然だが、クエストの方も知っていなければならぬ。ハンターが体を極限まで鍛えるように、受付嬢は頭と観察眼、ついでに愛嬌を覚えるのだ。

ハンターズギルド主催受付嬢見習い向けの、モンスターについての勉強会も開かれる事になる。

存在している狩場についての様々な情報、モンスターの生態などだ。

草食種、甲虫種、獣人種、鳥竜種、飛竜種、魚竜種、海竜種、……と、これがなかなか馬鹿にならないもので、義務教育課程も存在しないこの世界では、これを苦にして辞める者も存在する程なのだ。

パティもそれらの厳しい勉強をパスしてここにいる。……普段の様子からはあまり想像出来ないが。

ちなみにハンターにも、非常に優しくはあるが一応は最初に適性試験のようなものが



ある。俺の場合一分で終了したが。

ハンターは実力こそが最重要で、素行その他は良いに越したことは無いが二の次。ギルドの言う事を聞いてくれればそれでいい、普段の素行は関係ないというスタンスなのだ。その為名簿作りは非常に簡易的なものしかありはしない。

そこで考え事を中断し、チラリと横を見る。

「今日もおいゝらは船を漕ぐうゝ！ 荒波大時化のゝりこえてゝ」

先程から続いた訳の分からない歌が終息に向かい始めた事を雰囲気を感じとり、そつと息を吐く。

（ああ、ようやく終わりそうだな）

今俺はテロス密林に向かう為、船に乗せられて移動をしている。船の上には気持ちよさそうに調子っぱずれの歌を歌っている俺と同年ぐらいの若い船頭との二人旅だ。

何を隠そう、彼もまたギルドの構成員なのだ。

初対面なので気を使っていた俺としては、軽く挨拶をした後いきなり歌い始めた彼をなんとなく止めることも出来ずに2時間が経過し今に至る。

と言うかここは海ではなく、大きめとはいえ河だ。荒波？大時化？なにそれおいしいの？ 状態のこの非常に穏やかな河で、果たして本当にそんな出来事があったのだろうか。非常に嘘くさい。

ともあれ、そんな彼の仕事も無くてはならないものだ。

行きは狩りの為にハンターが持ち込む種々雑多な狩猟用具とハンター自身を狩場に運び、帰りはハンターの他に、狩場でハンターの狩ったモンスター素材やらなんやらを持ち帰らなければならない。

彼のような裏方は知名度は低くハンターに比べてなかなか人気は出はしないが、非常に重要な役回りと言える。こうした支援を得て、俺たちハンターは初めて狩りに出るこ  
とが出来たのだ。

自分のおかげで辺境の人たちは生きている、などと思いが上がった事は考える事は出来  
ないと、話を初めて聞いた時からいつも感じていることを改めて心に刻み込む。

「~~~~~♪」

「……………」

鬱陶しい事に何ら変わりはないのだが。

◇

切り立った岸壁に挟まれた入江に降り立つ。

足元は砂浜ではあるが、幸いランポスグリーヴの中に砂の粒は入り込んではいない。

密かに危惧していた事が杞憂に終わり胸を撫で下ろす。そういうのは地味にイラつくのだ、ランポスグリーヴの気密性の高さに万歳といったところか。

テロス密林。

現在俺が降り立ったこの一帯の総称である。

木々が所狭しと並んでいるのにも関わらず陰鬱な気配が一切しないのは、燦々と降り注ぐ陽光と溢れんばかりの命の存在が挙げられるだろう。軽く耳を澄ますだけでも、生き物たちの生命活動を表す色々な音が聞こえてくる。

中央部には大きな空洞が存在しており、飛竜が時折生息している事もあるという。北部には謎の遺跡が存在している離れ小島もあるが、今回のクエストには関係ない。

支給品ボックスの中から応急薬と携帯食料に地図、それから携帯砥石の見慣れた支給品類一式の他に、支給専用の閃光玉としびれ罫を取り出す。村長が気遣ってくれたのだろう、大タル爆弾など他にもいくつかが存在するが、正直持ち歩こうとすると荷車が必要になるので相当動きにくい。

飛竜にならともかく、今回の相手はドスランポス。鳥竜種だ。舐める訳では無いが、倒せるという確固たる自信もある。今回はいつもの支給品セット（地図・応急薬・携帯食料・携帯砥石）にプラスして、念には念を入れ閃光玉としびれ罫を持っていく事にし

よう。

「よしっ！」

アプトノスの肉を日持ちするように燻製加工した携帯食料をモグモグと噛みながら地図をサツと眺め、記憶にあるマップと何ら変わりの無い事を確認した俺は、密林南部に位置するベースキャンプから、北部にあるエリア3に向かうのであった。

◇

今回ここに来た目的はただドスランポスを倒すためだけでは無い。とある確認作業も兼ねていた。

その結果如何によつては、俺は非常に強力な武器を得る事となるのだ。

それは知識。ゲームをプレイした事による、この世界で得ようとすれば命が幾つあつても足りない程の希少価値がある知識だ。

但し、勘違いをしてはならない。あくまで俺が今持っているのはゲームの知識だ。俺が実際に足を踏み入れているここ、テロス密林のモノではない。

正直言つて、初めは頭をまっさらにしてハンターをやつていこうと考えていたのだ。

新人と呼ばれる今よりも尚経験の無かつた頃。お尻にまだ殻の付いていた頃だ。それ

でもやっていけるといけるという、若さと無知特有の根拠のない自信を持っていた。ゲームと現実は違うのだという事を、賢しらに考えたつもりでの結論であった。

そしてそれが見事に、そして呆気なく打ち砕かれた。

先輩ハンターに付き従って、故郷の村近くの狩場でランポス狩りを経験した時だった。

——怖かった。

あの、俺を獲物としか考えていない無機物の様な瞳も、俺の柔い筋肉など容易く引き裂く事の出来る爪や、頭からかぶりつく事の出来そうな程バツクリと裂けた口の中にあるギザギザとした牙も。

全てが、恐怖の対象だった。

その時、俺はハンターの——人間の——貧弱さを知った。

ああ、何て俺達は弱いのかと。そう思い、そして同時にこうも考えた。

——ハンターは、為すべき事を全て為した上で狩場へ赴かねばならない。使える物は全て使え、使えるのに使わないのは慢心なのだ。

己が脆弱な肉体を鍛え抜き、頑強な武器や鎧で完璧に覆い隠す？ 確かにそれらは重要かつ必要ではあるが、それだけではまだ不十分だ。蓄積された知識を会得し、武器の

扱い方をひたすら反復練習で体に染みつかせる？　そう、それもまた必要な事だろう。そしてそれに加えて慢心の根絶と精神の安定があれば言う事は無い。そもそも人間という種は、圧倒的な力では無く蓄積された知識でもってこの世に覇を唱えようとしている筈だ。心・技・体、その重厚さこそが唯一モンスター共の独壇場を打ち破れるのだ。例え人間の中では身体能力に優れるハンターであつても、だからと言つて技と心を蔑ろにしていい筈が無い。

その結論に至つた俺にとつて、テロス密林だけでも100を超える数のクエストを成し遂げてきたその知識の量は、あまりに勿体なさすぎた。

今までの経験から言わせてもらえば、ゲームの知識は図鑑で読んだ知識に似ていると言える。精密な、絵が動く図鑑だ。

それだけでは通用はしないが、かといつて全く役に立たない訳では無く。そこで得た知識は確実に、実際の狩りの現場において何らかの助けとなつてくれる。

つまり、記憶に残るテレビ画面の中の作り物の密林と、この眼前に広がる圧倒的な迫力を誇る狩場『テロス密林』。それらの知識の摺合せが、今回のクエストの最優先目標なのである。それらが完了した時、俺は一段階上へと行ける筈だ。



「ここにも亀裂がありましたっ、と……」

カンツという打ち鳴らすような甲高い音が一瞬だけ響き渡る。ピツケルを振り下ろした音だ。

現在地点はテロス密林北部。当面の目標地点であったエリア3。南部にあるベースキャンプより東周りにぐるりとエリア1、2を通ってきた。当然、狩りの役に立つキノコ類や薬草類、鉱石類が採れる位置は全て調査済みだ。荷物になるので、少々勿体ないが一部の素材以外はその場に置いてきている。運よく帰りにまだ残っていれば、拾って帰ろうと心のメモ帳に書き込んでおく。

今のところ、植物や菌類の生えている位置等に幾らかの差異こそあるものの、僅かな修正で事足りる。

どうやら俺の知識は、十分に活用出来るレベルにあるようだ。そしてそれは地形だけでなく、モンスターの知識も同様だ。

まだまだ未検証の知識も多くはあるが。

大量の知識に胡坐をかいて、一切確かめもせずに行動すれば大きな痛手を被る事にもなるだろう。しかしその事に気が付き、普段から心がけていれば問題は無い。

得た調査結果にニマニマとしてしまうが、それも仕方がない。

俺の知っている情報とは、それほどまでに価値があるのだから。

狩場は遠い、近場のコンビニに行くのとは当然のことながら訳が違う。

さらに付け加えれば、そこで行う事は命を懸ける事なのだ。

自然、危険地帯である狩場に赴くハンターは回数を減らしてでも万全の準備をしていこうとする。

そしてそれが俺の知識には当てはまらない。

つまり俺は、この時点でどんな老練なハンターであろうとも勝てぬ程大量の、ハンターとしての知識の元を得た事になる。

後は少しずつそれを、実体験によって消化し自分のモノにするだけという訳だ。



「ん？ ……お出ましか」

別エリアから、ランポスを2頭引き連れたドスランポスが現れた。見た目はジュラシックパークで登場したヴェロキラプトルが青くなつたといった感じ。この緑と茶色溢れる密林で、保護色とかはガン無視なのは言うまでもない。

狡猾な雰囲気を漂わせるのはこいつら鳥竜種の特徴だ。更にソレに併せて、群れの主



であるドスランポスはどこか悠然としているようにも見える。ランポスの体を覆う鱗には青を基調に黒い縞模様が描かれているが、ドスランポスはそれに加えて体が一回り大きく頭部には鮮やかなオレンジ色のトサカがあるため、遠目にもはつきりと分かるのだ。

戦端を開いたのは群れの長の咆哮。真上を向き、喉を震わせて行われるそれはまるで、開戦を告げるラツパの様であった。否応なしに、こちらの頭の中も戦闘用に切り替わる。

その声を聴いて即座につき従っていたランポス2匹がこちらに向かってくる。

強靱な脚力を用いて飛び掛かってくるランポスAに対し、俺は冷静にアイアンソード改を縦に振りぬき叩き込む。

大きな動作だ、通常であったならば横にステップを踏んで躲したのだろうか。ランポスAが今いるのは、迂闊にも空。

空の住人たる証の翼を持たぬランポスでは、回避行動など取れる訳も無い。

「ギ、ギギャオオツ!!」

鉄の塊によるタイミングが合ったその一撃は、あまりに容易にランポスの体を引き裂く。

断末魔すら上げることが許されず、ボロ屑のように、いやボロ屑になった己の同胞。

その、なれの果てを見て一瞬。ほんの一瞬だけもう一匹のランポスが動きを止める。  
だが。

「それで、十分つ……！」

重量を武器とした怒涛の連続攻撃は、大剣の強みの一つだ。縦斬りから体を極限まで捻りあげ、大地に着いたアイアンソード改を無理やり横の薙ぎ払いへと移行させる。

体の捻りによって得た威力を余すことなく発揮した鉄の暴力は、先ほどの一体同様に碌な抵抗すらさせずに肉片へと変えてしまう。

「……はあ」

剥ぎ取る事など出来そうもないランポス（だったもの）を見て、未だドスランポスが同エリア内にいると言うのについ溜息を吐いてしまう。

これが大剣の辛いところだ。片手剣のような重量に頼らない得物であればそんな心配もしなくてもいいのだが、逆に大剣のような一撃の威力が高くとランポスのような小型で脆弱な相手だと頼りが残らない事が多々ある。

その重量が飛竜種相手だと頼りになるのだろうか。

残念ながらもまだ飛竜種の出てくるクエストを行っていないため、武器防具の素材集めが普通より困難というだけでしかない。

だからといって、マイフェイバリットウェポンが大剣だというのには変わりはない訳

だが。

（しっかし、何とも不思議な気持ちだな。ゲームの頃は雑魚と断じていたのに、実際に戦ってみて恐怖の対象へと早変わり。そして今ではまた雑魚……とまでは言わないけど、脅威とは感じないにまで評価が下がる。相手は何も変わっていないのに、やっぱこれは俺が——）

「ギギヤアアツ!!」

「むおっ……!」

鳴き声と共にドスランポスが飛び掛かってくる。思考を中断し咄嗟に大剣を盾にしてそれを防ぐ。

防がれたと見るや、一切欲張る様子も見せずにバックステップを踏んでドスランポスは後ろに下がった。それに対し、俺はあくまで一定の距離をとる。つかず離れず、真正面。これがポイントだ。

（いかん、今のは凄く駄目な部類の失敗だ）

自分で自分に最大級のバツテンを付ける。狩場で想いを馳せるなど、死んで当然、生きて不自然の所業。

これで相手が飛竜種ならば、おそらくは死んでいた。そう考える理由には、両者の戦い方の違いがある。

ランポスは飛竜種のように一撃必殺な戦い方ではない。むしろ獲物に対し小さな傷を作る攻撃を数多く行つて仕留めるタイプだ。同じ種のゲネポスやイーオスもまた同様だ、ゲネポスは麻痺毒、イーオスは猛毒でもつて自分が危険を冒して獲物に接近せずとも仕留められるように仕掛けてくる。

個体の能力では決して優れているとは言えないものの、観察力と判断力に優れているランポスならではの戦い方を行っているのだ。今もしつかりとドスランポスの方を見て付け入る隙を窺っているこちらに対し、ジツと鳥類めいた眼差しを向けこちらの隙を窺っている。

狡猾な狩人。

ランポスにはその言葉が相応しい。力を持たぬからこそ知恵で補う。その在り方は、数多存在する人間以外の生き物の中で最も俺たちハンターと近しいと言っても過言ではない。

対象が人間以外の場合には、という但し書きが付くが。

警戒心が強く縄張り意識の高さからか、俺たち人間にのみ前述の態度は一変する。動きこそ同じままではあるが、まるで怒りで我を失っているかのような稚拙な勢いで攻撃を仕掛けてくるのだ。

そこに、付け入る隙がある。

「さあ来いよ、お前らの憎くて憎くてたまんねー人間様がお越しになつてんだぞ？　来い、来い、来いっ……！」

大剣を背負い直し、目の前でチョコマカと揺れ動く。言葉の意味を理解しているのは判らないが、していなかったとしてもさぞや鬱陶しい事だろう。

「——来たっ！」

真正面で動き回っていた俺が目障りになつてきたのか、ドスランポスは足を止めて獯猛な牙で噛みつきにやつてきた。

俺は、これ待っていたのだ。

ドスランポスのフットワークの軽さこそが、大剣使いにとつての最大のネックとなつていた。足が止まった今、奴はただの青い的に過ぎない。

「で、やあああああつ!!」

噛みつきを身を逸らす事で体を回してかわしたと同時に、やや変則的な抜刀斬り。その無防備な背中へと背骨よ砕けよと言わんばかりの一撃を加える。

「ギ、イアアア!!」

(チイツ、浅いか)

手応えの無さを感じる。かわした姿勢で振つたのがまずかったのか、ランポスのよう

に両断どころか背中に横一文字の傷しか作る事が出来ていなかった。背中の鱗が数枚弾け飛ぶが、それだけだ。致命傷には程遠い。

「あ、ちよつと待てコラッ!?!」

様子がおかしくなったドスランポスは、それはもう惚れ惚れする程一目散に別エリアへと逃げ出した。

死への恐怖が、人間への怒りを上回ったのだ。

「くっそ……」

出来る事ならば、ここで仕留めておきたかった。奴に限らず、手負いというのは最も厄介な状態なのだ。

「……まあ、済んだことは仕方ない、か。それより、奴が入っていったのはエリア8。……と、いう事は。やっぱりさっきの攻撃で瀕死なのかね?」

自分の一撃が予想以上に強かった事に、思わず「よーしよし」と頬を緩めてニヤケてしまう。

奴の向かった先は、おそらくここエリア3の下部に位置する空洞、エリア8の先にあるエリア6だろう。MH2ではドスランポスはそこで眠る事によって体力を癒していたし、事前に仕入れた情報でも同じ事を言っていた。

飛竜種ならばともかく、ドスランポス程度の鳥竜種であれば他のハンターも交戦経験は多く情報も集めやすい。情報の精度としては、まず間違いないと言っていいたいだろう。

エリア3からエリア8へは一方通行の道となる。理由は簡単、その方法が高さが10mはあるであろう高さから落ちる事だからだ。

エリア3の入口と繋がっている高台から、片足を掛けて下の光景を眺めてみる。

「ドスランポスは……いない、か。残念」

恐らく、早々に寢床であるエリア6に向かったのだろう。

実に逃げ足の速い事だと感心してしまう。無論、面倒事を増やしやがってという思いからの皮肉な事は言うまでもない。

ともあれ、ここでまごまごしていてもしょうがない。全身鎧を着ているとは思えないような軽やかさでジャンプをして、高台の下に広がる岩棚の上に危なげなく着地をする。うむ、10点。

こんな芸当が可能なのも、元の世界にいたかつては一切感じられなかった『気』のおかげだ。体が資本なハンター達は気による身体能力の向上によって、こうした人間離れをした動きをする事が初めて出来るようになるのである。

それでもようやくモンスター達との戦いにおいては、「知識と知恵を駆使して、上手く立ち回れば勝てる」というスタートラインに立てたという程度なのだから、自然の強さがよく分かるというものだ。

「さーて、さっさと狩って帰るか……」

気の抜けた表情でそう呟いた時。

「ギ、ギャアツ！」

「ぐ、おっ!!」

——背中に衝撃と共に激痛が走った。

「く、おおおおおっ!!」

何とか振り払い俺に激痛を与えた主を確認すると、そこには赤い目を爛々と輝かせ舌なめずりをする手負いのドスランポスの姿があった。

「……………」

回復薬は飲まない。痛いとはいえ動きに支障を来す程では無いし、目の前にコイツがいるのにそんな隙を見せるような事は極力したくない。

慌てずに、相手の様子を観察しながら大剣を抜く。鞘がさっきの衝撃で変形して抜けなくなっただかもと頭に浮かんだが、幸いそんな事も無くあっさりとは抜けた。

「——悪い」



アイアンソード改を構え、相手を見据えながらポツリと呟く。

「本当にすまん。一応気を引き締めてたつもりだったんだけど、正直、心のどこかでお前を侮ってた。所詮ドスランポス、所詮、この程度のクエストで出てくる奴、所詮瀕死、放つといっても死んじまう……てな感じで」

「ギア、ギギヤアアアッ」

まるでこちらの言葉に抗議するかのよう、タイミング良く威嚇の声が上がられる。その様子に軽く笑いながらも俺の目は、先程とは比べものにならない程に真剣となっていた。見えはしないが、そう確信していた。何せ心がそうなのだから、そうなっていない訳がない。

「片手間程度に考えてすまんかった。もう侮らん、そんな要らねえもん捨ててやる!!」

ひとまずは、目の前の貴様を一切の慢心を捨て全力で叩き潰してやる。

そう決断した瞬間再び奴が牙を剥き出しにして襲い掛かってくる。

傷を負った背中がちりつく。ドスランポスの動きに全神経を傾けると、語りかけてきている。

飛び掛かってくる奴の爪が見える。一つ一つが刃物のように鋭いそれは、呆気なく空を切る。

当然、体一つ分右に避けた俺がその隙を見逃す筈も無く。

「で、やあああああああつ!!」

横薙ぎに奴の脚へと鉄の大剣を叩き込む。先程とは違つてクリーンヒットだ。グチャリと、僅かに肉の潰れるような感覚と共にエリア中央へと吹き飛ばす。脚を潰したのだ、最早まともにステップを踏む事など望めはしないだろう。

「ギ、ギアアア……」

か細い鳴き声は一体何を訴えようとしているのだろうか。あるいはコイツにも愛する家族がいて……そこまで考えて、ブンブンとかぶりを振る。

(いかん、叩き直すべき悪癖だな。未だに日本人的な感性が残つてる)

哀れに思つて見逃す。

それはハンターとして絶対にやつてはいけない事だ。愚かなセンチメンタルに浸つてそれを行うという事は即ち、目の前の対象も含めあらゆるものを侮辱しているに等しい。

「ありがとう。お前のおかげで、気付かなかつたような所にあつた半端な気持ち、また一つ堅くなる事が出来たよ」

息も絶え絶えに横たわるドスランポスに勝手な礼を言いながら、アイアンソード改を後ろに構え、静かに気を貯めていく。

「これで、終わりだ。俺とお前の戦いも」

体に大量の気が溜まっていくのを感じる。だがまだだ。

「——お前は、俺に負けたんだ」

赤く、紅く。内を循環していく気が、放出先を求めて体の外にまで出てくる。少々過剰に言うならば、キャンプファイアーのように自ら発光していく。だが、まだだ。後、少し。

「もう一度言う！ お前が負けて、俺が、勝ったんだあつ!!」

吼えると同時に限界まで込めていた力を最高のタイミングで解き放つ。さながら太陽の如く苛烈に発光する程の濃密な気の全てがこの一撃に込められ、目の前に横たわるドスランポスへと振り下ろされる。

振り下ろされたアイアンソード改はドスランポスの首を両断————するに留まらず、洞窟の石床をクレーター状にべっこりとへこませる程の威力を見せる。ビシビシと罅割れた床はどこかクモの巣を彷彿とさせている。

手に持つ大剣を鞘に入れようとするが、つかえる。あまりの衝撃にアイアンソード改では耐えきれずに歪んでしまったようだ。ボーン系でなくアイアン系を使っているのはこういう事態が起きないように頑丈さを重視した為だったのだが、その甲斐も無かったようだ。

仕方が無いので抜き身のまま横に置きながら、疲労感に任せてヒンヤリとした心地の

石の床の上へべったりと座る。

「はあ、はあ……これが、俺の全力だよ」

ドスランポスの潰れた亡骸に向かつて笑いかける。それは、ある種命をかけて戦いあつたものへの仲間意識のようなものだったのかもしれない。

俺にとつて、生半な武器防具であるのなら無い方がマシ。

本気で放てば石の床にクレーターを引き起こしてしまふ程の異常な力。もしかすると、素手で殴りつけた方が、今回もあっさり終える事が出来たかもしれない。

意識して気さえ込めれば体の堅さとして腕力同様に強化され、少なくともランポスよりは固くもなれる事は実証済みなのだから、そう思わずにはいられない。

何故。

あえて律儀に姿勢を守り、安い武器を持ち、ただ動きを多少なりとも阻害してしまふだけの意味しか成さない防具を装着して。まるで『普通のハンターのように』狩りを行っているのか。

———何だ、この馬鹿げた力は……！———

———これじゃあ、まるで……———

「……ぐぬう、ケチがついた」

ふと、前の村で微かに耳に入った言葉が脳裏をかすめる。普段は思い出しもしなかったのに、どうやら頑固な油污れのように心にこびりついていたようだ。

深呼吸を一つする。ゆっくりと、肺だけでなく体中に満ちるように。この狩場の空気でいっぱいにするように行う。

「俺は、ハンターだ」

これは、挑戦状だ。

これから先、ハンターとして生き、ハンターとして死んでやる。その為の、宣言。

具体的にどうすればいいのかも分かりはしないし、間違う事もあるだろう。目標となるものの存在もあやふやで、どこに向かえばいいかも分からないけれど。

「きつと、きつと俺はヒトとして……ハンターに成ってやる」

この日この時この場所で、俺は世界に向けて挑戦状を叩きつけたのであった。



「……まあ、それはともかく。お楽しみ素材を剥ぎ取りたいむ……え？」

マズイ。

ジワジワと、汗が額から浮き出てくるのが感じられる。目の前の光景を信じたくは無

い、そんな感情から生まれる行為。

目線の先には、死後長時間に渡り放置していた為に体内にいる微生物によって武器防具素材としての価値が一切無くなってしまったドスランポス（だったもの）があるのであった。

「嘘だと言つてよ……いやマジデ」

自分の悲しい過去（笑）と世界への挑戦状（笑）に酔っている内に時間切れてあなた。時が経てば見た目こそ変わりはしないものの、防具にも使用できなくなる程に劣化してしまうのだ。原理は不明。体内に巢食う寄生虫の仕業だとか、腐敗ガスの仕業だとか、果ては天上におおす神々が死んだモンスター之魂を天へと連れて行った為だとかいう説まであるが、ともかく時が経てばモンスター特有の強度も特殊な力も全て失われてしまう現象は事実存在している。劣化を防ぐには、その部位を体から切り離しておくしか方法は無い。

とにかく、こうなってしまうえば精々がおしやれ目的のアクセサリーに使われる程度のもものとなってしまふ。それでも飛竜種のようななそもその流通量が少ないのならともかく、ドスランポスはその実力の程良さから多くハンターに狩られている存在だ。希少価値などありはしない。よって高く売れる訳も無く、ここに来るまでの労力やら時間やらを加味すれば、結論儲け無し。と言うか赤字確定。

(教訓……。狩りが終わるまでは、自分に浸るのは止めましょう……)

結局一縷の望みは届く筈も無く、手に入れた素材は泣く泣く最初の遭遇で弾け飛んだ鱗数枚のみで終了となるのであった。

## 師弟（仮）、結成。

「頼み……ですか？」

あのドスランポス狩りより約二ヶ月。ここに来たのが温暖期の初めだったので温暖期ももうすぐ終わるだろう、そんな頃。幾つものクエストを無事に達成させていき、いつものようにクエストに向かおうとしていた俺に村長からクエストとは別に頼みがあるらしい。酒場でパティにクエストの承認をもらおうとした時に、通り道で声をかけられた。

「ああ、そうなんだ！ 実は今度新しくハンターが来ることになったのはいいんだけど、そのハンターがキミよりも経験が浅い女の子みたいでさ。ある程度きちんとした先輩がいないと最悪早死にしちまうかもしれないだろ？ そこでこれから行くクエストに同行させてもらえないかと思ってるんだけど、どうかな？」

村長はこちらの様子を窺うようにお願いをしてくる。

「あー……けど俺がこれから行くのはイヤクツクですよ？ 俺より若い初心者が行くにはちよつと厳しいんじゃないですかね。それに、俺みたいな若輩者と行くより最近村に来たハンターの女の人がいたじゃないですか」



「実は……もう断られてしまった後なんだよ」

「……それが駄目なら、教官とかでも」

「イヤ、教官だとイザと言う時に手助けしちやいけないからなあ……」

「ああ、そういうやありましたねそんな規則……。確か、現役ハンターと違つて定期的な収入やら何やら、様々な特権が与えられる代わりに狩りに出ちやいけないのでしたっけ。あくまで教導目的に限るとか何とか」

補足しておく、これには昔起きた二つの事例の影響がある。

一つは十分に暮らしていけるだけの金をギルドから貰つていたにも関わらず現役ハンターと一緒に暮らつて狩りに出ていたハンター教官がいた事。一時期は王侯貴族や大商人よりも尚稼いでいたという事で、色々と問題になつたらしい。

まあこれはいい、今回の件ではあまり関係が無い。

もう一つが問題だ。

ある時、とある村で新人のハンターがいたらしい。新人ハンターは、やる気こそ人一倍溢れてはいたものの実力の方は今一つ。その新人ハンターの事を、そのハンター教官は手塩に掛けて育てていたらしく、周囲からはまるで師匠と弟子、あるいは親と子のようになつていたらしい。二人でよく一緒にクエストを達成し、実地で色々と教えたりしていたらしい。

元来が腕のいいハンターであっただけに、ハンター教官は新人ハンターの隙をそれとなく埋める事で新人ハンターの実力を超える力を引き出すように働きかけていた。事実その新人ハンターのクエスト達成率はかなり良いものとなっていた。

ある時、その新人ハンターの元に評判を聞きつけた人が名指しでクエストを申し込んできたらしい。

しかしその時ハンター教官はどうしても抜けられない用事があり、一緒には行けなかった。クエスト自体は無いレベル、今まで何度も教官と一緒に行ってきたモノで慣れている。そろそろ一人でも問題なくこなせるのではないか、新人ハンターは一人でクエストを達成する事を決断した。

そして、事件は起きた。

数日後、新人ハンターは冷たい姿で村へと戻ってきたらしい。死体が戻ってきただけでもまだマシだ、普通その場で骨まで食われてオシマイなのだから。顔見知りになっていたアイルーが、小型のタル爆弾で怯ませた隙に何とか救出したらしい。しかし、あるいはそちらの方が酷い仕打ちだったのかもしれない。ソレを見たハンター教官は、絶望を顔に浮かべたまま村から消えてしまったと言う話だ。

ギルドは、例えば新人には飛竜種の討伐を頼まぬように、そのハンターの実力を鑑みた上で達成可能だと判断したクエストしか斡旋はしない。その大事な判断材料の一つ

が、どんなクエストを達成したのかの帳簿なのだ。帳簿を含めた種々雑多な情報を加味して、最終的に受付嬢がハンターへと提供するクエストを判断している。

ハンター教官と一緒に行動されては、その判断が付かなくなってしまう。熟達なハンター教官の存在がノイズとなるのだ。

これら二つの事例を重く見たギルドは、訓練ならともかく決して実際のクエストで手助けを行わぬよう固く禁じているのだ。

もしも教官が新人と一緒にクエストに出掛けて色々と手助けをしたとしたら、それだけで教官免許剥奪、更に再度のハンターへの復帰を禁じられている為、教官はただの人となってしまう。

なるほど、それは今のこのジャンボ村にとっては看過出来ない事態だろう。あまりにハイリスク過ぎる。

「今度来るハンターの子はキミと同じで優秀だね！　なんとドスランポスやドスファンゴまでならもう倒してるんだ！」

「はあ、それは確かに凄いですねえ」

この世界には、ゲーム内と違って様々な種類のハンターがいる。

実力が伴わないが故に、モンスターなどそつちのけで狩場に豊富に存在している素材を専門に集めている『素材ハンター』なる人種も珍しくは無いのだ。基本的に、素材ハ

ンターにはドスランポスも倒せない人がなる事が多い。

この世界では、一流のハンターかどうか一種の目安としてイヤンクツクが取り上げられる事が多い。いくら別名が『怪鳥』で分類上は鳥竜種にカテゴライズされようと、その見た目と攻撃方法が飛竜種とそっくりな事から飛竜に挙げられる事も多い。

飛竜（偽）なイヤンクツクが倒せるだけの実力があれば、村レベルであれば十分一人でも維持出来るだろう。

そういった判断基準で行けば、確かにその新人ハンターは若くして一流に足をかけている事になる。

「何を言ってるんだ！ キミはもう既にイヤンクツクを討伐したじゃないか！ それを考えれば、キミの方が優秀じゃあないか！」

そうなのだ、先ほど一流云々言っていた訳で気恥ずかしいのだが。

俺も、既にイヤンクツクを討伐済みなのだ。それも複数。この狩りでようやく《クツクシリーズ》が全て揃う計算になる。シリーズと言っても、クツクシリーズは胴と腕と腰の三つしか無い為、スキル等を考慮に入れた関係の無い防具を身に付ける予定である。

イヤンクツク討伐が事実とはいえ、あんまり開けっ広げに褒められると背筋の辺りがゾワゾワする。なので、慌てて話を戻す。

「とにかくくつ！ ……すみませんが、俺には無理です。少し待って、他の人に教わってください。———おーい、パティ。クエストの承認お願い」

「はいはい、分かりました！ ペツタン、と」

ゴツイスタンプが押される音を尻目に、俺は足早にその場を立ち去るのであった。



「うーん、フラれちゃったかな」

腕組みをしつつ、村長は苦笑いを浮かべる。

「あんまり露骨におだて過ぎたかなあ……？ うーん、鼻を膨らませて喜ぶと思ったんだけどな。あの年頃は難しいよ」

ハンターにとつては知識は貴重な武器であり、財産だ。おいそれと他のハンターに教えるものではない。

村全体として考えてみれば、知識の共有とはそれだけハンターの質が上がる事となり、結果的に恩恵となつて返ってくる。

だが翻つてレナード個人にとつては、それは何の利も無い行為だ。細々とした利はあるかもしれないが、少なくとも失う物の方が大きい。

それが理解出来る為、村長はあまり深追いはせずにした。レナードの拒否する姿勢は、ハンターからすれば何らおかしくはない対応であるが故に。

「……ああ、そうだ。この事を早くあの子に伝えておかないとなあ……」

あの子、とは件の有望な新人ハンターの事だ。断られたことを知らない為、もしかするとクエストの為に準備を進めているかもしれない。もしそうだとすると、この事を伝えるのに少し心苦しくもある。

「……あれ、いない？ この辺にいてくれて言っておいたんだけどな。オーイ、パティ？ あの子、セイディはドコ行ったか知らないかい？」

「えー？ さっきレナードさんの後を追うように栈橋の方へ行きましたよ？ てつきり二人で行くものだと思ってたんですけど、ど……？」

タラリ、と汗が垂れ。明朗快活な村長にしては珍しく、口ごもるような仕草をし。パティもパティで、その想像力豊かな頭でもって容易に現状のまずさに思い至り。

「——ま、いつか……ア、アハ、アハハハ！」

真に息の合ったタイミングで、仲良く二人して問題を放り投げるのであった。



「はあ……」

あの船頭の待つ棧橋へと歩く俺の足は、どこか活気の無いものとなっていた。

先程、村長の話を聞くまでは晴れやかに感じていた陽光にもどこか悪意を感じるように思えてしまうのは、やはり心境の変化だろう。

「別にさあ、一人が絶対に良いって訳じゃないんだよ……？ いやホント」

他のハンターと狩りの仕方があまりに違うのだ、例えばパーティを組んだとしても息を合わせる以前の問題になる。

他が周到な準備の果てに為そうとしたことを、こちらは半ば片手間に出来てしまう。

「—————おい、いいー」

それにあのドスランポスとの戦いでハンターらしく狩りを行うと宣言したにも関わらず、あれからも俺の心は誘惑に絶えず揺らされていた。

今の俺の持つ得物は、蛇剣〔蒼蛇〕。これはドスランポスの素材を使用する必要がある武器で———そう、あのドスランポスの素材を用いて作った武器だ。俺はこれを見る度にあの時の思いを思い返すことが出来る。にも関わらず。

『ハンターは使えるものは全て使う。それが最善』

これが俺を誘う誘惑だ。

この言葉を俺は、蛇剣の力を借りても未だ否定できずにいる。一理どころか、紛れも

無く正しいからだ。

全力の溜め斬りを武器が耐えきれないと言うのなら、耐えられるだけの素材で作ってもらえばいい。そうすればいずれ、この大剣すらも半ば片手剣の様に振り回す事の出来る腕力でもって、並み居るモンスター共を狩り尽くして――

「――つてえっ!」

(本当に、それでいいのか?)

また、お馴染みの展開だ。その言葉に異議を唱えるという事は、俺自身どこかで『卑怯染みた怪力のみでモンスターを狩る』事に違和感を持つている事に他ならない。

勘違いしてはならない、雄大な自然の中ハンターとして在る為に力は確かに必要なのだ。

だが、人の身に余る力。ただそれのみを認めた瞬間、多分俺は対等な仲間を失う。そんな気がしてならない。

仲間とは、己の足りない所を補いあうものだ。独りで在る。それが可能なこの力の前に、対等な仲間など有り得ない。

(背中に背負っている蛇剣【蒼蛇】よりも、この両腕の方が頼もしく見える時点で、おかしい。それは、確かにおかしいはずなんだ)

「――つて下さいっ!!」



直視したくはないが俺の心の状況を客観視すると、だ。  
要するに、俺は怖いのだ。周りから浮いてしまうのが。

まるで、歪なバランスを保つかのように。体が強くなればなるほどに、精神の方が弱くなってきたている気さえする。

村人からは強すぎる力を見て、怖がられ。同じハンターからは、自分には無いと嫉妬され疎まれ。果てには、隔離されでもするのだろうか。

そんな情景が目には浮かんでしまう。

あるいは、ただの被害妄想なのかもしれない。ただ単に、凄いなと賞賛されてオシマイなのかもしれない。存外大した事も無いレベルの怪力なのかもしれない。

だが、俺は一度それを経験している、かつて暮らした村で。いや、そこまでは言えない。そんな大層なものでは無かったし、そうなる前にその場から逃げ出してきた。

それでもその感情は、何もしなければいずれ芽吹く事は確かだった。ただ単に、周囲の感情が大樹となる前に俺がその場から逃げ去ったというだけで。

そつと溜息を吐きつつ、棧橋の先に近づく。いつものように、あの若い船頭がスタンバイしている。陽気に片手を上げて来たので、こちらも片手を上げて応答する。

（ん、何だ。……後ろ？ 後ろを振り返りやいいのか？）

どこか慌てたジェスチャーをしてくる若い船頭に、後ろを見ると囁し立てられる。

振り向くと、パタパタとこちらも慌てて駆け寄ってきている見慣れない若い女のハンターが一人。何か、パティか村長の伝え忘れた事でも言いに来てくれたのだろうか。

ぼんやりそう思いながらも、うじうじと片隅で考え事を続ける。その為、足は依然船頭のいる船の方へと惰性で動いていた。

「——ああ、つまりはあれか」

悩みと言うのはほとんどの場合、順序立てて考えれば何かしらの道筋は見えてくるモノ。

例に漏れず、思考の果てにふと気づく。

もしも、俺の力を見ても尚恐れず、それを考慮に入れてのパーティを組める人物がいるのだとしたら。俺の怪力や耐久力が、キワモノ揃いのハンター達同様「個性」と仲間認められれば。俺のこの油污れの様に頑固で鬱陶しく心にこびり付く悩みは、ある種解解決に至るのでは無いか？

「ちよつと、待ってくださ〜いっ!!」

そう、思い至った瞬間。俺の目の前は濃密なピンク色に染まった。くせえ。



「ほ、本当に申し訳ありませんでしたっ!!」

「……つまり、あれか。さつきから声を掛けてたのに、俺が何やら考え事に夢中で気づきやしない。これでは一人でクエストに行ってしまう。マズイ、どうしよう。そうだ、何かを投げつけて足止めすればいいんだ。ごそごそ、いいところにペイントボールがあるじゃないか。——で、投擲。見事命中し今に至る、と?」

「……は、はいい」

「……………」

「うっはあく、頭からべっちよべちよだぞー。くっさくて鼻が曲がりそうだー」

「……今の流れで何か、言いたいことはあるか?」

一応、何か悲しい誤解が無いかどうか聞いておく。

「考え事して歩いてちや、危ないですよ? メッ!」

「そうか、そんなにオシオキされたいか」

「ああつ!!? ご、ごめんなさいごめんなさい!! 調子に乗ってゴメンナサイツ!!」

「普通に、こつちの船頭さんに声を掛ければいいだけにも関わらずだ。俺にだだっ広い狩り場で使うモンスター用のペイントボールを投げつけてきたのは、あれか。——俺に殴り飛ばされたいとかいう酔狂な、あれか？」

「全然違いますです、ハイ！ ただ単に足を止めたかっただけなのですが、ハイ！ 少しばかり、パニツクになってしまっただけです。それでこんな事になってしまいました！」

清々しい程に綺麗に頭を下げてきているこの緑髪少女、名前をセイデイというらしい。話を聞くと、どうやらこのセイデイこそが先ほど村長が頼み込んできた新たなハンターらしい。確かに見た事は無い顔だった。

「ふう……もういい。もう怒ってないから、君はとつと帰んな」

「……えーと、ですなぁ？ もうお船が棧橋から出発してしまっている現状、ちよつとお家に帰るのは無理なんじゃないかなあ……と」

「……………」

正直、完全に気が付いていなかった。

現状俺は、未だしつこく頭部にこびりつくペイントボールを何とかかんとか目元だけでも取り除いている訳だが。ペイントボールは、ペイントという名前ながら、そのピンク色ではなく臭いこそが最大の特徴となっている。強烈なまでの臭気によつて、ハンターは獲物の位置を狩場のドコにいても嗅ぎ分けられるようになるのだ。それを今、顔

面に受けている。

当然、俺の鼻などとうの昔に使い物にならなくなっている。見ればその臭いの影響で、若い船頭さんも歌を歌わず鼻を摘まんでいる。今まで必ず、この船頭の調子っぱずれの歌を聞かされながら乗っていた訳で、調子っぱずれなBGMが無いとどうにも違和感がある。

これが俺の、船が出発したことに気づかなかつた原因だろう。

「——セイデイ。なあ、セイデイ」

「な、何ですか……?」

「君には、ご両親から頂いた立派な体があるというのに……!」

「泳げと!」

「行けるって、君が新世代のハンターなら。鎧とか着けてても、きつと泳ぐことも出来るはずだから。多分」

「新世代って何なんですかあ!」 後、きつととか多分とかでやらせようとししないで下さいよお!」

「全く、そうぞうしいぞーお前らー。歌う事も出来やしない、おいらの唯一の楽しみだつてのにー……」

何だか最後の方は、割と楽しくなっていたような気がしなくてもない。



ようやく落ち着いた俺達は、改めて自己紹介をする事にした。

「レナードだ。年は18、主に使うのは大剣。今までにドスランポスとドスファンゴ、後これから行くイヤンクックも討伐した経験がある」

「セイデイです。年は15になります、はい。えと、片手剣を使つてまして。これまでに倒したのはドスランポスとドスファンゴです、はい」

ボーイッシュな印象を受ける短めのライトグリーンの髪と、同じく瞳を持った少女だ。パッチリとした目と裏表のなさそうな表情からは、素直そうな印象を感じられる。

「おいらの名前はリユーズな、年は16だー。んーこれまでに倒したのは……心の弱気かな。しっかり覚えとけー」

多分、忘れる。

「——で、だ。これから俺は、イヤンクックを討伐に行くんだけど……」

「はい！ ぜひ、ご一緒させていただきたいと思つています!!」

「うん、それ無理」

「は……ええっ!？」

「この世の終わりの様な表情でこっちを見てくるセイディ。中々表情が豊かだな、この子。」

「そんなに……ペイントボールって気持ちが悪いですか……？」

「この臭いみたいに、頑固でしつこい奴だなー」

「……分かってると思うが。別に、このペイントボールで嫌がらせをしている訳じゃないからな？」

「おう、おいらは最初っから分かってたぜーはははー」

「え、えと!? わ、私もいい！ 最初っから分かってましたけどっ」

「つい、頭を抱えて空を見上げてしまった俺は悪くない。」

「まず、セイディ。お前はそもそも準備が足りてないんだ」

「準備が足りてないだなんて、そんな事無いです！ ちゃんと不足の無いように、十分に色々と持ってきましたし」

「確かに、出るわ出るわ。非常に多く物が入られるギルド支給のポーチが、9割がた持ってきた物で埋められている。」

「これじゃあ狩場から何かを持ち帰る事も碌に出来やしないだろう。」

「中身も中身だ。」

「回復薬やペイントボール、砥石やこんがり肉はまだ問題ないとして。石ころやネン

チャク草、ブーメラン、ペイントの実、果てはガンナーでないと全く使う事の無いカラの実等々……明らかに必要のない物までポーチの中には入っていた。……ところでもしも、あの時ペイントボールではなく石ころ投げつけられてたらと思うとゾツとする。一応殺傷性の無いモノを選ぶだけの理性は残っていたという事か。

だが、それとこれとは話が別だ。

「……ただ持つて来ればいいってものじゃあ無いだろうが」

確かに多めにアイテムや素材を持ち運んでくるというのは悪い事では無い。予想以上に長丁場になった際、それは神の恵みのように感じる事もあるだろう。だがだからといって、まず間違いなく邪魔になる物を持つてきていい理屈にはならない。ここはこの子の為にも、一つずつ確認していくか。

「何故、タル爆弾も用意していないのに石ころを持つてきたんだ？」

「それは……いざと言う時に、ネンチャク草と合成する為です」

「だろ、素材玉が出来る組み合わせだ。で？」

「えっと、ツタの葉と組み合わせせてけむり玉を作っておけば、いざと言う時に体勢を立て直せるかなと……」

「そうか、まあそれも悪くは無いだろう。……が、その答えは同時に君の勉強不足をも露呈している」



「ど、どういう事ですか……?」

先生役が、少し楽しくなってきたかもしれない。ピン、と指を跳ね上げ語る。

「ヒントはイヤンクツクの生懸、だ」

「イヤンクツク、の……?」

ここまで言っても分からないという事は、イヤンクツクか道具か、どちらかの知識が足りていないという証左。とりあえず身に染みて分からせるため、コチンとデコピンをしておく。予想に反してゴチンと音を立てたのは、きつと気のせいだろう。

「ぐ、ぬおおおおおっ……!」

「うーわ、ソートー痛そーだぞ」

「イヤンクツクは見た目の耳の巨大さを裏切らず、非常に聴覚が優れている。その為、奴の近くで音爆弾やタル爆弾をさく裂させればしばらくの間硬直して隙をさらけ出す訳だ。硬直が解ければ怒ってしまうが、それまでの間は攻める絶好の機会でもあるし、逃げ出すことも簡単に出来る。大タル爆弾を奴の近くに置くことだって、十分に可能だ。そして、こんな事はパティか村にいるハンターにでも聞けば、少額のゼニーと代わりに快く教えてくれていたはずだ。——さて、準備が十分に足りていたはずのセイディさんは、一体どうしてこの事を知らなかったのかな?」

少し嫌味つたらし過ぎたかもしれないが、ここは絶対にテキトーをしてはいけない場

面だ。

今ここでこの子が手にする教訓は、ハンターにとっては非常に重要な教えとも言える。

だからこそ全力で教え、諭す。あるいは脅す。これがよく身に染みるように。

「……………」

「それに、な。——君、その装備レザーシリーズだろうか？」

「は、はい。そうですけど……………」

「さっき俺は確かに聞いたよ、ドスランポスとドスフアングを倒したってな。——で？」

何で、防御力が一番低くて、発揮されるスキルは採取のみという、他のハンターならズブの新人か素材集めの為にしか使われないような、そんな防具を身に纏ってるんだ？

「それは……………」

「それは？ 金を集めて工房でより防御力の高いチェーンシリーズを揃えても良かったし、それこそ俺の今着ているランポス装備だって君なら揃えられたはずだ」

セイデイの得物はハンターカリング改、マカライト鉱石と鉄鉱石と大地の結晶で作れる金属製の代物だ。つまり、ドスランポスやドスフアングの戦果には手つかず。売るなり加工するなりすれば、どうとでも今より良い防具を揃えられたはずなのだ。なのに、

セイディはそれをしなかった。おそらくは時間を惜しんで、絶対に払わねばならない労力を払わなかった。

「身を守るべき防具もお粗末なまま。かと思えば、対象の情報も碌に知ってはいない。故に、持つてくるべき物も持つてきてはおらず。正直、話にならないんだ。セイディ、君は事前にやるべき事をしていない。それはハンターにとつては許しがたい怠慢だ。ソ口ならまだいい、準備不足のそいつ独りが死んで、ほんの少し後処理でギルドの仕事が増えるだけだ。その程度ならギルドに迷惑を掛けてやればいいさ、それがあつちの仕事だ。だがもし、一緒に狩りに出向く仲間がいたら？ 君のせいで仲間が全員窮地に追いやられるかもしれない。はは、とんだ死神疫病神だな。セイディ、俺は君を死ぬと分かっているクエストへと連れて行くつもりはさらさら無いよ。——言い方を変えよう、顔を洗つて出直して来い」

ピンク色に体を染めたまま、舌鋒鋭く言い放つ。

本当に顔を洗いたいののはこっちなのだが。この空気の中でそんな言葉はさすがに言えない。

セイディは俯きながら、唇を噛みしめ拳を握りしめ震わせている。

「泣くなよ？ ホント、泣かないでくれよつ、頼むから……！」泣くのか？ 泣いてどうにかなるって甘く考えてるんなら。——今すぐハンター辞めちまえ!!」

その言葉に跳ね上がるようにこちらを見て——否、睨みつけてくる。僅かに目尻に浮かんでいる涙など感じさせない、ギンツと強い眼差しだ。

「……私のいた村は、今村に住んでいるハンターが父一人だけです。その父も、数か月前に怪我をしてしまい、狩りに出られなくなってしまうました」

押し殺すように、呻くようにセイデイの独白が始まった。

「私は、元々父の跡を継いで村のハンターになるつもりでした。ですが、最近は近くの森に住むモンスターが俄かに増えてきていた為に、それに重なるように起きたハンター0の事実を、村長は重く受け止めたのでしよう。村の全員を連れて、どこか別の場所へ集団で移住をしようと言いました」

……その村長の判断もそれ程間違っているとは言えない。おそらくその村長は、人命を何より優先してその判断を下したのだろう。と言うか何だろう、この語りは。何か嫌な予感がする。

具体的に言えば、俺が悪者になりそうな予感が。

「私は食い下がりました。私がハンターになつて皆を守つて見せるから、と。最終的に村長は、「集団移住するまでに、お主の父と同じく飛竜であるイャンクックを倒せたら」と、集団で村を捨てずに済む条件を言ってくれたんです。……ここまでするには、正直言つて本当に怖かったですよ？ 少しずつ着実に進んでいかなきゃいけないのは分

かってました。でも、期限まで後二週間……。悠長にやっているとか村長との約束に合わないんです……！ 多分、村長もそれを知って言った条件だと思います。ドスランポスも、ドスファンゴも本当に大きくて怖くて、そんな相手にこんな装備じゃ頼りなくって震えが止まらなくて……。それでも、頑張ったんです。だって私は、あの村の風景が好きだから……！」

今しがたまでのキャラ付の為に平静とした表情の裏で、じつとりとした汗が滴り落ちるのを感じる。

自分のここまで頑張ってきた理由。頑張つてこれた原動力を話した為だろう、セイデイの頬は僅かに紅潮している。先程から涙もうつつすらと滲んでいる為、尚更セイデイの健気度が半端ない。

「——ていうか何だよりユーズ、そんな目で見てきてんじやねえよ!? 知らなかったんだからしょうがないだろうがっ、これじゃあ俺がただ後輩苛めてただけみてえじゃん!? 何だよ「好きだからっ……！」って!? 反則だろ!!」

片方からは懇願するようなキラキラと、もう片方からは軽蔑するようなじとーつとした眼差しを受け、あく、うくと唸った後、ガシガシとランポスヘルムを外し髪の毛を掻く。……よし、腹は据わった。

「分かった、分かったよもう！ こうなったら、乗りかかった船だから。俺が傍で面倒見

てやるから、イヤンクツクでも何でも倒せよ……」

「ありがとうございますっ!!」

「おー、よかった、よかった。やっぱリネードは良い奴だなー。さっきまでのいじめっ子口調も、本当はセイデイの事心配して言ってたんだろー?」

「んな事、本人の前で言うなボケ!!」

ここに、仮初ながらパーティーが結成されたのであった。

## 怪鳥、遭遇

「うゝ……まだ何ですかね、もうそろそろ何じやないですかねえ……？」

「ほっ！ お前さんも中々騒々しいねえ……ワシも聞き飽きたよ」

あの日、レナードがセイデイの面倒を見る事を承諾してから二週間の時が経った。未だ、イヤクツクは狩れていない。

あの後、レナードは強引に船をリユーズに方向転換させるとんぼ返りを果たした。強引な行いに船が軋みを上げ、のんびり屋なりユーズが珍しく慌てていたのがセイデイの記憶には鮮明に残っていた。

このイヤクツク狩りが最後のチャンスなのだと追い縋るセイデイに、「俺を信じろ！」という力強い言葉を放ち、引き返したのはいいのだが。

レナード本人は、セイデイに幾つかの指示をした後にジャンボ村を出て行ってしまったのだ。二週間くらいで戻ると言い残して。

アプトノス車で5日程かかる場所にあるセイデイの村の場所を聞いていった為に、おそらくはそこに向かったのだらうとは思うのだが。セイデイとしては気が気では無い二週間となった。

しかしその二週間を、ただ手をこまねいていてもどうしようもない。セイデイはレナードから、その間にやっておくべき事をいくつか言いつけられていた。

その為、今とはかく指示された内容をこなそうと、『チェーンシリーズ』一式を新たに作ってもらっている通称「工房のばあちゃん」に進捗具合を見に来たところなのであった。工房のばあちゃんは、ハンターの武器防具を一手に担っている非常に優秀な職人である。二週間もあれば、一般的な防具くらいは余裕で作る事は出来る。ダース単位で。

実際は心配だ心配だと言って帰るだけの一切建設的ではない行動なので、工房のばあちゃんには若干鬱陶しがられているのは余談。

ちなみに、所変われば品変わると言うべきか辺境であるこの辺りでは役職や通称で呼びあつたりするのが当たり前なので村長や親方、教官と並んで村人達は工房のばあちゃんの本名を知らない。気にする者もないのだが。

「しかし、まあ丁度良い所ではあつたよ。ホレ、つい今しがた出来たトコロさ」

「わあ……！」

セイデイの視界には、以前の「レザーシリーズ」の皮の見た目とは違う、真新しい金



属特有の光沢を放つ全身パーツが移っていた。客観的に見ればどちらも軽鎧な事もあつて形状に大差は無いのだが、そんな事はセイデイには関係が無かつた。

新たな武器や防具を手にしたハンターは、皆多かれ少なかれ喜びを表情に表す。ハンター達のその表情が堪らなく好きな工房のばあちゃんは、まるで新しいオモチャを手にした子供のように喜んでいゝるセイデイの顔を見て、暫しの間暖かい眼差しで見守るのであつた。

そして、レナードがジャンボ村に帰つてきたのはそんな時。行く前と比べれば、遙かにくたびれた様子の装備と表情を身に纏つての帰参であつた。



「あ、レナードさんお帰りなさい！ どうでしたどうでした、セイデイちゃんの故郷は？ やつぱり、すごく見晴らしのいい光景だったりしてたんですか？ こう、お花畑が辺り一面にブワ〜ツと広がつてたりして……！」

「や、そんな事は無かつたつて……ここら辺と大差無かつたから」

二週間ぶりに帰つてきたジャンボ村は、全然変わつてはいなかつた。二週間なので当然か。

そんな事よりも疲れた……。具体的に言うと、もうパティの話が耳に入らないぐらいに疲れた。よく見たら目を瞑って話をしているので、有り難くここは我が家へ帰らせてもらおう。

愛しの緑屋根の我が家へ帰る途中、色んな人に声を掛けられるので簡単に挨拶をしながらも歩みを止めない。

「すまない、皆……！　今の俺には、帰りを待っている愛しの白いアイツ（ベッド）が待っているんだ……！」

「それってニヤアの事ですかミヤア!?　ああ、感激ですミヤアごしじんさま!!」

「……おお、ただいまネコニヤア。元気にしてたか?　ついでに言うと、今の俺はちよつと疲れてて愛のこもったフレアイはちよつと出来そうにないんだよワルイナ」

「ゴツ、ごしじんさまつ!?　く、首がしまつてましゅミヤ……！」

飛び掛かってきたネコニヤアの首を、酷く冷めた眼差しでいたって冷静に捕まえる。ぺちぺちとタップしてきたので、さっさと放す。

別に苛めたい訳ではないのだ、家族をいたぶって喜ぶ趣味も無い。ただ、疲れているだけ。

気を取り直して、愛しの我が家へと向かう。トコトコと後を嬉しそうに付いてくるニヤアを確認しつつ、感慨深げに扉に向かう。何の変哲も無い木で出来た扉がマラソン

のゴールテープにさえ思えてくるから不思議だ。

(今度こそ、ゆつくりと休めるっ……!)

最早口を開く事すら億劫になってきている為、心の中で呟く。

「あ、レナードさん! どうでし……」

「チェンジで」

「どういう事ですかっ、それはーっ!!」

そこには、目を爛々と輝かせながらもどこか心配そうな顔をするという器用なマネをしているセイデイが立っていた。

「……疲れてるから簡潔に話すけども、疲れてるからっ! 村の方は何とかなつた。集団移住する日を交渉して待ってもらったから、お前は安心して今度こそ準備を万端にしろよ」

疲れと一時的とはいえ師弟関係という事から、遠慮のない口調になってしまった。問題ないと思うけど。

「ミャー……、これは何やら親しげなふんいきを漂わせている気がするんですミャー! これはもしかして、メラルー女が現れたという事ですかミャー!?!」

またお前は首を掴まれて持ち上げられたいのか?

目の前で手をニギニギさせると、さすがに黙った。鳥よりはマシな頭を持っているら

しい。

ちなみにメラルー女は泥棒猫と大体同じ意味であり、男の場合は間男と言ったり地方によつてはゲリヨス男にもなるらしい。この豆知識はきつと二度と使わない。

「そつちの心配よりも、だ。お前は俺の指示した通り出来たのか？ まあ防具は出来るみたいだが、それ以外もだ」

「バッチリですよ!! 防具は今しがた出来た新品ですし、狩場に持っていくものと持っていないものも選別も終わってますし……」

「あーいい、いい。流石に二度もポカはしないだろ。起きてから行く直前に確認してやるから、取りあえずもう今日は寝る……。明日早朝から密林に行つてイヤンクツクを狩るから、そのつもりでいろよ」

本当なら、もう2、3日待つてほしいところではあるが。わざわざ村長にひたすらお願いして、2週間密林に行くハンターを止めてもらつていたんだ。出来る限り早く行かねば色々諸方面に迷惑がかかる。

他のハンターがイヤンクツクを討伐してしまい、いざ討伐という時になつてそこにいなければクエストも受注出来ずどうしようもないからだ。

ゲームとは違い生き物として強力になると個体数が減る傾向にあるのか、イヤンクツクより上になるとそうポンポンとクエスト依頼や目撃例もガクンと下がってくる事を

理解しておかねばならない。

幸いセイデイはやる気満々準備万端、後は俺の調子如何らしい。

ぶー垂れるセイデイを尻目に、潜り込んでくるニャーも気にはならぬ程に深く深く。早くも俺は夢の世界の住人となるのであつた。



「ごしじんさま〜？ 朝ですミャー、起きて下さいミャー」

早朝、未だ世界が薄暗い中いつもの通りに早起きをしたニャーが小さな体で甲斐甲斐しくも俺を起こしてくれる。いい香りがするので発生源を見てみれば、安上がりながら技巧を凝らされ美味な朝食まで用意されている。紛う事無く良妻賢母に類するスキルである、至れり尽くせりとはこの事か。

「……ん、あんがとな」

「はふう〜、寝起きのごしじんさまのぼんやりした姿もまた、いつものギャップがいいですミャ〜!!」

「……ちよい、ニャーちよつと近くに來い」

「ミャミャー！ お呼ばれしちやつたのミャー！ これはもしかしてもしかすると、愛情

120%で抱き締めてくれちゃったりなんかするんですかミヤー!? いやいや……!

それともおはようのキスをば、甘々な囁きと共にコースでミヤッハー!?」

「残念ながら……愛情増し増しのデコピンだ、馬鹿たれ」

相変わらず、早朝から何てテンションの高い奴なのだろうか。俺だつて狩場であるならば、眠りから覚めたら即動ける程度には意識してはいるが流石に安心安全な家でまで気を張ってはいない。

それとも、コイツは常在戦場のつもりでいるのだろうか?

「何と戦ってるんだよ……」

「ミヤ?」もしかして、ニヤーの作った朝ごはんはお気に召しませんでしたかミヤ……?」

下らない事に対して呟いた言葉は、ニヤーに変な勘違いをさせてしまったらしい。

そんな訳は無いのに。

「……今まで生きてきた中で、お前のより上手い飯を食った事が無いよ。だから安心しろ」

「ミヤッハー! 嬉しいですミヤ、ごしじんさま〜!」

クシクシと、ニヤーの頭を撫でながら。それによつて嬉しそうにむずがるニヤーを眺めながら。とても穏やかに、朝ごはんを食べていくのであった。



「武器は」

「昨日砥石を4つも使って磨きに磨き上げましたっ！」

「よし、今度からは時間のある時には工房のばあちゃんに見てもらえよ。次、防具は？」

「まだ使っても無いピッカピカの新品ですっ！どこにも不都合ありません！」

「そうか、これからは万が一不具合があつたら困るから、ちゃんと事前に確認しておくように。音爆弾は？」

「4つありますっ！」

「ん、じゃあ砥石は？」

「一応余裕を持って10個ですっ！」

「タル爆弾は？」

「大タル爆弾が2つ、起動用の小タル爆弾は3つありますっ！ついでに石ころもありま  
すし、ここ数日は晴れだったので火薬が湿気て起動出来ないなんて事は無いかと思いま  
すっ！」

「回復薬は？」

「しつかり10個ですっ！」

「こんがり肉は？」

「当然10個、持ってきてますよっ！」

「うん、そんなにいらなから半分置いていこうな」

「そんな殺生なっ!？」

道具類は単純に大量に用意すればいいという訳でも無い。生き残る為に必要以上に回復薬のような道具を持って狩りを行い、いざと言う時に重さや嵩張りが原因で思ったように動けずに死んでしまったハンターの話など腐るほどある。

必要なのは何事も適量、もしくは少し多めくらいに留めておかねばならないのだ。

何か不安になってきたので、セイデイを横に除けて他に持ってきた物を自分で確かめ始める。「女の子の持ち物を勝手に漁るなんてっ！」という言葉は無視。そんな色気のあるものではありません。

「それから閃光玉と落とし穴か、まあこの二つはいいな有効だから。クーラードリンク？ 砂漠でもあるまいし、温暖期だからっていらねえよ馬鹿たれ……おい、なんでジャンゴネギとかサシミウオとかが入ってんだよ。しかもこんもりと山積みで」

「だ、だってですっね！ お肉だけじゃああれなんで、向こうでも美味しいお魚とかお野菜



とか食べたいじゃ無いですか!? 常々思っていたんですが、パサパサした携帯食料とか脂の滴るこんがり肉だけじゃなくて、もっとあつさりとした——」

「返してきなさい」

「——はい……」

んな事で泣くな、鬱陶しい。いいのかよこんなにお気楽な感じで。二週間前は、何かもつと悲壮な感じ出てたじゃねえかよ。もしかしてこれが素なのだろうか、だとしたら騙されたとしか言えない。

「村長に、これ良かったらどうぞって渡してきました……」

「いきなり村長に山積みものジャンゴネギとサシミウオ渡すなよ、村長びっくりしちまうじゃねーか。何か意図があるんじゃないかって小一時間程悩んじゃうよ」

というか、何故その二つだけなのだろうか。

「その食べ物屋さんで大売出しだったんで、つい」

「そうか……」

もう、何も言うまい。そう心に固く誓う。

「おーい、もういいかー? いい加減待ちくたびれたぞー」

リユーズの相変わらず間延びした声が聞こえてくる。

こちらの都合で待たせてしまったのだ、申し訳なく思う。

「すまんね、リユーズ。コイツのせいで遅れた」

「いや、師匠が私の持ち物に難癖つけてきたから遅れたんですようー。良く考えたら、別にベースキャンピングに置いておけば良かったじゃ無いですかー」

セイディはぶー、と口を尖らせ納得のいかない表情を浮かべている。確かに、大量に消耗品や道具類をベースキャンピングに置いておけば安心度は増すだろう。

安全面だけを考えれば確かにそうだ。しかし今度は別の問題が登場してくる。

——すなわち、金銭面だ。

そんな無駄な出費を毎回していればすぐに金が底を尽きる。ハンター業は実入りも良いが、出費も底なしに大きいのだ。

如何にして安全面と金銭面のバランスを図るか、それもまたハンターを悩ませる問題の一つではあるのだが。

今は関係無い為、もうしばらくしてから話してやろう。そう判断を下す。

「全くと、痴話喧嘩なら余所でやってほしーぞー」

「誰が痴話喧嘩だ!」

「誰が痴話喧嘩ですかっ!」

イヤンクック狩りは、中々に騒々しい始まりを迎えたのであった。



「おお……ここがテロス密林ですかー」

「ほれ、景色が良いのは分かるけどとっとと作業を見て覚えろ」

「キャン!?! 女の子のお尻を蹴るだなんて、一体何を考えてるんですかつ!」

何事も無くテロス密林のベースキャンプへと辿り着いた。早速、絶景と呼んで差し支えない景色を眺めているセイデイの尻を軽く蹴飛ばし準備を促す。リユーズの船に積んできた数々の道具類を手早くベースキャンプに移さねばならないのだ、呆けている暇など無い。

「いいか、セイデイ。こういった何気ない雑用のようなものもまた、経験だ。無駄な事なんて何も無い。数々の経験の厚みこそが何物にも代えがたい知識となり、それは狩場で不測の事態が起きた時に動じない心にも繋がってくる訳だ。俺だつてまだまだ未熟ではあるが、それでもお前よりは先輩だ。言い換えればお前よりも狩場での物事に精通していると言つてもいい。さて、セイデイ? 未熟も未熟、未熟千万なお前は、自分よりも精通しているであろう先輩の一挙手一投足をよく観察して、何か疑問があれば質問をしていくべきだとは思わないか?」

「あ、うう……。おっしゃる通りです、はい……。初めてテロス密林に来て、しかも相手

が飛竜だから少し浮かれてみたいですよ」

「ん、よろしい」

分かつてくれて何よりだ。要はメリハリ、ここはもう狩場なのだ。先程までのような軽い雰囲気とはおさらばをするべきなのだ。こんな時に軽口を叩き合つて余裕を演出するのは、それはその時の心理状態が張り詰め過ぎてプツリと切れかかる恐れがあるからであつて、決して終始軽い雰囲気を進めていって良い訳ではない。とにかくこういう時、人の忠告をしつかり聞ける素直な奴が一番伸びるものだ。それでいけば、セイディは優秀なハンターになれる素質を持っていると言えるだろう。

「さあ、準備は出来たか？ それじゃ早速、イヤクツク討伐に向かうぞー」

「おー!!」

意気揚々、今のところ何の不安要素も感じられず俺とセイディは一路エリアーへと歩みを進めるのであつた。



「でも、師匠？ 本当にこんな装備で大丈夫なんですか」

「ん、最初は様子見だ。何と言っても俺達はまだイヤクツクがどこにいるかも知らな

いんだからな。それなのに嵩張る大タル爆弾をえつちらおつちら荷車に乗せてもつてくる訳にもいかないし、他の道具も最低限だけにしておいた方が疲労は少な目で済む」「なるほど……幾つかの段階に分けて狩りを進めていくわけですねっ！」

「そう。それで、今回はイヤンクックにペイントボールを付ける事が主な目的だ。状況次第だが、余裕がありそうなら一当てくらいしてもいいけどな」

とにかく密林のイヤンクックは行動範囲が広い。密林のエリアは大きく分けて10のエリアに分けられるが、その内俺が以前ドスランポスを討伐した密林中央部の洞窟であるエリア8と、隣接する同じく洞窟なエリア7は上空に穴が開いていない為イヤンクックは入ってはこない。同じく離れ小島であるエリア10もまた立ち寄らないが、それ以外のエリアは空が開けている為全て奴の活動範囲なのだ。田舎ゆえ日本のような分単位で精密な決まりでは無いが、クエストの制限時間はおおよそ10時間。下手をすれば今回は搜索で歩き詰めになるかもしれない。

「あ、だったら二手に分かれるって言うのは——」

「却下だ」

セイデイから出してきた提案を、ぱつぱつと切り捨てる。

あまりにも早く却下したからだろう、目をパチパチとさせているのがコミカルで面白い。

「何ですか、我ながらいい案だと思ったんですけどっ!？」

「そうだな、でもそれはお前が一端のハンターになつていたらの話だ。どんなに急いでいても、イヤクツクを一度は討伐していなければそれは絶対に許可しない」

「そんなに私は危なつかしいですか……?」

「いや今までの行いで少しでも頼もしいと思つた事が……ああ、落ち込むな! そうじゃ無くてだな、そういうものなんだ。——話で聞いただけの脅威と、実際に遭遇した時の心臓を掴まれたようなあの感覚は全然違う、それぐらいは分かるな?」

「まあ、確かに想像と実物は違うというのは分かりますけど……」

「——そう、そして想像と実物との違いがある事を踏まえて尚、もう一つ上に行く。そう認識すればいいさ」

人間よりも強大なモノを狩るとは、そういう始まり方をするのだ。

どれだけ優秀な素質を持っていても、例え飛竜を素手で殴り飛ばせるだけのトンデモパワーを秘めていたとしても。いざその威容と相對した瞬間に、程度の差こそありはするが、体が委縮し硬直してしまうのは絶対に避けられない事なのだ。

そしてハンターは、それを踏まえた上で作戦を組み立てる。

その硬直期間を何とかして切り抜けられるかが、ハンターへ最初に訪れる試練と言つてもいいだろう。

その恐ろしさを知る先達として、絶対にセイデイを単独で遭遇させる訳にもいかないのだ。

全てを話さずともその思いが伝わってくれたのか、不満げな様子も見せずセイデイは大人しく従ってくれた。



「中々、いませんねえ……」

「東側のエリア1、2、3と回って空振りか。西側のエリア4にいたのかもしれないな、ヤマが外れたか……。ともあれ当初の予定通り、ここから洞窟の中に入ってエリア8、6を通って反対側のエリア5に抜けるぞ」

「了解ですっ！」

密林の南側にあるベースキャンプから西は捨てて東周りで進み北部のエリア3へ。その後、中央にある洞窟を突っ切って再度南にあるエリア5へと向かうルートを俺達は選んだ。時間は既に二時間程度は経過している。エリア5はベースキャンプとは崖の上と下の位置にあり、ツタを伝って下りればすぐにベースキャンプへと戻る事が可能となる為、無駄を省く理由でそういったルートにしたのであった。

とはいえ、その心配もおそらくは杞憂に終わるだろうが。

「わ、高い……」

「さっさと降りるぞっ!」

「わわっ、ちよつと待ってくださいいよおー!」

エリア3からエリア8への高低差のある高台——よじ登る事が不可能に近いので小さな崖と言うべきか——から、いつも通り気負いなく飛び降りる。着地の際に大剣と防具という嵩張る装備があつて少々難しいが、前回り受け身をする。それによつて衝撃を逃がし、本来は存在する硬直時間を無くすのだ。ほんの数秒とはいえ、それが命取りになる事も考えられる為大事な技術と言える。正直、教えてもらった当初はそこまでする必要があるのかとも思つたが——

「何をやつとるんだ、何を……」

「ふ、ふおおおつ……あ、足がビリビリとおつ!」

これを見ると、かなり必要な技術な事がよく分かる。

(人のふり見て何とやら、か……)

こんな無防備な時に、もし他のモンスターが近くにいれば……下手をせずとも想像に難くはない。



溜息を吐きつつ、優しく後ろから体を押してあげる。そつとだ、あくまで優しくそつと促すように。

「さあ、立ち止まってる暇なんて無いぞ……は、待つてはくれないんだから、なつと」

「あ、いや、ちよ待つ……びりびりいつ!？」

「うんうん分かる分かる、世界はいつだつてこんな筈じゃない事ばかりだもんな。分かるよー」

「なんにも分かつてないじゃないですかあゝ!？」

決してペイントボールの事を根に持っていた訳では無い。無いったら無い。



「ううゝ……」

セイデイの恨みがましい眼差しを意に介さず、隣のエリア6へ向かう道の近くに待機している。

「ぶうゝ……」

「いつまでブー垂れてるんだ……。——セイデイ、さあ気持ちを切り替えていくぞ」

こちらの声音が変わった事を察して、エリア間の移動の為に幾分弛緩した様子から背

筋を伸ばして引き締まった表情へと変えるのを見て心の中で頷く。着いた際の事を、ちやんと理解出来ているようだ。もつとも、まだ年も若く、決して背も高くは無いのので可愛らしい様子なのには変わりが無いのだが。

「もうすぐ……なんです、か？」

「次のエリア6は洞窟の中ではあるものの、天井に大穴が開いててな。体の大きな飛竜も出入りする事が出来るんだよ。そして、この密林に住むイヤンクックもまたエリア6をめぐらにする事が非常に多い」

それはつまり、イヤンクックがこの先にいる可能性が高いという事だ。

例えないとしても、待ち伏せしていればいずれは上空から舞い降りてくる。飛竜は飛ぶ前後には準備動作が必要となり、その間はハンターにとって絶好の機会となつていく。待ち伏せはこちらの優位に働きやすいので、むしろいなくても構わない程だ。

「いよいよだっ……。いよいよ、飛竜とっ……」

気を引き締めようとしたが、少し気負い過ぎている。

狩場に対する洞察力は優れているハンターといえど、中々人間相手には上手くないかな。どうせこうなるだろうから、出来る限り気を緩めるよう仕向けて行つただけでも。

ポン、と。

俺よりも頭一つか二つ分くらい低い身長な小さな体、その肩に軽く手を置く。

「師匠……」

「忘れんな。お前だけじゃ無くて、俺もいるんだよ。お前が独りでやるんじゃない、いつだってお前の後ろには俺がいるんだからな。それだけ、覚えとけよ」

「……はいっ!!」

「良い返事だ。でもお前、イヤンクツクは耳が良いつて教えてただろうが。今の大声で気付かれたらどうすんだ」

「あ痛っ！ ぶー、何するんですか。あ……師匠、それつてもしかして照れ隠しなんじゃあ、あいや何でも無いですからその拳はそつと下ろしてもらいたいなーなんてっ……」



「いいか……ここからは極力音を出さず、身振り手振りで指示を伝えるからな」  
「はいっ……」

エリア6。ある程度の水気が存在しており、なおかつ天井に空いている大穴から陽光が降り注いでいる為に、洞窟内部とは思えぬ程に植物が自生しているこのエリアに。

全体的に赤みを帯びた桃色の甲殻。黄色い鳥のように尖った顔。そしてトレードマークのエリマキトカゲを彷彿とさせる大きな耳。

そこに、怪鳥イヤンクツクはいた。

特に眠つてもおらず、今はノシリノシリと歩いて餌を探している様子である。確か主食はミミズや昆虫の類だったか。

(まだ気付かれてはいないな……よし、いくぞ)

二度手を振り、死角であるイヤンクツクの尻尾側からペイントボールの当たる距離にまで近づくと事を告げる。

出来る限り気配を消す為、しゃがみ移動でゆっくりと歩んでいく。

耳をそばだてれば、後ろからセイデイの荒く呼吸する音が聞こえる。汗が滴る。拭っている暇など無い。

(あと一歩、一歩……)

何事も無く、このまま行けるか？

その考えが脳裏をよぎったのがいけなかったのか。

グルリ、と。

怪鳥の首がこちらを向いた。

「くっ、気付かれた!! セイデイ、ペイントボール用意ッ!」

「あ、う……」

イヤンクツクに遠くからポイントボールを投げつける役を言い付けた際、セイディは鼻息も荒く意気揚々と「はいっ！」と答えて見せた。

しかし、声に反してセイディは動けない。

生物として人間よりも遥かに強大なモンスター。ドスランポスやドスファンゴとは違う大型モンスターのその眼光に、否応なしに体が竦んでいるのだ。

この強靱な体が原因か、俺はまだ平気な方だ。

いち早く回復を果たし、気を引くように別の方向へと駆け出していく。

『キ、ヤアアアアッ!!』

正しく怪鳥の如き鳴き声を放ちながら、こちらに近付いてくるイヤンクツク。その体躯は飛竜と比べれば確かに小型と言えるのだろうが、人間と比べれば巨大とも言い換えられる。ただ二本脚で走って近付いてきているだけなのに、まるで車がこちらを轢き殺そうとしているかのような印象を与えられる。

一瞬だけ、視界の中にセイディを入れる。

ポイントボール。どこか因縁深くも感じるその道具を、セイディは怯えながらもしっかりと握りしめている。

そしてその表情は、初めての大型モンスターと相対し恐れながらも、ハンターたらん

とする者の表情をしている。

問題無い。

彼女に狩りの役目を任せられると、そう判断をする。

「セイデイ!! 投げろおっ!!」

けたたましいイヤンクツクの鳴き声に負けぬよう、腹の底から声を上げる。

(この声の大きさだけ、俺はお前を信じたぞセイデイ……い)

例え大きな凶体のモンスターへとペイントボールを投げて当てるだけの簡単な役目だとしても、そんな事は何の関係も無い。

「うう、やあつ!!」

彼女なりの気合いの声を上げながら放り投げられた蛍光ピンクの玉は、放物線を描きながら飛んでいき。——見事、奴の大きな耳へと命中を果たした。

『キィ、キヤアツツ!!』

「気持ち分かるよ、痛い程……いや、臭い程に、な」

イヤンクツクの脇をすり抜けつつ、セイデイの元へと向かう。

顔の近くに付いたペイントボールの臭いが堪らないのだろう、半ば狂乱染みた動きで以て俺達の事など眼中にない様子でグルグルと動いている為、容易く合流する事が可能

だ。

それはそうだろう、モンスタ―にも嗅覚はあるし甲殻にあんな長時間こびり付くような物が付いたならば鬱陶しくも感じる。この辺りの反応も、ゲームとは違う生の情報として大変重要なモノと考えられる。

「よし、ひとまずベースキャンプに戻るぞ、走れセイデイー！」

「は、はいっ!!」

如何に鬱陶しいポイントボールが気にかかるとはいえ、ほんの少し時間が経てばその矛先は加害者であるこちらへと向かうものだ。当初の目標を達成したのだ、長居する必要などどこにも無い。

怪鳥の吼えるような甲高い声をBGMに、俺達はいっそ清々しい程に隣のエリア5、洞窟の出口まで駆け抜けていくのであった。

セイデイーの、初めてのイヤンクックとの出会いはまずまずの滑り出しと言える。

次で仕留める、その為に色々持ってきた道具を吟味しなくてはならないな。

エリア5から真下にあるベースキャンプへと。嫌がるセイデイーを強引に抱きかかえ、高さ数十メートルをジャンプで飛びながらそう思案するのであった。

ついでに言う、「にやああばばあああつ!?!」とか絶叫しているセイデイーの様子を愉しげに横目で確認をしながら。

## 怪鳥、決着

「ほんつと、今度ばかりは信じられませんよっ!？」

「いや、正直すまんかった」

「その謝り方、誠意が感じられませんっ!」

今現在セイデイがプリプリと言った様子で怒っているのは、非常に簡単な事で。

高さが大体目算で30m、下手をすれば50mはあるやもしれん崖を、俺がお姫様抱っこをして一気に飛び降りたからだ。

流石に受け身を取る事も叶わず、まるで未来少年コナンのようにビリビリつと痺れる事になったのだが、セイデイにそれを揶揄出来るだけの余裕もある筈が無かった。

コードレスバンジーは、ちよつとセイデイには刺激が強すぎたという事なのだろう。本来ならえつちらおつちらとツタを伝い降りるトコロなので、言いたい事は分かる。一応俺が付いていたので怪我も無いとはいえ、そういう事でも無いだろう。

「まあ、そんな事よりもだ。今後の俺達の方針を話していこう」

そんな事と言った辺りで再び何か喋ろうと気色ぼんだが、セイデイもハンターとして最低限の冷静さは残していた。不承不承ながらベースキャンプにある船の上に座り、頭



の防具を外して聞く態勢へと移った。ちなみに、リユーズは暢気に足を組んで昼寝をしている。クエストを達成してもまだ寝ていたら海に突き落としてやろうと思う。

「まず、先の遭遇で無事にペイントボールを付着させる事に成功させたおかげで、後大体二時間程度の間はイヤンクツクの位置が分かるようになった」

「これで、次に向かう時は大荷物を持つていつでも出来る限り消耗は避けられますよね……?」

「そう、その通りだー偉いぞー、ご褒美に美味しいこんがり肉をくれてやろー」

「えへへ……つて、子供扱いしないで下さいっ！ そんな物で喜んだりしないし、さつき  
の事も許したりは……つてそれ元々私のじゃ無いですかっ!?!」

ガーつてな勢いでツツコンでくるが、こんな事で大丈夫なのだろうか。お兄さん、少し心配になってきた。咳払いを一つ。

「とにかく、次が正念場だ。急いで持つていく道具の用意と、ここに来るまでに教えたイヤンクツクの動きと実際に見たモノとの差異を埋めとけよ。時間との勝負なんだからな」

今回、サブターゲットは狙えない。イヤンクツクを倒す事こそがセイデイの目的な以上、ここで倒すのがどう考えても最善なのだ。

「どうしてそんなに急いでいるんですか……?」 ペイントボールが切れるにはまだ時間

がありますよ?」

「それだけじゃあ無い。俺達はイヤンクツクを探すのに、少しばかり時間を使い過ぎたんだ」

上を見上げる。未だ雲一つない青い空が見えてはいるが、幾らか太陽が傾いているのが分かる。

「夜が来る前に、このクエストを終わらせるぞ」

「え、でも鳥目つて言うくらいですし、夜なら昼行性なあちらも不利に働くんじゃ無いんですか?」

良く昼行性なんて言葉知ってたねー、という想いを込めて頭を撫でる。こちらからは何も言いはしなかったのだが、生暖かい眼差しで馬鹿にされている感じはしたのだから。「何か不愉快ですつ!」と言って払いのけられてしまった。

「夜の暗闇は、確かにあちらにも影響を及ぼすだろうさ。でもな、セイデイ? 忘れたか、イヤンクツクは耳が大きく聴覚が発達しているんだ。相対的に視覚が総べる割合は減っているだろうし、それにもう一つ。ここは密林だ、見通しが非常に悪い環境にある。舗装されていない足元には、木の根なんかも浮かび上がっていたりしていつ足を取られて転んでもおかしくは無いだろう。一つのミスが容易く死を招く大型モンスターとの狩りで、そんな真似は許可出来ない。——とにかく、狩るのなら日中だ」

俺がイヤンクックを実際に倒したのは一度きり、当然昼間の時だ。流石に夜間のイヤンクックの行動までは情報を手に入れてはいないので、もしも予測不可能な行動があった場合にはセイデイのフォローが出来ない。

どう考えても目が出ている間に狩った方が夜間よりも良いのだ。

「大タル爆弾なんかの荷車は俺が持とう。お前は片手剣の基本らしく、動き回ってかく乱出来る軽装になつてればいい。……ああそうだ、それで初めて遭遇した大型モンスターへの感想はどうだった？」

問い掛けられたセイデイは、そつと目を閉じる。

思い出しながら話しているのだろう、ポツポツとした語り口となつている。

「最初に、首から上だけがこちらを向いた時。息が出来ませんでした。ドスランポスト向かい合つた時も、ドスファンゴと向かい合つた時にも感じた事の無い感覚で……多分、あの時初めて目の前のモンスターに『食べられる』って思ったんです」

「そうか……それで？ もう止めて帰るか？」

そんな事は有り得ない。

心の中で確信しつつ問い掛ける。知り合つてからのごくごく僅かな時間、しかしその結論に至るには十分すぎる時間を俺達は過ごしてきたのだ。

俺からのその信頼に応えるように、セイデイもまた強気な笑みを口の端に浮かべなが

ら続きを語る。

「怖いです……確かに、あの時純粋に怖いと思いましたが、ええ——狩つてやるとも思いましたとも！」

「上等！ それでこそハンターだ、俺の弟子だつ！ ご褒美に高い高いをしてやろう、ほーれ高いたかーい」

「わつ、師匠止めてくだ……つて高いいつ!? ホントに高すぎますけど〜!?」

ポーンと上空に放り投げ、セイデイはボスンと砂浜に落下。柔らかい砂浜なので、ただでさえ気の効果で頑丈なハンターの体は傷一つ付きはしない。

「いたたつ……。ぺつ、口に砂が……。もー、今のは二人してカツコよく笑い合つてさあ行くぞつてトコロじゃ無いんですかつ！」

「そういうのは、もつと大物の時までとつとけよ。何せイャンクックは、生物学的な分類は飛竜種じゃ無くて鳥竜種なんだからな」

「え……えーつ!? 聞いてないですよーつ!? 今までずっと飛竜だと思つてたのに……!?!」

「まあ、飛竜種のような動きをするから巷では小型の飛竜として扱われてたりもする。だから、生物学とかの分類でもなければあながち間違いでも無いけどな。お前にイャンクックを討伐しろつて言つたお前のトコの村長も、もしかしたらそういう勘違いをして

たのかもしれない。……まあ、それはさておきだ。準備はいいか？ 肉は食ったか、肝心な時にスタミナ切れとか勘弁だぞ」

「おっけーですつ！ こんがり肉に刻んだジャンゴネギを上のにせたモノを、しつかり味わっていただきましたっ！ 滴り落ちるこんがり肉の肉汁をですね、ジャンゴネギが良く吸ってくれるんですよ、これが……」

「力説する場所が違うんだよ……。まあいいや、それじゃ出発！ えー、現在の目標は——エリア5だな！ ……エリア5っ!?!」

イヤンクツクは、どうやら俺達の真上にいるみたいであった。

当然、大荷物を抱えてこの目の前の絶壁を登れる訳も無く。

「無駄に遠回りになりそうだ……」

「ですねー……」

どこか幸先の悪い始まりが、俺達のデフォにならないようにただただ祈るのであった。割と切実に。



「まだいてくれて良かった……。これでまた密林中を飛び回られていたらと思うと、ゾツとする」

「いたらいたで、ホツと出来ないのが救われませんけどね……」  
「上手い事言ったつもりか」

目の前にいるイヤンクックは、発達した顎で土を掘りその中に入っている昆虫を食べている。全長で9 m強ほどもある大きな図体だ、それを昆虫で賄おうとするならば多くの時間を餌探しに裂かなければならないのだろう。

あちらは食い気で気もそぞろ、こちらは風下かつ身を隠して動いていない為、同じエリア内とは言ってもまず気づかれることは無い。安心して最後の打ち合わせを出来る。高所に位置している影響か、風が吹いていて話し声もかき消してくれるのだ。

「よし、セイディ。もう一度言っておくが、まず俺が行ってお手本と周囲の邪魔者を片付ける。その後、俺は極力指示を出すか、邪魔者を退けるような援護だけに留まる。……まあ、危なくなったら手助けはする。だから、お前は何も気にせずイヤンクックの事だけを考えてろ。——それを頼りに気の抜けた動きをしたら本気で怒るが」

「はいっ!!」

うん、気合十分。セイディは、瞳に確かな力を宿して身構えている。

「よし、それじゃあそろそろ行くかな」

「……そういえば。師匠、師匠って初めてあった時に大剣を使っていませんでしたか？」  
「うん、そうだよ？ 俺は大剣使いだ、片手剣だって相手に合わせて使うだけで」

何を隠そう、今の俺の得物はいつも用いているアイアンソード改とは違う。まあ、あれから強化を施していきバスターブレイドにまでなってくれたのだがそういう事でも無い。

動きやすさこそが信条であり、他の武器よりも多い手数こそが最大の武器。癖の無い使いやすさと片手で道具が扱えることからギルドでも初心者には奨励されている。翻って剣とは言っても極太なぶ厚さを誇る大剣に比べると、巨大な敵と相対するにはどこか頼りなさが否めないそのサイズ。盾とは言ってもランスが使う頼りがいのある盾と比べれば受け流す為のこじんまりとした盾。

そう、俺の手にあるのは紛う事無く片手剣。骨の素材を用いて作り出された『ボーンピック改』であった。

「はー、話には聞いたことはありませんでしたけど。私も初めて見ました、武器を二種類以上使う人」

この世界では、ほとんどのハンターは大剣なら大剣と武器の扱いは一種類のみを極めていく。それには当然、理由がある。

言うまでも無い事ではあるが、それぞれの武器は全く異なる特性を持っており、当然持つ武器によって立ち回りや役回り等々全く異なってくる。

習熟に軽く年を超える相当の時間がかかる以上、ハンターは基本的に一つの得物を極めていくことが多いのはむしろ必然である。

例を上げよう。

命のやり取りをしている極限の状況、一歩間違えば容易く死ぬような場面だ。

普段は片手剣を愛用しているハンターが、ランスの方がそのモンスターとの相性が良い武器であったが故に新たに修練をしてランスを得物とした場合。

咄嗟に動かねばならない時に、片手剣の感覚で動いてしまおうとしないと誰が言い切るだろうか。

殆どの者が、僅かながらの可能性が胸をよぎり言い切れない。そして言い切れない者は、己の得物を一種類に定めるのだ。

片手剣の扱い方を、頭で考えずとも体が覚えているという高いレベルまで修練していた事が逆に仇となると言える。

二種類以上用いていると、そのような事態が起こる事は何もおかしくはない。

二種類以上種類の違う武器を用いている者は、余程器用さに自信があるか、それを元



から考慮に入れて修練をした者ぐらしいしかない。それがこの世界に生きる者の定説だ。

「師匠って片手剣も使えたんですねーっ！ 中々器用です、はい」

「褒めてもらえて嬉しいが勘違いすんなよ、片手剣使ってたのはハンターに成りたての数週間だけだからな」

「……はい？」

事実、今俺が持っているのはセイデイの持つアサシンカリンガと比べて切れ味に劣るボーンピック改、元が竜骨【小】だけあって半ば殴りつけるように使うしかない物でもある。

「えーっ!? 自信があるから片手剣使ってるんじゃないんですかっ!？」

「自分、不器用ですから」

「じゃあ何でそれ選んでるんですかっ!？」

「まー、当然今のは冗談だ」

「……ですよ、流石に私もそれはおかしいって思ってますし——」

「正確には数日だな」

「——それはおかしいっ!？」

打てば響くように俺の軽口に突っ込んでくれる。つい、笑みが零れてしまう。

(二人称視点での片手剣……訓練やベテランの付添ならともかく、個人での実戦はこれが初めてだ。——まあ今後の為にも、片手剣での立ち回りはどうしても確認しておかなきゃいけないからな。うー……それにしても、やっぱり見た目ほっそい骨つて言うのは頼りねーなー)

何せ心の中は不安がいつぱい夢いつぱいで、もういつぱいいつぱいだ。

仲間内での軽口も、これはこれで行き過ぎれば気が抜けてしまうモノの、弁えてさえいれば程良いリラククスが保てて良い事を再認識する。

「お、来た来た。ランポス」

別エリアより、イヤクツクのおこぼれに与ろうとでもしたのかランポスがやってきた。

まあ、今回イヤクツクは土掘って虫食べてるだけだから骨折り損なのだが。

「うーむ……今俺に狩られたら、文字通り骨折り損になる訳か」

「はいっ?」

「いやっ……何でも無い。それより、だ。これから俺がイヤクツクの周りにいるランポス……今二頭いるな、そいつらを狩る露払いと、片手剣での立ち回りの参考を見せて

やるから。しつかり見とけよ」

「え、でも師匠片手剣は今数日って……!」

「間違えんな、『実働』、数日だっ!!」

勢いよくイヤンクツクと二頭のランポスがいる方へと駆け出す。有無を言わず抜刀しながらのジャンプ攻撃による奇襲で一頭のランポスを斬り倒す。

(大丈夫っ、いけるっ……!)

思考を変える。今までの豪快な大剣での戦い方から、軽やかに立ち回る片手剣の思考へと。

俯瞰していたあの頃のような動きをシミュレーションした内容を、頭の中でイメージしながら。

イヤンクツクは未だ索敵中のようだ、のっそりとした様子で周囲を伺い見るからに動きが鈍い。

(その間にランポスを狩り倒すッ……!)

ランポスはギャアギャアと騒いでいるが、所詮それは声でしか無く。俺を止める為の何の抑止力にもなりはしない。

再度、駆ける。

二頭目のランポスへ向けて、今度は違うやり方で仕留めようと試みる。

左手に持つポーンピックを振り下ろす。ランポスの頭に当たり、仰け反らせるに留まるそれは、しかしまだ終わりでは無い。

振り抜いた腕を右から左へと戻すような横斬り、そして体を捻りつつ剣を振り抜く回転斬りが流れるように続けられる。

『ギイ、ギヤアアアアッ?!』

反撃すら許す事も無く地に伏したランポスを、しかし一瞥して息絶えた事を確認した後は歯牙にもかけない。

イヤンクツクが、こちらを認識したからだ。

『コカカカカ、キヤアー!!』

「うしっ、勝負だ鳥野郎……い！」

こちらに威嚇の声を投げかけてきている間に、相手の足元へと移動する。何せイヤンクツクの体高は約3m、片手剣が届かないと話にならないからだ。

と言っても、足は狙わない。人間よりも遥かに重い体重を支える部分だ、相応の固さは持つていて然るべきと言える。

他の飛竜にも大体共通しているが、狙うは——腹。

「お……おおらああっ!!」

イヤンクツクが何らかの行動に移る僅かな時間を無駄にはせず、連続した攻撃で幾度

も腹部を斬り付ける。イヤンクックの中で最も柔らかい肉質であるそこを狙うのが基本的な戦法だ。

大剣なら、これまた腹部と同程度の柔らかさの翼膜まで届かせることが出来るのだが。

そう考えつつ、数撃で見切りをつけ前転で転がりつつイヤンクックの後方へと距離を取る。

「おおつとおつ！」

——ブオオオン!!——

空気を引き裂き、薙ぎ払われる尻尾。あそこで欲をかいて斬り続けていたら、間違いなく強靱な尻尾で体を持って行かれていただろう。

(片手剣だと、怖いな。もう少し……一挙動分早めに動く、か)

僅かな微調整を己に施しつつ、冷静に更なる動きを試していくのであった。

◇

「凄く凄く、あんな動き見た事無い……！」

知らずセイディは、両拳を硬く握り締めていた。

しかしそれも仕方が無い。目の前の光景は、それ程までにセイデイの心に衝撃を与えていたのだ。

「でも……あんな立ち回りじゃ、幾つ命があつても足りないですよ師匠……」

全く新しい価値観に触れたように心が震える反面、危なっかしくて見ていられない。

レナードの戦い方は普通のハンターならまずしないような、まるで崖の上ギリギリを目隠しで歩くようなリスクの高い戦い方だった。

一撃でも喰らえば、ハンターとして致命的な後遺症が残るかもしれない。

それを考慮に入れば、どんなにリターンが大きかろうと極力リスクを避けて通るのがハンターというもの。

そしてリスクは避けた上で、それなりの成果を上げていく。それが優秀なハンターと呼ばれる者なのだ。

何故ならハンターとは困った民衆を救う正義の味方でも無ければ、英雄譚に颯爽と登場するような英雄でも無い。生き方では無く、れっきとした稼業なのだ。時として、そういった無茶を行わねばならない時もあるかもしれない。だが初めからリスクを度外視して狩りを行う者は、そういう意味ではハンターとは言えない。

少なくともセイデイは、故郷の村で師であり先輩ハンターでもある父にそう教わった。

血気に逸るなど。『行けるかもしれない』なら行くな、と。常に冷静に、準備を万端に。そうした上で、己を取り巻く事象全てを判断材料とした上で『確実に行ける』時にだけ行け、と。

若干愛娘に対する必要以上の過保護な心配はあるとは思うが、歴戦のハンターとして言っている事はおかしくは無く。

ハンターの視点から行けば、間違い無く異端はレナードの方であった。だが。

例え、ハンターの常識から言えば間違っているとしても。

レナードが戦っている所を見ていると、怯え震えそうな心が奮えてくれる。

同じパーティというだけで、恐怖に粟立つ心が落ち着いていく。

ジャンボ村の村長は、彼の事を優秀なハンターだと評していた。でも、もしかするとそれは間違いかもしれない。

武器や防具を身に纏い、己よりも大きなモンスターに真つ向から戦いを挑む。

無論、道具も扱うし時に逃げもするだろう。

それでも、その姿は幼い頃に母に寝物語で聞かされた話にそっくりで。

そんな彼を表すのに、ハンターよりももつと的確に表しているモノがある。

——英雄。

そこにいるだけで、周囲の人に安心感を与えるような存在。

あるいは、自分が師事した人物は将来そう呼ばれるようになるかもしれない。

セイデイは漠然とそう思う。

「少しでも……しつかり見ておかないとっ……！」

今目の前で行われているあの動きを、そっくりそのまま真似る事は無理だろう。それは今現在のセイデイだけでは無く、将来成長しているであろうセイデイでも、だ。

あんな戦い方をしていたら、攻撃が当たって体が壊れるのが先か、過度の緊張から心が消耗するのが先かと言った具合になるのは目に見えている。

ただしそのまま彼の猿真似を行うならば、だ。

必要なのは、適応化。

レナードの動き、その一つ一つを取ってみれば自分よりも洗練されているのは間違いないのだ。ただ、それらを合わせた全体の方向性が違うと言うだけで。

その為セイデイは、少しでも多く自分の動きに取り入れる事が出来るように目を皿にして食い入るように見る。いや、観るのであった。

——キイイインツ！——

「うー……慣れないなあ、これ」



甲高い音と光がエリア5に広がる。

レナードが閃光玉を投げた為だ。

しっかりと様子は見ていたのでいち早く対処する事は出来たが、事前に教えてくれればいいのに、と恨みがましく呟いてしまう。命を懸けて戦っている最中である事は当然心得ているので本人には言わないが。

「ふうー、こんなモンだな」

そうこうしている内にレナードがこちらに戻ってきた。どうやら距離を置く為、閃光玉を使ったようだ。今もグルグルとイャンクックが居もしない敵に向かって尻尾を振り回している姿は、どこか滑稽さを思わせる。

「少しは参考になったか？」

「あー、えーと。……はい」

「正直な感想ありがとう。まあ、お前はお前のやり方でやればいいさ。どうせそっちはオマケだ。俺の動きはともかく、イャンクックの動きは大体分かっただろ？」

「はい、それは勿論っ！」

あれだけしっかりとお膳立てしてもらって観察をしていたのだ、それでまだ分かっているなければ絶望的にハンターには向いていない。

当然、曲がりなりにもセイデイはそのクエストの消化速度の速さから優秀と周りから

目されているくらいだ。それ自体は無茶からくるものではあったが、事前に仕入れた情報に今しがた見たイヤンクツクの動きを合わせれば、実際に狩りを行っても余裕を持って対処出来る。心に余裕が出来るという事は、すなわちセイデイ本来の戦い方を可能とする事を表していた。

先程まで力強くも軽やかに動き回っていた為に僅かに息を乱しているレナードの目を見ながら、セイデイは自信ありげに返事をして頷く。

「最後に一つ……これはイヤンクツクに限らないが、モンスターは傷付いていつて怒り状態になると動きが速くなるから。それだけは気を付けろよ？ 狩っている最中にいきなり動きが変わったら、リズムが狂わされてマズイ状態に陥りやすい」

動きに慣れるまでは、距離を取れ。

その言葉を最後に、レナードは腕を組んで傍観の姿勢を取る。

後は任せた、という事だろう。

(それなら師匠……後の事は、任されましたっ！)

心は熱く、されど冷静に。丁度閃光玉の効果が消えたイヤンクツクへと、セイデイは軽快に駆け出すのであった。



「ふうむ……。少し遠巻きに過ぎる、んじゃ……。？ ああ、いやいや。腰はひけてないし別に問題は無いか」

三人称視点で見ると、如実にゲームと比較してしまうからいけない。

それに、そうだ。俺は人一倍頑丈だからな、そんな俺の感覚と他の人の感覚は一緒にしたら駄目だろう。

「あれ？ だとするとイヤンクック狩猟させるの早まった……。？」

い、いやいや。

だって、村長とかも一応知ってるみたいだったし。実力的に駄目だったら止めてるはずだし。止めてないってことはイヤンクックも倒せるだけの力は十分あるって事だし。

だから何の問題も無いはずだ。はず、だ。

「……。でももう少しだけ近寄っておくか、うん。備えあれば何とやら、万が一があると怖い。火の用心火の用心」

見た感じでは、セイディは基本的にイヤンクックとは距離を取っており、余程隙が大きい時や、無ければ閃光玉やペイントボールを大きな顔に投げつけたりして隙を作ってから無理の無い程度に斬りつけている。

「お、今度はシビレ罫か。あ……。そりゃ、あんだだけ大荷物にもなる訳だ。何かしらの道

具を使って隙を突くのか、ペイントボールを顔にとか想像もした事無かったわ」

言われてみれば確かに、あれは効果的だ。あのネンチャク草特有のネンチャネンチャとした感覚は肌にくっ付けば非常に鬱陶しい。硬い甲殻に感触があるのかどうかは残念ながら不明だが、生き物である以上目とかに付着すれば鬱陶しい事この上ないのは俺達と変わらないだろう。

それにペイントボールを顔面に喰らえば、視覚と嗅覚に大きな影響を及ぼすのは身を持って実証済みであった。不本意ながら。

「今度俺も使ってみよ……ん？」

見ると、セイデイも大分パターンが掴めてきたのか、動きにどこか自然な滑らかさが出てきている。初めの僅かに残るぎこちなさ、それが取れたようだ。

「うん、尻尾も距離を取ってしつかり避けてる。火炎液も問題無いな、嘴の啄み……見切ってる、と」

多少時間はかかるだろうが、このまま行けば無傷で終わるかもしれない。それくらいに安全さを重視した動きに、俺も安心して見ていられる。

「ま、元々心配なんかしていなかったけどな……不味いッ!!」

イヤクツククの様子が変わった。

頭を振りながら、その巨体をものともせず飛び跳ねている。

アレは怒り状態への移行した事を表す動きだ。セイデイは、慎重に様子を見ながら盾を構えている。距離を取っている為、彼女からして見れば間違いでは無い。だがあれでは、怒りから動きの早まったイヤンクツクの攻撃に捕まってしまう。

案の定、と言うべきか。一度は威力の増した啄みを盾によつて防いだが、そのせいで大きく後退させられバランスが崩れている。そんな状態のセイデイに、間髪入れずイヤンクツクは次の攻撃、噛みつきを繰り返そうとしているのが分かる。

「届けえっ!!」

走りながら、腰から閃光玉を探し当てイヤンクツクの目の前に向かうように放り投げる。

この狩りで何度目になるかわからない程花開いている閃光の花は、今度もまた期待を裏切らずにイヤンクツクの目の前で煌びやかに咲いてくれた。

丁度、セイデイが噛みつかれる直前であったが為に目を瞑っていたのも功を奏した。

もがき苦しむイヤンクツクを尻目に、その脇をすり抜けるようにセイデイの手を掴んで起こしつつ一目散に隣のエリアへと駆けるのであった。

◇

「はあつ、はあつ、はあつ……」

「……ふう、ここまで来れば大丈夫だろ」

二人して石床に座り込む。イヤンクックはまだ隣のエリアのまま、それは狩りの最中にセイデイがペイントボールを投げつけてくれていたおかげで分かる。

息も整え、どこか申し訳なさそうな顔でこちらを見ているセイデイの顔へ、そつと手を伸ばす。この内なる想いを隠す為に、顔は優しく微笑みを浮かべている、ハズだ。

「セイデイ……目を、瞑れ」

「……え。え、えええつ!? いや、そんな私はですねっ——」

「いいから。瞑りなさい、セイデイ」

「……は、はいっ」

ギューツと固く力を込めて目を瞑るセイデイの顔の輪郭に優しく手を添えながら——俺は勢いよくデコピンをお見舞いする。

「痛たつはあああああつ!? な、なななにやにをすんですかー!?」

「喧しい、だから怒り状態は動きが速くなるから気を付けろと言ったのに、何で初見で動きを止めてじつと見守ってるんだお・ま・え・は〜!」

「いあたつ、いた、いた、痛いですよー!?」

「当たり前だ、バカたれ。痛くしなきゃ何の意味も無いだろうが」

「本気で痛かったんですが……。うう、絶対おでこ痣とか瘤とかになってるよお……」  
額に手を合わせて涙目になってるのを見て、ようやく連続デコピン制裁を止める。聞く体勢になるのを待って、アドバイスを話し始める。

「何度か見てどれぐらいの速さかを経験して把握していないなら、お前の戦い方なら形振り構わず走って逃げて距離を取れ。多少の時間や資源がかかっても、とことん安全性を高める。お前、そういう戦い方なんだろ。ん？ 別にそれを俺が否定するつもりは無いから」

言いつつ、キュボンと音を立て回復薬を一気に飲み干す。グビリグビリと喉を通る感覚が、実に心地が良い。美味しくは無いが、狩場の緊張感が喉を想像以上に乾かせる為、大抵の場合文句は無い。

「まあいい、本格的なお説教は無事に狩りが終わった後だ」

「まだ続くんですね……」

「ベースでも言ったが、もう時間が無い。が、経験から言うのと向こうも向こうでそれなりに体力は削れている。恐らく後一押しで巢へと戻って体力回復をしようと試みるだろう。あ、そうだ——」

「イヤクツクは体力が無くなると足を引き摺りながら巢へと戻ろうとするんですよ」

ねっ!」

「——ああ、そうだ」

先に言われてしまい、どこか面白くない。つい、仏頂面になってしまふのを感じる。そのまま、どこか鼻高々と胸を張っているセイデイの鼻の頭を指でピンツと弾きながら立ち上がる。「ふおおっ……!?!」と色気の無い悲鳴を上げ、顔を両手で押さえながらの抗議の視線は飄々と受け流す。

「……ところで、師匠?　なんで今回は片手剣を使おうと思ったんですか?　確かに動きは凄かったですけど」

「ん……まあ、ちよつと今後の為に、な。取り敢えず、この『ポーンピック改』を強化していつて毒属性を付けたいと思ってるんだ。麻痺も悪くはないけど、やっぱ毒だな」

「はあ……毒ですか。あんまり考えた事が無かったですねえ」

要領を得ない返答を返してくるセイデイ。片手剣を使っている癖に、属性の重要さをまだ理解していないらしい。いずれ教育しておかねばならないだろう。

「ほれ、砥石で軽く武器研いで。それから携帯食料食ってスタミナ回復、それから回復薬飲んだら出発だ」

「ふあゝい……」

どこか気の抜けた返事をするバカ弟子を軽く睨みつけながら、再度狩場へ向かうので



あった。



「よし……設置完了つと」

エリア5にの片隅に、ボシユツと音を立てて落とし穴が展開される。セイデイがイヤクツクを引っ張ってきて、俺が設置した落とし穴へと落とす手筈になっている訳で。見晴らしのいいここからは、セイデイがイヤクツク相手にちよつかいを出しているのが良く見える。距離を置いて、未熟さ故にどこか危なげに、それでもヒラリと攻撃をかわしている様子は、蝶と言うより宙に舞う木の葉か紙切れのような印象を受ける。当たりそうで当たらない印象を受けるので、見ている側からすれば冷や冷やとしてしまう。

他の用意として、万が一イヤクツクの攻撃で爆発しないよう落とし穴から少し離れた物陰に大タル爆弾が上に乗った荷車なども置いてある。セイデイからは事前にイヤクツクの進路が落とし穴の左右に外れた時用として、わざわざ持ってきていたらしい携帯用シビレ罠まで渡された。非常に用心深い。

道具を多用して安全確実に狩りを行うセイデイらしい狩りの仕方と言えるだろう。

——パプウウンツ!! ——

「よしよし、来たな」

設置を終了した合図として角笛を吹く。深く息を吸い込んで放たれたそれは、エリア中に響き渡りイヤンクックを惹きつけ、同時にセイデイには設置完了の合図として把握させてくれる。

必死の形相で駆け出してくるセイデイ。それを追うクック。経験上両者の距離はそこまで焦る位置に無いだけに、不謹慎ではあるが苦笑いを浮かべてしまう。

「師匠っ、ししよっ!!」

「おー、ここだ。ここまで走って来い、セイデイ!」

「そ、そこですねっ……とっ、うひゃあっ!」

「はい、ゴール。——しまんないね、お前さんも」

「うう……。土が顔にべったりいっ……」

最後の最後でズザーツとヘッドスライディングをかましてくれた弟子を横目で見つつ、イヤンクックが真つ直ぐにこちらに向かつてくるのを確認する。

血走ったようなその眼差しは、苛立ちの元である俺達二人をしつかりと捉えている。

一直線、何物にも邪魔はさせないと言わんばかりの疾走は——だからこそ、容易く畏

へとかかる。

『ギヤアアアアッ!? ギヤアアアアア!?』

数百kgの体重でもって踏み抜かれた落とし穴。その翼膜や甲殻へネンチャク草が材料である粘着力の高いネットが絡まり、羽ばたこうとするイヤクツクの動きを阻害する。

「さあ、急げッ!」

「は、はいっ!」

その間、何も俺達はぼーっと見ている訳では無い。わざわざ嵩張る荷物の代表格とも言える大タル爆弾を荷台に載せてまで持ってきたのは、全てこの時の為なのだから。

「ちゃんとアイツに爆風が行くように置けよ?」

「分かっていますっ!」

ただ置くだけ、と言えるほど爆弾の設置作業は簡単では無い。距離が近すぎると暴れもがくモンスターの体にぶつかり、離れる事も出来ずに共に爆発の餌食になるという危険性が。しかしだからといって離し過ぎると、十分なダメージが見込めずに計画が狂ってしまう。

落とし穴に嵌って身動きの取れぬモンスターの横に爆弾を置いてくる。一見子供の使いのように思える作業でも、非常に奥の深いものとなっているのだ。

いち早く置いた俺の真横に、セイデイもまた大タル爆弾を設置する。即座に距離を置き、この狩りを終わらせる一撃をセイデイに促す。

「さあ……決めろ、セイデイ！」

「はいっ！……てえ、やあっ!!」

勢いよく投げつけられた石ころ。それは寸分違わず設置した大タル爆弾へと吸い込まれるように向かっていき、苛烈な大輪の紅い花を咲かせた。

大タル爆弾二個分の大火力はイヤンクツクの黄色い嘴や耳を炙るように灼き、柔らかい翼膜、固い甲殻を分け隔てなく撫で。

『ゴアアアアアッ!?!』

断末魔の叫びを天へと投げかけ、そしてどうと身を投げ出し息絶えた。寸前に放たれた『キヤアアア……』という鳴き声が、何とも寂寥感を呼ぶ。

「悪く思うな、これも弱肉強食だからな……」

チラリと横を見ると、セイデイが呆けたように口を開けている。未だ自分が成したことへの実感が追いついていないのだろう。そうしていても仕方が無いので現実に戻す為に、軽く肩を叩いて正氣に戻す。

「ほらっ、まだ狩りは終わっちゃいないぞ?」

「あつ……えと、師匠。……私、えと。飛竜、倒したんです、よね?」

流石にここで先程の様に「いやだから、イヤンクツクは鳥竜種で」などと無粋な返答はしない。

ただ、笑みを浮かべて一言。

「ああ。……お前が倒したんだ、一番はお前に譲るよ」

「……っ！ はいっ!!」

感極まったかのように涙ぐむ弟子に笑いかけながら、剥ぎ取りナイフを手に獲物へと向かうのであった。

(血塗れで、泣きながらも嬉々として解体していく女の子……怖いな)

若干、目の前の光景に腰が引けてしまったのは余談である。

## アイルールの集落

「おお、流石は工房のばあちゃん。ぴったりだ」

「ほっ！ 当たり前だよ。それがワシの仕事なんだからね」

カチャカチャという防具が擦れる音すらも、今は耳に心地よい。温暖期のじつとりとした暑さも無くなり、肌寒い寒冷期へと突入を迎えた。セイデイとのイャンクック討伐でレナードもやつとイャンクックの素材が必要数集まった為に、工房のばあちゃんに《クックシリーズ》一式を仕立ててもらったという訳だ。

工房のばあちゃんの体格からしてみれば一抱えもある鍛冶用のハンマーを堂々肩に担いで言う一言は、何とも頼もしい限りである。

「にしても……あの娘っ子がいないと、何ともさびしく感じるねえ」

「むす……ああ、セイデイの事か。仕方ないって、あいつにも事情がある訳だし」

あのイャンクック討伐からすぐに、セイデイは自分の村に帰っていった。時間から言って、村の人がどこかに疎開し始めるまでにはおそらく間に合う事だろう。これでセイデイは、晴れて村付きのハンターとなる訳だ。

レナードとて、時折パーティと酒場などで姦しくも世間話をしている様子が見れないと

なると、確かに寂しさも無きにしも非ず。

「……まあ、枯れ木も山の賑わいって感じかな」

「素直じゃないねえ……子供なんざ素直が一番だよ」

「もう18なんだから、子供って年じゃ無いよ……」

「ワシから言わせれば、アンタも毎日村中を走りまわつとる村長も同じケツの青いハナタレじゃて」

「あー……それじゃ、また！」

受け取る物はもう受け取った。腕組みをしてカカ、と笑う工房のばあちゃんにこれ以上何か言われる前に、レナードは逃げ出すようにして工房を後にするのであった。



「さて、どうするか」

慌てて工房から飛び出すように出てきたが、今日予定していた用事は防具の受け取りの為、それも完了した今となつては特にこれといった用事も無い。敢えて言えばしばらく新たな防具を実際に身に付けて暮らし、不備があれば工房へと報告しに行くぐらいか。工房の主の腕前からすれば、そんな不手際は方に一つも無いのだが。

「家に帰ってニヤァの相手でもするか」

「フツ……随分、余裕だな」

「む……お前か」

一人の男が歩み寄って来た。口元に浮かべたニヒルな笑いに常に装着している黒いフードがトレードマークのハンター、レオンだ。着ている装備は《ハンターシリーズ》となっている。頭のみヘルムを付けずにフードを被つているところが気にならない訳では無かったが、流石にレナードも自制した。自分に探られたくない過去があるように、誰にだって探られたくない過去というものは存在しているものだから。多分10円ハゲでもあるんだろう、冗談交じりに酒の席で言ったこともあるがまさか本当にそれな訳もあるまい。

「……何の用だよ」

「ご自慢の愛弟子が自分の村に帰ってご機嫌斜めか？ やれやれ、八つ当たりは止めるんだな」

「俺は、お前が、嫌いなんだよっ！」

「フツ……奇遇だな、オレも同じ意見だ」

他者に対しては割合人当たりの良いレナードにしては珍しく敵意を剥き出しにして睨みつける。その態度に違わずレナードは目の前の気障な男を快くは思っていないかつ



た。

何故ならこのレオン、やたらレナードと被っているのだ。名前からしてレナードとレオンであるし、年齢も同じで使っている武器も同じ大剣。初めて出会った時は武器と防具の種類すら同じ有様だ。偶々そこに居合わせたパーティにペアルックなどからかわれたのは、レナードにとつて忘れたくとも忘れられない恥ずかしい思い出となつている。その時から、互いに意識するようになった訳だ。《ハンターシリーズ》も、レオンが使っていた為にやむなく使用を止めている。

「まあいい……今日、話しかけたのはオレもイヤンクツクを討伐する事が出来たからだ」  
「へー、ようやく？ 随分とまあ、レオンさんはのんびり屋さんなんですネー」

「……フツ。いや何。新しい防具に浮かれて馬鹿みたいな顔で歩き回る程にはのんびりとはしていないぜ」

「……………」

「……………」

「……………ふんっ！」

全く同じタイミングで顔を背けて、レオンはそのままどこかへ行ってしまう。

ちなみに、何故お互いの事を目の敵にしているかと言うと。最大の理由はそれぞれ狩りの腕ではレナードの方が一歩先に進んでいるが、レオンはレナードより見た目が良

かった。ただそれだけである。

「たくつ……。ケチがついちまったな、全く」

折角の高揚した気持ちも、先ほどの邂逅ですっかり下がってしまった。とは言え、とレナードは気を取り直して酒場に向かう。

（今日は家で過ごすつもりだったけど、予定を変更して密林へと向かおう。やつぱ実際に具合を確かめてみるのには、狩場が一番だ。断じてレオンに触発された訳では無いけど）

などと誰に言い訳するでもなく、心中で呟きつつ家の建築をしている横を抜け酒場のカウンターへと向かう。

「パティ」

「はいはい！いらつしやいませ〜！ お、早速クエストですか〜？ 働き者ですね！」

未だ日中の為、酒場で酒を飲んでいる不屈き者はいなかった。その為か、何やら書き物をしているパティを呼ぶ。

「何か……。そう、寒冷期だしドスファンゴとか無いかな？」

「えつと……。今その条件で受けられるクエストはありませんね〜、と言うか今来てるのは特産キノコの採集だけです」

「うえつ……。マジかよ」

ジャンボ村の周辺は未だ未開の地。大抵、いつ来ても討伐絡みの依頼があるのだがどうも運が悪かったようだ。既にドスランポスやドスフアングも問題無く狩ってるのだから流れからいけばゲームだとうに砂漠も解禁されている時期なのだが、何故かその気配も無く解禁されずにいる為、砂漠という訳にもいかない。

まあ、元々生き物の少ない寒冷期だし……と自らを慰めるように呟きながら、レナードは仕方なく特産キノコの採集依頼を引き受ける事にするのであった。

「気を付けていってくださいね。お帰り、待つてまゝす！」

「へーへ」

ヒラヒラとやる気が無さそうに手を振りながら、レナードは船着き場へと向かうのであった。



「参ったなあ……」

密林の只中、エリア9でレナードは腕を組み唸りを上げていた。その眉は言葉通り、歪められていた。今回納めるべき特産キノコの数たったの5本だ。生態系を乱さない目的且つ未熟な者にも打ってつけという事で、少量にする代わりに常に受けられるよ

うにしているそんなクエスト。当然その完遂は容易く、普段ならば一時間もかからずに終えてしまうような容易い量。しかし今回、レナードは自分の知る限りの場所へ向かってみたがいずれも外れ。未だ一本も集められていないという燦々たる有様となっているのだ。

彼の知っている特産キノコの群生地は10あるエリアの内エリア1・2・5・6・9と、テロス密林全体の半分にも渡る。それでも尚見つからないという事は、事態の異常を表していた。

異常はそれだけでは無かった。当初は特産キノコを採るついでに、アオキノコのような狩猟に不可欠な消耗品の素材を集めておこうと考えていた。だがそれすらも、根こそぎ密林から無くなっていた。

「特産キノコの方は……こりや、どっかのハンターの仕業だな。痕跡が綺麗すぎる」

アオキノコを含めた食用に適したキノコは、一つも見当たらなかつた。しかし、そこらには特産キノコがあつたであろう痕跡と比べると稚拙な……と言うより、荒々しい掘り起こされ方をしている。十中八九、野生のモンスターが行つたものだろう。

「つまり……。金策か何かで特産キノコをハンターがごっそり収穫。普段はそれを食料にしていたモンスターが、代わりにアオキノコみたいな食用のキノコを食い散らかしている……と。悪質だな、こりやあ」

全くもって、特産キノコ採集クエストの必要数が少ない理由を理解していない行爲だ。後で村長やギルドに報告するべき案件だな、と心に留めておく。

「道理で、モス達も少ない訳だ。……代わりに、あいつらがワラワラと出てきやがる」

その言葉を待っていたかのように、丁度背の高い木々の向こうから二頭やってきた。

あいつら、とはコンガの事だ。コンガは、全身が桃色の毛で包まれており頭頂部のみ黄色い毛が生えている。地肌は黒く、カバとゴリラを混ぜて限界までだらしなくしたような体形をしている。

コンガの大きな特徴を挙げる際には、必ずと言っていい程二点が挙げられる。一点目はキノコを大好物としている事。そして二点目は――。

両腕を大きく広げての威嚇から、コンガは即座に後ろを振り向き力を込める。その力を込める動作は、例えコンガの生態を知らなかったとしても、見る者全てに等しく嫌な予感を想起させる。

「うおおっ!!」

全力で、本当に全力でレナードは大きく飛び退く。イヤクツクの時にも見せなかった緊急回避のおかげもあって、ソレの影響を受ける事は無かった。

「くそっ……屁とかこいてんじゃねーよっ!! 何食ってんだ、コノヤロー!!」

そう、コンガの最大の特徴はその放屁にある。屁と聞いて侮ってはならない。人間の

ソレとは違い、特殊な成分が混ざっているコンガの屁は、一度悪臭が染み付いてしまえば中々取れず破棄する事も考慮せねばならない程なのだ。

「あー……色付いてるし、ちゃんと避けた筈なのになんか臭いがする気が」

身に付けているモノに臭いが移るのも問題ではあるが、更に問題は回復薬等を口に含めなくなってしまう事だ。しかし考えてみれば当然の事で、常人に比べ嗅覚も遙かに優れているハンターがスカンクのような強烈な臭いのする屁を喰らえば、何かを口に含もうとすると吐き気がしてしまうのはむしろ当然の事である。

「おおっ!!」

振りかぶる蛇剣〔蒼蛇〕のランポスの牙を彷彿とさせるギザギザとした刃が、コンガの決して硬いとは言えない毛と皮膚を袈裟切りに食い破るように引き裂いていく。更に、返す刃で横薙ぎ一閃。もう一頭のコンガもまた断末魔の叫びを放ち倒れ伏す。

あまりに呆気ない終了ではあるが、小型相手ならば二の太刀要らずと言うのは大剣の真骨頂である。短い戦闘時間はそれだけハンターの負担を和らげる利点がある。

「ふう……。いっつも気を付けてはいるけど、こいつらの攻撃だけは心底当たりたくないマジで……」

思わずかいていた汗を拭う。物理的なダメージ自体は少なくとも、絶対に当たりたくない。どうやらレナードは、自分でも気づかぬ内にいつも増して集中をしていたよう

だ。

忘れぬように、手早くコンガの素材を手際良く剥ぎ取っていく。

「……………ん？」

耳をそばだてる。どこからか、切羽詰まったような甲高い声が聞こえてくる。

「あつちか？」

見ると、一匹のアイルーが腹を空かせたコンガに追い掛け回されていた。コンガは雑食だ、普段はキノコばかりではあるが空腹が極まりその気になれば獣人の肉も食す。

「弱肉強食……………って訳にもいかんね、知ったからには」

アイルーは人間とほぼ変わらぬレベルの高い知能を持っており、人間の社会にも深く関わっている。その為、動物と変わりないコンガに与するよりは、アイルーに味方した方が後々の利益になる……………という建前の元、駆け寄る。

「そのアイルー！ 助けてやるから、こっちに来いッ！」

「ニヤッ……………」

しかし、切羽詰まっている状況にも関わらずアイルーは迷う。信じられないのだ。村や街の中ならともかく、狩場でアイルーやメラルーは狩りの邪魔にしなければならない。その為、ハンター達の中では事前に排除する事すら正当化されているが故に。

「信じろッ！ 俺をッ！」

「二……ニヤアツ!!」

果たして、アイルーはレナードの方へと駆け出した。もう少しのところ度再度捕まえられず両手が空を切ったコンガは明らかに苛立ちながらこちらへ向かってくる。

「せい、りやあつ!!」

「ニヤツ!?!」

ランポスグリーヴが土を蹴り、踏み込んだ一撃はコンガを捉える。

慌てレナードの後ろへと走って距離を取っていたアイルーは、攻撃の際のコンガが発した断末魔を契機に小さく悲鳴を上げていた。

「ふ……。よし」と

静寂の中、剥ぎ取りナイフでコンガの素材を剥ぎ取っていく音だけが森の木々へと吸い込まれていく。

やがて、剥ぎ取りも一段落したところ、おずおずと先程のアイルーがお礼を述べにきた。「あ、あのハンターさん……助けてくれて、ありがとうニヤ」

「ああ、別に良いって。偶々目に入っただけだから」

お礼を言われるのは照れ臭い。そう、態度で如実に示すレナードにまだ何か言いたげな態度でアイルーは立っている。

仕方が無いので、レナードは先を促す事にする。



「ほら、何か言いたい事があるんなら言っちゃえよ」

「あの……。ハンターさんは、どうしてボクを助けたのかニヤ？」

やたら真剣な目で見つめられながらの質問の為、適当な答えを述べる訳にもいかない。あー、だとかうー、だとかと散々答えあぐねた末にようやくポツリと呟く。

「俺の家族に、な。お前と同じようなアイルーが、いるんだよ……」

恥ずかしそうに顔を背けて頬を指で掻きながら。心なしか顔を赤らめながら言うレナードに、アイルーは再度心からのお礼を述べるのであった。



助けたアイルーの名前は、ニヤン吉と言った。どうやら数匹で集落の為の食糧を集めていた時にはぐれてしまったところを、あのコンガに襲われたらしい。どこか落ち着きが無いようだ。

お礼をしたという事で、ニヤン吉はレナードを集落へ案内した。場所はエリア8、そこに向かう途中レナードは若干困惑していた。

「な、なあ。アイルー達は昔からそこに住んでたのか？」

「いや、元々は別の場所に住んでたんだニヤ。でも、何だか少し前に洞窟の方で揺れが

あったんだニヤ。もし大型のモンスターがいたら危ないからしばらくして偵察に行ってみたら、そこに丁度ボク達が住めそうない場所が出来てたって訳だニヤ！」

「あ……そう。そりゃ、良かったねえ、ホント……はは、ははは」

つまり、レナードが原因であった。

あの時、ドスランポスとの戦闘で全力で放った溜め斬り。石床がクレーター状にへこみ、大きく罅割れる程の一撃は下手をすれば洞窟そのものが崩れ落ちる危険を孕んだものであった。改めてあの時の危なさを認識したレナードとしては、最早乾いた笑いをするしか無かった。



エリア3から繋がつている高台。亀裂の様に走ったイルーの新たな集落への入口は、その真下に存在していた。飛び降りれば振り向かずそのまま南にあるエリア6に走ってしまう為視覚的のみならず認識としても死角に当たる場所であった。

「もし、ランポスとかハンターさんに……あ、悪いハンターさんに見つかったら大変だから、普段はこうして蓋をして隠してるんだニヤ」

高台から降りた場所にある岩棚は、繁殖期になれば飛竜の巣として活用もされるよう

になる。飛竜に気付かれないようにさえずれば、獣人に害を為す小型のモンスター避けの頼もしい番犬代わりにもなるという訳だ。近辺に飛竜の臭いが付いていれば、知能の低いモンスターは近付いてすらこない。所謂縄張りを表すマーキングという訳だ。

「へえ……少し、狭いなっ」

入口から集落への道はアイルー達を通るぐらいなだけあって、人間としては縦も横もついでに奥行きも普通のサイズであるレナードではあつても身を縮めながら移動をしなければならぬ程であつた。とはいえそれは高さのみで、作りを見ると横の幅は悠々としたものである。

「なんで高さは、こんなに狭いの、横は広いんだよっ」

「ニヤ!? ニヤ、ニヤハハ、まあそれはそのう、ちよつと荷車を通さないといけないからニヤ……」

しどろもどろになるニヤン吉。その反応を見て、レナードは確信する。

（ははーん、メラルーがちよろまかした物品つてヤツを村に持って行って、売り捌いてゼニーを稼いでるのが後ろめたいんだな）

レナードとしては、別に思う所もありはしない。そうしなければ生きてはいけないかもしれないし、メラルーもあまりにもレアなアイテムを盗みはしない。命のやり取りをしている狩場で、道徳的な見地から物を盗むのはいけませんなどと言うつもりも無

い。まあそれも、レナードが盗まれて困った事が無いから言える事なのだろうが。何か盗まれていれば、おそらくその答えを知りながらもねちつくくニヤン吉の事を問い詰めていただろう。

とにかくレナードはその事については何も言わず、無事アイルー達の集落に到着したのであった。



「これは意外と言うか。かなり広いな……」

レナードは上を見上げながら呟いた。そう、見上げる程に天井は高さがあった。

「エリア3と繋がってる高台の真下から入ったって事は、ここエリア3の真下ぐらいだよな……?」 上に飛竜でも乗ったらぶち抜けるんじゃないのか? いや、それとも実は狭い道で感覚が狂ってるだけで全然違う場所なのか……?」

周囲は土をくり抜いている訳では無く、石の壁が存在している。明らかに洞窟の一部の様な構造で出来ているのだ。そんな周囲に、住処だろう所々くり抜いたような穴が無数に存在しておりここにいるアイルーやメラルー達獣人の数を物語っていた。結構な広さの空洞であり、そんな所に更に穴を空けて住んでいる。素人目には今にも落盤で圧

死しそうな気がして、レナードとしては割と気が気では無かった。

「さ、こつちニヤハンターさん！ 長老様にさつき助けてもらった事をお話ししなきゃいけないニヤー！」

タツと駆け出したニヤン吉に大股で歩きながら付いていく。

（んー、警戒されてるなあ俺……）

良く見ると、ちらちらと穴の中から白やら黒の顔が見え隠れしている。十中八九、この住人の獣人達だろう。

皆一様に怯えの入った表情でこちらを観察してきている。笑顔を浮かべ手を振るも、小さな子供が僅かに反応するばかりでそれも親の獣人に即座に穴の奥へと追いやられる。取りつく島も無いその様子に、手を上げた体勢のまま、笑顔を苦笑いへと変える。

「……ワシら獣人の新たな安住の地に、ようこそですジャ」

ニヤン吉を連れて、年老いたアイルーが杖を突きながらやってきた。レナードは、おそらくは彼が長老なのだろうと当たりを付ける。

「どうも、ジャンボ村で専属ハンターをやってます、レナードと言います」

「……ワシの名前はお好きなようにお呼びして欲しいですジャ」

好きな名前、という事なのでレナードは無い頭を必死に捻る。

「ふむ……。ワイルド☆アイルーとモンスター・のフン、どっちが良いですか？」

「……ワシの名前は、ネコ次郎と言いますのジャ。お見知りおきを」

余談ではあるが、別にレナードは両方嫌な二択にしたわけでは無く、前者を選ばせるために後者だけを嫌な名前にしたつもりであった。レナードのネーミングセンスの無さは致命的である。

幸い自分の考えた名前を使われなかった事に若干シユンとしてしまった事は、アイルー達の誰にも気づかれなかった。

「長老は、昔ハンターさんに付いてオトモをしてたんだニヤー!」

「余計な事を言うでないのジャ。……それで、ニヤン吉。何故ここにハンター殿をお連れしてきたのジャ?」

「あ、そうだったニヤー! 僕、実は狩りの途中でみんなとはぐれちゃって……そんな時にコンガに襲われたんだけど、ハンターさんに助けてもらったのニヤー! ハンターさんは、命の恩人ニヤー!」

その時の様子を思い出したか鼻息荒くその時の様子を長老のみならず、周囲にまで伝えるニヤン吉。次第に集落の雰囲気は和らいだものとなるが、ネコ次郎の様子だけは変わらず険しいまま。未だ警戒が解けずにいた。

(長として、外から来た異物には最後まで警戒し続けてるんだろなあ、偉いもんだ)

「それで……ニヤ?」

『バフオオオオツ!!』

突如、入ってきた場所から一体のコンガが侵入をしてきた。一体だけとは言え、獣人達にとつては恐怖の対象だ。集まりかけていた獣人達は蜘蛛の子を散らすように穴の中へと散っていく。

「おお、ここの集落は寛容ですね。【獣人族】と【牙獣種】……同じ《獣》って字が入ってるから一緒に暮らしてるんですか?」

「そんな訳が無いですよのじゃ!?! ……ニヤン吉! オヌシ、さてはまた何かやらかしおったな!!」

「し、ししししまったニヤ〜!?! ハンターさんとお話してて、入口の蓋を閉め忘れてたニヤ〜!?!」

「こんの、大馬鹿モンなのジャー!!」

手にした杖を振り上げ怒鳴る長老に、頭を抱えて謝るニヤン吉。その背後には、飢えたコンガが体を左右に揺らし目をギラつかせながら迫っていた。僅かにこの場に残った二匹のアイルー、年を取りマズそうな方よりも若い方を狙うのは最早必然であった。

「に、ニヤアツ!?!」

カバのような顔で開いた口は、滴り落ちる粘性の高い唾液がねつとりと地面に落ちる。あまり鋭くない、剥き出しの歯は逆にボリボリとかみ砕かれる想像しか出来ない。

「——全く、毎度毎度。ご苦労、さんっ！」

「バフオツ!？」

胴体に叩き込まれた一撃は、しかし膨らませた腹部によって僅かに致命傷には至らない。コンガの腹部は弾性に優れており、その膨らむ勢いは完全武装のハンターですら弾き飛ばされてしまう程の勢いも兼ね備えている。

「返しのお、一撃いっ!!」

それも、腹部に当たればの話だが。素早く体勢を立て直し斬り上げた一撃が背中に当たった事によって、早々にコンガは命を絶った。

「に、ニヤアアアッ!! すごい怖かったニヤ、でも二度も命を助けてもらうなんて感謝感激ニヤ〜!!」

「はいはい、分かったから。しがみついてくんな、鬱陶しい」

レナードとしては、ニヤン吉がどこぞの白いアイツを彷彿とさせるテンションレベルにまで達してきていて、若干げんなりとしている。すり寄ってくるニヤン吉の抱きつきを片手で押さえながらギコギコと剥ぎ取っていく。片手な為、その手際はあまり見れたものではない。

「ハンター殿……申し訳ありませんのジャ」

「ああ、いや。いいですよ、俺も入口を閉めてなかったのが付かなかった訳ですから」



「それだけではございませんのジャ、ここに來られた時からのワシの無礼な態度。それの事を言っておるのですジャ」

長老は長い眉毛に隠れがちな細い目を、緩やかに伏せていく。チラリと横目で見たレナードには、瞼の裏にある光景を眺めているかのように思えた。

「ワシはどうやら、アナタの事を見誤っていたようですジャ」

ようやくレナードの剥ぎ取りも終わり、残った遺骸が分解されていくのを尻目に、ネコ次郎はガタの來始めた体を曲げ心ばかりの礼をする。そして、己が過去に遭ったハンターの体験を訥々と喋り始める。

「先程、ワシの不肖の孫が述べた通りかつてワシは幾人かのハンターのオトモを務めておりましたのジャ」

当然、今のような端材を用いての立派なアイルー用の装備も無かった時代だ。人の認識も、オトモアイルーとして認められているものでは無かった。粗末な恰好で雑に扱われ、ボロボロになりながらも生きて行く為仕方なくハンターに付き従う日々。

「ある日、アイルーに秘薬を盗まれたハンターがおりましたのジャ。そのハンターは当然、獣人達にいる集落へと向かいましたのジャ。もしかすると、まだ残されているやもしれぬと考えるの事ですジャ」

「アイルーに……?」

ネコ次郎は自分から話し出したにも関わらず、その先の言葉を出すのに苦労している様子であった。その為、レナードにも余程の内容が待っている事は容易に想像が付いた。

「……後で知った事ですのジャが、そのアイルーには病気の子がいてその子の為に初めて盗みを働いたという訳ですのジャ……。果たして、そこには当然ハンターの物品は残されてはおらず。怒り狂ったハンターは衝動に任せその場にいた——」

「もういい。もう、分かったから。それ以上は喋らないで下さいよ。……辛いでしょ？」

「ああ……重ね重ね、ありがとう……ごさいますのジャ」

レナードの言葉に、ネコ次郎は堅く目を瞑りお辞儀をする。堅く閉じた筈の瞼の隙間から、雫が滴り落ちる。

しばらくして、落ち着いたネコ次郎が再度口火を切る。

「ハンター殿、一度ならず二度までも我が子らをお守り頂いた事……切に感謝いたしますのジャ。このご恩は必ずお返しさせていただきますのジャ」

「ああ、もう分かりましたから。こつちとしては、あんまり大した事もしないし丁度コングの素材が欲しかったところですから。まあ、あんまり気にしないで下さい」

実際、レナードからしてみればコングなど大した相手では無いし、苦労と言う程努力

を使っている訳でも無いのだ。それはアイルー達からすれば大した相手なのだろうが。ここまで丁重にお礼を言われれば、流石に気が引ける。

「ニヤ、ハンターさん！　これからボク達がハンターさんの為になけなしの食料を使って宴を開くから、精々楽しんで行つて欲しいのニヤ！」

「嫌な言い方するね、お前……。いや、悪いけど俺は早く村に帰らなきゃいけない用事が出来たから宴はまた今度で頼むよ」

今は食料の乏しい寒冷期だ。そんな時期に大量に命の糧を消費するなど、レナードからしてみれば考えられない。

やはり獣人と人間は考え方がどこか違うのだろうか。そう考えもしたが、ニヤン吉がネコ次郎の杖で頭をポカリと叩かれているのを見て考えを改める。単にニヤン吉がアレなだけのようなのだ。

「ハンター殿、ハンター殿ならばいつこの集落に来てでも歓迎させていただきますのジャ。集落の狩人達にもレナード殿の事は伝えておきますので、これから先この密林で我々獣人が御身に危害を加える事はありませんのジャ」

正直、最後のこの言葉が一番嬉しいかもしれない。どこか曖昧な笑みを浮かべつつ軽く礼をして、レナードは足早に集落を立ち去るのであった。

## 師弟、砂漠へ

得てして人は、現象に対して理由を求めたがる。全く関係の無い事柄を強引に結び付けてしまい、結果誤った結論へと至るのだ。

そういう話を、遠い昔友人が賢しらに述べていたのを聞いた事をレナードは思い出した。

密林に存在しているキノコを謎のハンターが根こそぎ採取していった事。

普段は密林の奥に棲んでいるコンガが、大量に密林の中でもジャンボ村寄りの地点にまで出没し始めた事。

この二つの内容を結び付け、ジャンボ村に住まう何者か、あるいはジャンボ村そのものに敵意を持つハンターが、悪意を持って空腹のコンガ達をけしかけて来たのではないか。

というレナードの推論は、結果から言う外れていたらしい。

「シユレイド地方に、ですか……」

「ああ、オイラも対策をもって事でドンドルマのギルドに伝えたら、情報ではそのハンターはシユレイド地方に逃げていったらしいぜ」

「それに、群れのリーダーなババコングもいなかったですしね……」

レナードが最も腑に落ちない点がここであった。密林にはコングが無数に現れていた、と言うのに長であるババコングの姿はどこにも見当らなかつたのだ。

「そのハンターは、ババコングを倒す為に一連の行動を起こしたのかもしれないな」

「どっちにしろ、この辺りを管理してるウチに話を通してない時点で罪ですけどね……」  
「だといいいのだが……。レナードは胸中でそう思いながらも、話を打ち切るのであった。」

「ところで、村長」

「ん、何だい？」

「そろそろ砂漠に行かせてくれませんか？」

「砂漠に行かせろだつて!？」

「いや、まあ行かせろとは言つてませんが。行かせてはくれませんか、ついでに沼地なんかも」

レナードも今まではそう焦つてはいなかったが、流石に余つたドスランポスやドスファンゴの素材を村長に渡しているにも関わらず未だ新たな狩り場である砂漠や沼地が解禁されてはいない事で焦り始めていた。どうゲームの知識から逸脱してもいいように心掛けてはいるものの、やはりいざその瞬間が訪れれば動揺してしまうのは心掛け

ている『つもり』という事であろう。かつてのゲーム知識がレナードにとって非常に有用なのは間違いが無いのだから。

「……驚いた。パティから聞いたのかい？ オイラが方々動き回って新たな狩り場の情報を掴んだ事を。驚かせてやろうと思つてたのに、逆に驚かされちまつたな！ それに沼地か……うん、考えた事も無かつたけど確かに色々貴重な素材がありそうだし、でも、一体どこでそんな情報を持つてたんだい？」

「いや、まあ……前にいた村のハンターの人が、そういう所に行つてたんで」

嘘だ。レナードが以前いた村では村周りの狩り場だけでも十分収支が取れていたし、ハンターが少なかった為に近場を放つてそんな遠出が出来る程の余裕は無かつた。新たな狩り場を、と言うのは現在のジャンボ村のように実力のあるハンターが複数存在して初めて可能な話なのだ。

「うん、オイラもまだまだ知らない所がたくさんあるつて事だな！ 何だか、楽しくなつてきた！」

「あつ、村長！ ……行っちゃったよ」

何やら瞳を輝かせた村長は、村の反対側へ駆け抜けて行つてしまった。本当に落ち着きの無い人だなあ、レナードは嘆息しつつもそう思う。

「うしっ！ それじゃ、今日は準備に時間使つて明日砂漠に向かうかっ！」

応える声は無い。傍らに、短い時間ながらも存在していた弟子の姿が無い事を思い出し、レナードは一抹の寂しさを感じた。

「あんなんでも、いなくなったら寂しいモンだなあ……」

「え、ホントですか？」

「……うん、嘘。勿論、冗談」

「またまた〜！ 師匠つたら、恥ずかしがり屋さんなんですから〜！ このこの」

何やら見覚えのある緑髪が、3m程もある馬鹿みたいに大きな荷物を背負ってレナードの脇を肘でこのこの、とやっっているような気がしたが気のせいである。

「んもお、ししよおつたら照れちゃって〜！ この、てーれーやーさんっ〜！」

レナードの知り合いである緑髪の弟子は、今は彼女の村で元気にハンターをやっている筈なのでこれは幻聴や幻視の類である。あるいは見知らぬ緑髪が偶々コチラを自分の師匠と勘違いしてじやれてきているのか。だとしたら全く、面識のない者にこんな態度などと実に失礼な事この上ない。

「ねえ〜ん。し、しよ、お〜ん♡」

無理だ。これ以上は。レナードは静かにそう心中で呟く。

何故なら、人には色々々と耐えられる限界というものがあるのだから。

「……なあ、セイデイ。本当にそれで良いのか？」

「え、何がですか？」

「最期の言葉がそれで」

「死亡確定?!？」

聞くに堪えない声音を使っていた馬鹿を矯正する為、レナードは泣く泣く愛弟子に向かつて失意と慈愛の込められたデコピンを解き放つ。「いだつはあつ?!？」と色気の皆無な悲鳴を上げつつ後ろに仰け反り、大きな荷物に負けてまるで雪だるまのようにゴロンと転がるセイデイを見て、ようやく先程の気色の悪い声音で上がった溜飲を下げるのであった。

「おお、今「んべつ!」って言ったな。カエルが潰されたような声なんて、実際初めて聞いたわ」

「し、師匠……。感心、してないで……。助けて、もらえませんかねえ……。荷物、重すぎて……。私だけじゃどうにもならないんですけど……。!」

一瞬、(孫悟空みたいだな)と思つたレナードだったが、別に五百年も放置しておくつもりも無いので、セイデイの背負う荷物を嘘のように簡単にひよいと片手で持ち上げる。怪力の面目躍如である。

「全く、酷いですよ! 女の子の顔を何と心得てるんですか、全く!」

「……で? 何でお前ここにいるんだよ。村は? あんだけ俺も苦労して何とかなつた



村は、どうしたのよ」

「あ、はい。それがですね。あれから私の父が快方に向かいました、もう少しハンターを続けていくそうなんです。こちらの事は気にするな、お前は勉強の為にジャンボ村で前に知識と経験を与えてくれた彼を師事して素晴らしいハンターになりなさい、との事です」

実際は、『勉強の、為にツ!!』と殊更に強調していたのだが、得てしてその発言が重視されないのはセイデイが鈍いのか、男親の定めか。

「そうか、あの人の回復したのか。良かったな……何か俺には若干厳しかったけど」

男親なら、愛娘に寄ってくるどこの馬の骨ともしれない輩に厳しく当たるのは仕方が無い事だろう、とレナード自体は理解を示している。それもこれもセイデイの父親が善人であり、レナードに対しても試すように厳しい言葉を吐く程度で後は複雑そうな顔を見せるだけだったからだろう。もしも悪質な行為をされていれば、流石にレナードもセイデイの父親を嫌っていた。

「それで……えー、村長さんからは……」

途端に、モゴモゴとはつきりしない口調で喋りだす。モジモジとした動作も相まって、どうにもいつものセイデイとは全く違う印象を受ける。

「何だ、はつきり言えよ」

「その……師匠を。……男女の仲になって籠絡しろ、と」

「……ああ」

吐いた溜息にレナードが不機嫌になると考え、セイデイはアタフタと言いつねる。しかしそうではない。レナードはただ先程のセイデイの奇行に合点がいつた為に吐いただけなのだ。

村長の行動は、村の存続を考えればおかしい事では無い。十分に理解が出来る行為だ。

個人でも村の周りを単独で綺麗にしてしまえるだけの實力を持ち、他者に対しても、見習いだつたセイデイを指導によつてイヤクツクを狩れるようになるまで導いたハンター。

はつきり言つて、辺境近くの村にとってはどんな大粒の宝石よりも貴重な存在なのだ。

それが、奇しくも村の一員と親交がある？ 年もお互いお年頃の、異性？ 彼女の為に疲れ切りながらも村一帯の大掃除を行う程度には、悪感情も抱いていない？

自分達の村へ襲来有望な頼れるハンターを引き入れる為には、正に打つて付けの方法と言えるだろう。故にレナードは、生きる事に必死なだけで悪気は無いあの村の人達を嫌いになる事は無かつた。ただ、良くやると呆れる事こそあるものの。

「さっきの……あれやこれやはです、その。村の奥様達に聞いた男を落とす技と言う奴で、その。わ、私も恥ずかしくって嫌だったんですけど、断りきれなくって……。うう……」

「あーはいはい、分かったから。そんな事より、お前これからはこの村に住むんだろ？ その馬鹿みたいな荷物の量は何だよ、家一軒分丸々荷物詰めて来たんじゃないだろうな？」

普通、大量の荷物を運ぶなら全てを人力で運ぶ必要など無い。それこそアプトノスに曳かせた馬車ならぬ、アプトノス車はこの辺りでも十分にその力を發揮している。

「は、はいはいで流された……!? ほっとしたんですけど、なんか乙女としては複雑……。荷物については節約の為、です。はい」

セイディは照れ笑いを浮かべながら、後半を告げる。レナードは、その反応で直感した。アプトノス車は広く普及しているだけあって、コストパフォーマンス的にも悪くは無く非常に安価と言える。それを使うのを躊躇うという事は……。

「……お前、今一文無しか」

「いやっそんな事は!!」

「無いのか？」

「40ゼニーほど……」

顔に手を当て嘆息する。それでは契約金も払えはしないでは無いか、と胸中で苛立った思いをこねくり回す。

「イヤンクツク討伐で手に入れた金が、まだそれなりにあつただろうが。何に使つたんだ？ 怒らないからお兄さんに言つてみる、ん？」

これでハンター稼業に必要な消耗品や武具を買うのと言えば、多少の計画性の無さも許してやろう。レナードはそう、寛大な心で考えていた。

当然、そんな訳が無いとも思いながら。

「えくと……街から、非常に珍しい事に嗜好品やらの類を沢山積んだ行商人が村にやつてきまして。もう、見た事の無い物ばかりだったので村中半分お祭り騒ぎで！ ……それで、まあ。私も、見た事無い食材とか綺麗な髪飾りや宝石を幾つか買つてる内に……てへっ！」

「……………」

「あ、ちよ、師匠!? そんな無言でゴツゴツ額を突かないで、痛いっ!? 額を突かないでく!？」

びすびす、と無言で数発お仕置きをする。最早何も言う事も無かつた。

(何でちよつとした近況報告でこんなにも疲れにやならんだ……)

うんざりした表情で弟子を見ると、血も出てないのに額に包帯を巻いている。どうや

ら変な具合に赤くなっているのが恥ずかしいらしい。包帯の方が目立つのではないかと思うのだが、そこまで踏み込んで聞く事をレナードは諦めた。何より面倒くさい。

「ああ、それでな。お前、明日から数日空いてるか」

「え……それってまさか……！ い、いやいやダメですよダメツ!? 私と師匠はそんな仲じゃ無い訳ですし、そりやあさつきはあんな事しちゃいましたけど、でも師匠ならきつといきなりあんな事やそんな事はしないだろうという信頼の元にと言いますか——」

「……違——う。つたく、いつまで盛ってんだお前は」

「さかつ!? と、年頃の女の子に何て事言うんですかつ!?」

セイディの抗議も、耳をほじりながらそっぽを向いて聞き流す。

「で? どうなんだ、予定は空いてるのか」

「……はあ、まあこっちに来たばかりなのでそれなりに立て込んでますよ。村長さんの言つてた新しい家に荷物を置いたり、必要な物を買ひ揃えたりして整理しなきゃとは思ってますけど」

「うん、暇なんだな。それは丁度いい」

「話聞いてましたよねえ!! 私の予定は最初っから無視ですか!」

「実は俺もつい今しがた村長から聞いたんだが、密林だけじゃ無くて砂漠が新しい狩り

場になったようだな。初めての狩り場に、どうせだからお前もどうかと思つてな」

「うう……話、續いてるし」

「で、どうだ？ 一緒に行くか？」

「……分かりました、一緒に行きますよ」

諦めたようにセイデイは了承する。が、何か懸念があるような、不安気な表情をレナードに向かって浮かべる。

「でも私、砂漠なんて行った事無いから師匠の足引つ張るかもしれませんよ……？」

セイデイはこの辺りの狩り場しか行った事が無かった。自然、気候その他も似通つた雰囲気の場合でしか狩りを行った事が無い。《砂漠》、などという場所はセイデイにとって『砂がたくさんある、暑くて広い場所』という認識しか無かった。

「大丈夫だ、安心しろ！ 俺も初めてだから」

「そこにどう安心要素があるんですかっ!? 懇切丁寧な説明を要求しますっ!!」

「そこは、ほら。お前の親友であるパティとの話で知識補えつて。あの子、相当その辺り凄いいじゃん」

顔見知り程度の新密度のレナードは彼女の知識の事を指し、非常に仲の良い友達でより詳しく彼女の事を知っているセイデイは、その知識を基にした妄想の事を頭に浮かべたが、特に齟齬も生まれなかつた為に話はそのまま続いていく。

「まあ……確かに。それと、一体何を狩りに行くんですか？ それ知らないと、どうしようもないじゃ無いですか！」

「……カーニ」

じや、明日な。セイデイが妄想逞しいパーティの事を思い浮かべている間に、レナードは指を二本立てチョキンチョキンとしながら去るのであった。



「着いた……」

ジャンボ村を出港してから2日。ジャンボ村から南エルデ地方の脇を横切りながら海を渡り、一行はセクメーア砂漠に無事到達した。

日帰りで行ける近場のテロス密林とは違い、セクメーア砂漠は狩る時間や往復を考慮すれば平均として一週間と少しはかかる。

「おい……リユーズはどうしてる？」

「確か、あっちの方でぶっ倒れてます……」

セイデイの指す方向には数人は入れるベースキャンプが敷設されていた。

慣れぬ大所帯に、必要以上に精神的な疲労をしたレナードとセイデイであったが、付

け加えるなら最も疲労していたのはそれらをここまで運んできたリユーズであった。

年若い彼は今まで流れのゆつたりとした河しか漕いでこなかったのだが、砂漠へ行くルートは完全に海を通らねばならなかった。密林に行く際に比べ並みにひつくり返されないよう一回りも二回りも大きな船を用意されたのはいいが、勝手が色々と違うのは当然の事。慣れぬ環境と命を預かっているという緊張感を二日間続けた事で、リユーズは心身共かなりの疲弊をしていたのだ。

更に言えば、疲労の最大の原因は別にあつた。チラリ、とレナードは横を見る。

「ミヤ〜！ いい景色だミヤ〜！ ご主人様、これはもう狩りなんか中止にしてニヤーの作つたお料理を持って、二人きりでピクニックをするのミヤ!!」

「する訳ねーだろ」

無駄に鼻息の荒い駄猫が一匹、レナードの足元でピョンピョンと飛び跳ねていたりする。その光景を見て、再度溜息を吐く。これでも相当大人しくなったのだ。

レナードとセイデイが砂漠に今までのように日帰りでも無く向かうという事を知ったネコニヤーの判断は、ハンター顔負けな程に迅速であつた。彼女の再三の要求に、結局レナード達が折れる形となっている。

(どいっもいっも……色ボケしやがって)

実はセイデイとの再会のシーンを、ネコニヤは視認していた。つまりは、あの失笑す



ら誘うセイデイの誘惑シーン（笑）の事である。家に帰ったレナードに対し、『メラルー女許すまじ!!』とばかりに燃えたネコニヤの気迫は凄まじく、いつもならネコニヤの攻めを捌き切れていたレナードですらも押切り、結局狩り場にまで着いてきたという訳であった。

「あのー……ベースキャンプの点検、終わりました」

「ああ、お疲れ。……悪いね、ここまで騒がしくつて。疲れちゃっただろ?」

先程から、ベースキャンプ周りの確認作業を行っていた少年が遠慮がちに声を掛けてきた。

彼の名前はアルト、ここに来るまでの間に話をするようになったハンター志望の少年だ。年の頃は13。このまま順調に2年程も行けば、晴れてレナード達の後輩という事になる。

「いえ、そんな事無いです! あの、憧れのレナードさんとお話が出来て凄く光栄でしたし。それに、役に立つ貴重なお話も聞けてすごく楽しかったですっ!」

「そ、そうか……? そこまで言われると、何か照れるな」

「あー師匠、照れてるー! かーわーい、痛いです……! 師匠……! 頭を掴むのはおよしになって……!」

ぺいつ、と片手で放り投げる。すぐに調子に乗る弟子を戒める為半分照れ隠し半分の

その行為を見て、ひとりの少年の瞳がますます輝く。

狩り場においてハンターが拠点として用いるベースキャンプ。その点検作業や、必要ならば修繕作業を行うのは、多くは10〜15歳程度のハンター候補の少年少女である。利点は様々ある。ハンターと同行して向かうので比較的安全に狩り場の雰囲気を知れるというだけでは無い。今回の様に、先輩ハンター達と上手くいけばコネを作る事も可能であるし、時に金よりも価値のある情報を教えてもらえる場合もある。ここでの経験は、若きハンターの卵達にとつては決して損にはならないものとなる。

「あ、支給品は全部ボックスに入れておきましたので確認しておいて下さいー」  
「ああ、ありがとう」

彼らの仕事にはもう一つある。ギルドの提供する支給品の運搬だ。テロス密林の様な村からの近場であれば、例えばギルド公認の運び手であるリユーズが兼任で行っている。これは近いが故に少量を小刻みに物を運搬出来る為だ。独りで運べる程度の物品という訳である。だが、セクメーア砂漠のベースキャンプは片方は砂漠、もう片方は岩山という場所の中央にひっそりと構えられている。つまり、交通の便が悪いので出来る限り一度で持ち運ぶ量を増やしていかねばならない。そして、その大量の物資は少数では賄いきれない。その為に駆り出される人手がアルトのようなハンター候補の少年少女という訳だ。

「あのっ！ 僕もいつかは、レナードさんみたいなハンターになれるでしょうかっ！」  
「ん？ んー……そうだな、まあ頑張っていればそれなりの成果は出て来るモンだけだな」

レナードとアルトの初対面の挨拶の後、最初の会話がこれである。

普段テロス密林に向かう時よりも大きな船に乗っていた時からそうだったのだが、アルトは純粋な気持ちでレナードに話をせがんでくる傾向にあった。その様子はまるで父親や兄にせがむ様子を彷彿とさせている。ネコニヤーのように暴走したり、セイディのように生意気であつたならばどうとでも対処する事が出来るのだが、余りに純粋な表情かつキラキラとした目で見つめてくる為、レナードもどう接していいか分からない。決して悪い気はしないのだが。

「ミヤー！ アルトくん、ニヤーが色々とご主人様の武勇伝を教えてあげるのミヤー！」

「わあ、ありがとうっ！ 流石はレナードさんの家族だね！」

「ミヤフフ……。そんな、まだ結婚なんて気が早いのミヤ……。ああ、でもでもそこまでご主人様がニヤーの事をお求めになられるのなら、ニヤーはきつと拒めませんのミヤ……！！ なんて罪作りなお・か・た！ なのミヤ〜!!」

実はそこに拍車をかけたのが、ネコニヤだったりする。

最初はレナードも、(あれ、ニヤーの奴が他人とこんな長い時間一緒にいるなんて珍

しいなあ、善き哉善き哉」と言う風に考えていたのだが。もしその時点でネコニャーによる『レナードが凄いハンターだって事を広めよう計画』を知っていたなら、断固として阻止していた。

「とつとと正気に戻れ、バカたれ」

むんずと引つ掴み、軽く振り回す。「ああミャ〜!？」と涙目で叫びながらもどこか嬉しそうな点は触れない。

周囲にいる者達皆がその光景を見て笑っている。ゲラゲラ、クスクス、アツハツハ。種々様々な、それでも『笑い』という一つの要素が、不毛な土地に花開く。

「……早く狩りに行った方が良くないかー?」

そんな中、多少は体力も回復し人知れず別の場所でベースキャンプを修繕していたリューズの無粋な言葉は、残念ながら混ざる事は無く儚く消えたのであった。

## 盾蟹退治と新たなるハンター

「むう……何故か知らんが、時間が予想よりも詰まつている」

「それ原因割と明白じゃ無いですかねえ!？」

「シヤラップ、馬鹿弟子! ……覚えておくといい。往々にして、ギスギスとした空気の原因が何かなんて不毛な探り合いをするよりも、目の前の事態を打破する為に何か建設的な事を考えた方が良い方向へと向かつていく事は多い。ここで勘違いをしてはならないが、失敗を踏まえた上でそれを今後の糧とする為に検証していく事は非常に大切だ。だがそれには然るべき時と場所と言うものがある。狩りにこれから赴くという今この時、この場所で行おうとするには不適切と言わざるを得ないっ!!」

「言つてる事は良い事言つてる気がしなくも無いですけど、多分それ言い訳ですからね……」

内容は理解していない筈なのに、妙に確信めいた物の言いかたである。実際言い訳であつた為にレナードもそれ以上は無駄口を叩かず、素知らぬ顔で作業に取り掛かる。

ベースキャンプでもたついている間に、既に一時間が経過していた。この頃になると、流石に面々も四方山話に興じる事も無く、各々の仕事に取り掛かつていた。体力の

回復してきたリューズとアルトは引き続きベースキャンプの補修作業を、レナードはセイデイと共に装備の最終点検、ネコニャーは全員の口にする簡単な料理を調理中である。

肉を焦がす音とかぐわしい香り、ついでにネコニャーの機嫌の良さ気な鼻歌を聞きながら、レナードはその傍らで得物に入念に砥石をかけていた。

「それにしても師匠。いつもより、すごく入念にやっていますね?」

「ああ、何せコイツの初陣だからな。整備にも力が入る」

胡坐をかきつつ新たな相棒に砥石をかけるレナードに、セイデイは後ろから覗き込むように話しかける。レナードの持つ大剣は、今までの物とは一味違った。セイデイが見ている現在の状態、一見曲線の多様されたシンプルなフォルムはその全容では無い。

「ふふん! 見てろよ」

「?」

子供の様な誇らしげな顔を浮かべながら、レナードは徐に左手部分を下に引く。

シャキン、という甲高い音と共に大剣特有の分厚い刀身の部分から新たに肉食獣の鉤爪を想起させる刃が5本飛び出して来た。

《ブレイズブレイド》。それがレナードが頼りにする新たな大剣の名称であった。

「うわあ、これはまた何と言うか。お金、かかってそうですねえ」

「感想それかよ……。まあ確かに、殆どゼニー残ってないけども」

ブレイズブレイドには前述した通りのギミックが施されている。そう複雑なものではないが、本来仕掛けの存在はあればあるほど物の脆弱性に繋がってくる。逆にシンプルであればある程頑丈なものなのだ。だが、素材の違いがその弱点を解消してくれている。

「これの作成に必要なだった氷結晶が行商人を通じて手に入ってたなー！ フフ、多少ぼつたくらいようとこれの魅力には勝てなかつたぜ……！」

ブレイズブレイドに必要な素材はマカライト鉱石と大地の結晶に氷結晶の三つだ。その内、氷結晶以外の二つはチマチマと狩りの合間に集めていた為に何とか揃っていた。だが氷結晶は取れるのがジャンボ村からは遠く離れた北の雪山のような土地な為、今まで手に入れる術が無かつたのだ。そこに偶然村へと訪れた行商人が持つていた氷結晶。何か運命めいた物を感じると、つい交渉を忘れ行商人の言い値で買う羽目になったが、レナードは微塵も後悔はしていなかつた。要はそれほどまでに待ち望んでいたという訳だ。

幾ら装備の充実がハンターにとって必要不可欠とは言え、それで殆ど一文無しになるとは……。そう思いつつも指摘をしないのは、セイデイの僅かばかりの優しさである。「……とところで、氷結晶って氷の結晶ですよ？ 何で武器の素材に必要なんですか？」

「ん、最近になって氷結晶は混ぜると他の鉱物の密度を高める効果がある事が分かったらしい。マカライト鉱石は鉄鉱石より良質な金属が取れる訳だから、それに氷結晶も混ぜれば、こういうギミックを仕込んでも以前の単純な形状の《バスターブレイド》よりも強固な物になるって寸法だ」

そして、それはレナードにとって何より嬉しい効果を齎してくれていた。

「これでようやく、全力を遠慮なく出せるってモンだ……！」

レナードは笑顔が消しきれない。後から後から零れてくるのは、それだけこの時を待ち望んでいたという事だろう。以前までならば、例え強度に長けた金属系の大剣であろうとどこかが歪んだりして使い物にならなくなっていた。余程強力なモンスターの素材を用いれば問題は無いのだろうが、いないのだから現状ではそれも望めない。レナードの個人的な考えとしては金属系より骨系の大剣で強化を進めていきたい訳ではあるが、レナードの尋常では無い怪力に耐えうる唯一の選択肢が、今この段階では《ブレイドズブレイド》だけだった。

「……………」

普段に比べ、寧猛に過ぎる笑みを浮かべたレナードにセイディは若干引いていた。





「あ、ああああッ!？」

「……何だ」

唐突なセイデイの悲鳴、仮にも若手実力派のハンターの悲鳴にリユーズやアルトは何事だと動揺するが、最寄りにいたレナードは気怠げに、それはもう嫌々問い掛けた。経験上、セイデイがこういう時はつまらない内容である事は明らかである。

「お、お肉がつ……! 私珠玉の食材ちゃん達があ!!」

「ほーら、やつぱり……」

案の定の内容だった事に、レナードは溜息を隠せない。

(この馬鹿弟子は、食い物の事でしか本気になれないんだろうか……?)

割と本気で考えてしまう。無駄に食材に目線を合わせ、四つん這いで思案している様子は意地汚いババコンガを彷彿とさせる。滑稽な見た目とは裏腹に、プン、と鯉えた臭いを発している食材に対して本気の眼差しを送っている辺りどうしようもない。レナードはそれを見て確信した。ああ、放っておけばこいつは腐った食材を本気で食べる気だと。

「ひ、火を通せば何とか……。そうだっ! ニヤーちゃんにお願いして……」

「やめんか、馬鹿たれ」

ゴガン、といつもより僅かに大きな音がしたのは同行者がいるからである。二人だけならまだしも、先行き明るい少年にわざわざこんな闇の部分を見せたくは無かった。

憧れを抱く少年にハンターがカッコイイだけの職業では無い、と教えるにしてもつと相応しい場面と状況がある筈だ。

「あうう、ししよ？ 何やら、いつもより体中に響き渡るような痛みが無きにしても非ず……」

「じゃあ、無いんだろう。お前の気のせいだ」

「え、いやその……」

「気のせいだ」

「……はい、気のせいでふ」

どこか気の抜けるやり取りは、何時もの通り。とは言え、内容自体は食料に関わる為非常に重要なものだ。自分にも戒める意味を込めつつ、弟子に説教を行う。

「セイデイ。お前、寒冷期だからって砂漠の暑さ甘く見てただろ」

「うっ……。それはそのう……」

いつの間にやら正座に姿勢を変えていたセイデイは、的を射た指摘に思わず目を逸らす。

「ちゃんと保存の効くよう加工された携帯食料とかじゃなけりや、すぐに暑さで駄目に

なつちまうって言ったよな？」

「……はい」

「こういう時は断熱出来る箱の中に氷とか、それこそ氷結晶とか入れておけば長持ちするからそうしておけ……とも言ったよな」

「……はい」

「なのに、何で持ってきてんのが生肉やら野菜やらで、それを普通の木箱に入れてきてんだお前はっ!! 手間暇渋りやがったなッ!!」

「っ、っつちでニャーちゃんに美味しく調理してもらおうと……イエナンデモアリマセン、ごめんなさ〜い!?!」

恥も外聞も無くべたーつと土下座をするセイデイ。言うまでも無いが、正座や土下座はレナードが教えてある。主に懲罰用として。

その光景は、仮にアルトにでも見物させていれば夢見る少年の心を一瞬で雪山のようになってしまう程の効果を発揮するだろう事は想像に容易い。が、それはしないと先程決めたのばかりなので、襟首を持ち上げさっさと起き上がらせる。

実の所、セイデイの失敗にそれほどレナードは怒ってはいなかった。一度実体験でもって経験したミスは、二度はしないよう気を付けるモノだ。それを考えれば、むしろ今回の様に誰かがカバー出来る状態でのミスなど推奨したい程である。気を抜かれて

はたまらないので決して言いはしないが。

気まずさを誤魔化すように笑みを浮かべてくるセイデイに対し、仏頂面で包みを突き出す。

「これは……?」

「こんがり肉だ、少し多めに持ってきてあつたんだよ。分けてやるから」

呆けたような表情から一転して、セイデイは花開くように笑みを浮かべる。

「師匠……愛してますっ!」

「うんその台詞言うんだったら、色気とかはもうお前には求めてないからせめて肉の方見ずにこつち見て言おうな、礼儀として。あと涎」

何時も通りに色気より食い気な弟子に、大きなため息を吐く。

「ミヤ〜!! ミヤミヤミヤミヤミヤ、ミヤ〜!!」

「……もー、タイミング良く来ちゃったよ」

おそらくは料理が丁度出来たのだろう、湯気の立ち上る皿を持ってコツクの白い衣装を身に纏ったネコニヤーが荒々しい様子で二人の間に割って入ってきた。興奮で解析可能な言語を発しきれないところからも、どう考えても先程のセイデイの発言を耳にしている。

「わわ、ニヤーちゃん!」

「ご主人様から離れるのミヤ、このメラルー女め！ 遂にその本性を表しおったのミヤ！」

くわつ、と目を見開きながら手に持つシチューをセイデイに突き付ける。まるで犯人を追い詰めている探偵役だ。

「あ、おいしそー……。早くちよーだい？」

「誰がメラルー女なんか食べさせてあげるもんかミヤ！ このシチューはニヤーが丹精込めてご主人様の為を思って作った渾身の料理ミヤ！」

小首を傾げて可愛らしく催促するセイデイを、ネコニヤはすげなく断る。

「な、なんでっ!？」

「はあっ……。ニヤー」

「はい、何ですかミヤ！」

ぐるり、と首を回転させたその表情は打って変わって満面の笑みだ。

また面倒の種が……。レナードは心の中でボヤキつつ、仲裁を行う。

「美味しそうなシチューだな」

「はいっ！ ニヤーが丹精込めて作った特製ビツクリシチューですミヤ！ 砂漠だとす

ぐに水分が無くなると思って、少しでも水気のある物と考えるとこれにしたんですミヤ

！ 実はこれには隠し味としてパワーラードが入っておりますので、もう元氣モリモリ

になる事間違いなしつですミヤ!!」

「……おーそうか。そんな美味しい物を俺独りで食べるのは勿体ないからなあ。皆にも食べさせてあげよう」

「……ウエツ!? このメラルー女にも、ですかミヤ……!?」

「駄目か? 俺はお前の美味しい料理を、出来るだけ多くの皆に自慢したいんだけどなあ」

「みや、ミヤハハ〜! そんな、自慢するだなんて照れちやいますミヤ〜! ……ちよつと向こうで作業してるお二人も呼んできますミヤ……!」

褒められたのが余程嬉しかったのか、ネコニヤは猛スピードで駆け出して行った。

「貸し一つな」

「……恩に、着ます」

レナードは、愛に生きる暴走ネコ娘を見送りつつポツリと呟く。その横でセイディは情けなくたぱーつと涙を流しつつも、出来上がったシチューを美味しそうに啜るのであった。



「さて——行くか」

「はいっ!」

ベースキャンプから一步足を踏み出した二人は、先程までとは雰囲気から顔つきまで何もかもが変貌していた。言うまでも無くハンターとして気を張った結果であり、ON/OFFがはつきりしている彼らはそれだけで優秀と言える実力の一端を垣間見せている。

「砂漠には密林とは違った一癖も二癖もあるモンスター共がうようよいやがる。ではセイデイ、その中でも真つ先に注意すべきモンスターはなんだ?」

「はい、師匠。まず、注意すべきはゲネポスです」

「理由は?」

「大抵の場合、彼らはランポスの様に数を頼りに集団で襲い掛かってきます。その際、ランポスには無かった麻痺を獲物におこさせる麻痺毒を吐いてきます。囲まれた状態で一斉に麻痺毒を吐かれれば、例えばパーティを組んでいたとしても即座に全滅の可能性だつて有り得なくはありません。その為、ゲネポスを見掛ければ邪魔をされないよう可能な限り排除しておく事……でしたよね?」

滔々と述べられる弟子の言葉にレナードは満足げに頷く。実の所これらの内容は全て、既に砂漠へと向かう船上で幾度も二人で予習をした内容なのだ。知識の源は、当然

レナードの知識と方々からかき集めた情報を掛け合わせたものだ。

最後が少し自信なさ気なところがアレではあるものの、内容自体は教えたモノと何ら変わらない。セイデイは確実にレナードの知識を我が物とし始めていた。

「勘違いをすんなよ、今お前の持つている知識はまだ実際に確かめているもんじゃ無いんだ。業物かナマクラかは、実際に目で見てお前が確かめなきゃいけない。いいな？」

「はいっ！」

「そして同時に。知識という強力な味方を手に入れたハンターは、先入観という強大な敵をも増やす事となる」

「それはどういう……？」

師匠の口から重々しく出された忠告の意味がよく理解出来なかつた為、セイデイは頭にて？マークが見えるかのような状態で聞き返す。

「知識とは、即ち常識だ。人は自分の中の常識で物事を理解する習性がある。しかし世界は広い、人程度の矮小な常識では計り知れない事象など数え切れない程存在している。では、己の物差しで測りきれない、言い換えれば自身の知る知識とは違うモノと遭遇した際には人はどうなるか」

「……分かりません」

「答えは簡単、止まるんだよ。動きも、思考も何もかもな」



「でも、それだと……」

「そう、狩り場でハンターが動きを止めれば死ぬ。容易く死ぬ。だから、先入観は敵なさ。常に頭と心を柔軟に、何が起きても不思議では無いと心に留めれば少しは咄嗟に動けるようになるだろうさ」

エリア内を移動しつつ、レナードはセイデイに危険性を説く。

砂漠という未知の狩り場に対する危険と言うものは、間抜けな顛末ではあったが既にセイデイも食べ物の一件で身に染みて感じていた。知識によつて未知を既知の事実へと変貌させる。だがそれに固執せず、常に目の前の事実を受け入れる。それを理解しているが故に、彼女はレナードの言葉にも逐一頷いており、そしてそれはその関心の高さや大袈裟だと言う侮りの無さをその身で表しているのであった。

ここに来て、セイデイはまた一つ成長を遂げていた。



セクメーア砂漠のベースキャンプから繋がるエリア2は、非常に広々とした場所だ。遮る物も何も無く、ただひたすらに同じような光景である砂の海が広がっている。ちなみに何故ベースキャンプから隣接しているのにエリア1では無いかと言うと、狩場に指

定されている地域の東側から順に付けて行ったというだけであり、ベースキャンプに繋がっている云々は関係ない。存外適当なものである。

ベースキャンプならばまだ耐えられた暑さが、ここに来て我慢出来ないレベルにまで到達していた。砂漠の本領発揮と言える。

二人はすぐさまポーチから一本のボトルを取り出した。中身は《クーラードリンク》、飲めば体内から体を冷やしてくれ体温を上がり過ぎないようにしてくれる一品である。その効果から、当然暑い環境では必需品となっている。

ゴクリ、という喉を通る音がしたのも束の間。二人の体から過剰なまでに流れ出していた汗の勢いが収まった。全く暑くないとまでは言わないが、それでも体感的には真夏の炎天下から初夏の日差し程度には落ち着いている。これならば十分に行ける。

「ガレオスか……一々倒す事も無い、躲しながら行くぞ」  
「了解ですっ！」

広い砂の海をまるで魚の様に悠々と泳いでいるのは《魚竜種》と呼ばれるモンスター的一种である《ガレオス》である。

元々は水の中で生息していたのが長い時の中で砂に適応し現在に至っている。

当然、砂の中で呼吸など出来はしないので時折顔を地上に出して呼吸をしているが、その顔は扁平な三角形をしている。

レナードの仕入れた情報によると、ガレオスは離れていけば問題は無いが、砂を口から高圧縮状態で放ってくるのと砂の中に引き摺りこまれてしまう事だけは気を付けておかねばならないらしい。

ともあれ、今は相手にしている場合では無い。必要以上の殺生もまた、ハンターにとってでは忌むべき事な為先を急ぐ。

「それに、してもつ、砂って、言うのはっ！ 思ってたよりも、走り辛いですねえっ!!」  
「ああ、そうだな。少し密林にある砂浜で、走り込む練習をしてもいいかもしれない」と崩れていく足場に慣れないせいも、セイディはいつも増してヨタヨタと左右に体を揺らしながら走っていく。時折転びそうにもなる程だ。かつての経験と、高い身体能力で既にコツを掴んでヒョイヒョイと平地を往くが如く走っていくレナードの事をどこか恨みがましい目で見ている。

「ほれ、頑張れ。いち、に、いち、に。エリアーにはオアシスがあるらしいからな。コツは足の親指を重視して使えばいいんだぞ、多分」

「てきとーなの、丸分かりですなえ!! 清々しい、くらいですよっ!!」

見れば、二人共軽口を叩きながらも腰に装着している音爆弾に手をかけている。それは、生態ゆえに聴覚の発達したガレオス対策である。響けば溜まらず、ガレオスは砂上へと飛び上がってくる。そうすればもう、俎板の上の鯉も同然なのだ。

気を抜いているように見えつつも実際には周囲の警戒は怠らず、二人はエリア1へと向かうのであった。

◇

セクメーア砂漠のエリア1はオアシスを中心とした一帯となっている。昼は茹だるように暑く、夜は凍えるように寒い砂漠でも、水の中には魚が存在しており周囲には虫や植物の存在も見受けられる。

日中でも枯れない水辺にも関わらず、日差しของきつきは何ら変わりはず二人を苦しめる。とは言え、水辺である事には変わりがない為、二人はここで小休止をする事に決める。

「さて、予定変更。安心安全快適な休憩タイムの為に、ここでコイツを狩っておくぞ」  
レナードが示した先には、ガレオスが砂中を遊泳していた。エリア1は先ほどのエリア2と比べると非常に狭い作りとなっており、正しく水を得た魚の如き動きを見せるガレオスも満足に動く事が出来ない。おまけに今現在姿を見ているのは一頭だけで、横入りの可能性も今のところは無い。ガレオスの特徴を掴むには、これ以上ない程有利な状況という訳だ。

「小タル爆弾でいけ、いいな？」

「はいっ！」

音爆弾はモンスターの鳴き袋を使用する為に、小タル爆弾に比べ数を揃えにくく高価だ。ガレオスを引き摺りだすには大きな音さえ出せばいい。なので、音爆弾以外にも爆弾でも同様の効果を發揮してくれる小タル爆弾を今回の様に代用する場合があるのだ。

「小タル爆弾は音爆弾に比べれば、タイミングがシビアで咄嗟に出す事が難しい。だから、今みたいに余裕がある時には小タル爆弾を使う方がいいって訳だな」

「分かって、ますよつと！」

返答と共に、セイデイが小タル爆弾を投擲する。投げられた小タル爆弾は放物線を描き、丁度同じようなルートで遊泳していたガレオスの頭上で爆発をする。

『ギャワアアア!?!』

聴覚を発達させたガレオスは、爆発音に驚き堪らず飛び出してくる。そこには既に、気を溜めていたレナードが口元に笑みを浮かべつつ待ち構えていた。ギチリ、と僅かに軋む防具の音と共に振り下ろされる一撃は断頭台のようにガレオスの首を何の抵抗も許さず斬り落とす。

ビクン、と一度だけ痙攣を起こしガレオスは絶命した。

「ふいー、お疲れさん。タイミングばっちりだったじゃないか、褒めて遣わす」  
「ふっふーん、有り難きしわわせ……あう、囁んじやった」

互いの健闘を称え、左手同士をコツリと打ち鳴らす。

二人が妙に上機嫌なのは訳があつた。今回の役割分担は、セイデイの発案であつたのだ。セイデイが道具で誘き出しあるいは援護をし、レナードが仕留める。文字にすればこれだけの簡単な事ではあつたが、役割分担を完璧にこなした今の状況は二人にとって理想的なものとなっている。

それに、二人は師と弟子という関係ではあるがそれに甘んじず、なるべく対等であるうとしているその心意気もレナードにとつては好感が持てるものとなつていた。対するセイデイの上機嫌な理由は単純で、自分の考えた作戦が上手く行き師匠に褒められたが為に生まれた感情であつた。

「それにしても、小タル爆弾を投げるとはなあ」

「えへへ、アイルー達が投げてるの思い出したんですよ。だったら出来るんじや無いかつて」

その言葉を聞き、レナードは内心舌を巻いていた。先ほど先入観の話をセイデイにしていたが、そう自身が考えるようになったのは己が弟子の見せた工夫が切っ掛けなのである。

(俺みたいな強靱な体よりも、遥かにハンターに必要なかも知れないな……)

砂竜の胴体を剥ぎ取りながら、密かに胸中で呟く。

「お、砂竜のキモか。珍味って話だし、帰ったらニヤーに調理してもらうかね」

「やった！　じゃあ、せめて人数分狩っていきましようよっ！　さっきのでコツも掴めましたし」

「調子に乗らない。食い意地張ってんじゃねえよ、馬鹿弟子。ちよつと見直したらすぐコレだ」

「デコピン行くか、ん？　と問い掛けるレナードの誘いにセイデイは冷や汗を掻きながら固辞をする。それもこれも、周囲に脅威を感じられないが故の僅かな気の抜きようだ。

「取り敢えず、水の補給でもしておくか」

「そうですね、ここから先水辺があるかどうか分かりませんし」

二人は中身の無い空きボトルなどの中に水を込めていく。俗説ではあるが、人が砂漠で動き回る為に必要な水の量は一時間で4リットルと言われている。レナード達ハンターは厳しい鍛錬と気の効力によって常人とは身体能力が比にならない程高い為、そこまで必要では無い。とは言え、水の補給が軽んじられる理由にはならない為、そうした機会があれば逐一補給する事を心掛けていたのであった。

「それにしても……盾蟹って言う位だから水辺のあるここにいると思っただけでねえ」

「ああ、俺もそうは思ってた。まあ、ここはベースキャンプの真下に地底湖だってある土地だからな。水辺だけなら幾つもある。当面は予定通り、このまま南側から西へと向かってエリア5、エリア9へと向かうぞ。ダイミヨウザザミの目撃情報がその辺りに集中しているらしいからな、おそらく周回ルートにでもなってるんだらう」

「はあ、そんな事まで分かるなんて。ギルドもやつぱりすごいですねえ」

「俺も中々大変だったんだぞ……。パーティにわざわざ取り寄せてもらった手前、作業を手伝わない訳にもいかないし」

「だからギルド『も』って言ったじゃないですか。全く、察しの悪い男の人は女の子から嫌われますよっ！」

「さよか……」

セイデイは称賛の声を上げた。レナードとパーティの二人が、玉石混合である膨大な情報を纏め上げて効率の良いルートを策定したおかげでこうして色々と余裕のある狩りを行う事が出来ているのだ。きつとセイデイ一人では途方に暮れていた事だろう。照れ隠しをしながらの為、素直には言えないが。

「でも、師匠？ 何でいきなりダイミヨウザザミを選んだんですか？ もっと手頃な獲



物だつていたんじや……」

初めての狩り場、当然障害は低い方がいい。その点で言えば、セイディの主張は何ら間違つてはいなかつた。例えば、先ほど話題に出たゲネポスなども、幾ら厄介とは言え麻痺毒にさえ気を付けていればほぼランポスと変わりはない。適当にサブターゲットをクリアでもして砂漠の感覚を掴んで再度赴けばいい。レナードが今までの傾向から言つて、サブターゲットのみをクリアして良しとはしないという傾向を鑑みたとしても正しく正論であつた。

「まあ、少しばかりの安全を差し引いてでも急いでおきたい訳があつてな……」

レナードは、それに対し含むように答える。頭の中にあるのは、当然かつてのゲームの流れだ。ジャンボ村が発展し終えるまで、それはどうあつてもかき消す事は出来ない。

モンスター達の動きなど予測する事など不可能。であれば、本来ならば無理をしない範囲で己が最善を尽くしていくのがベストと言える。だが、それは何も目安が無い状況でのことだ。強大なモンスター達がジャンボ村から行ける狩り場に出没し、生活を脅かす恐れが多々ある事をレナードは知っている。知っている以上、それを目安として対策を練つていくのは『知る者』としての義務である。村を脅かす脅威に対抗出来るだけの装備を整える、それは多少の無理をしてでも最善以上をもぎ取らねば成し得ない事なの

だ。

心中で気を引き締め直しながら、レナードはエリア9へ向かうのであった。



エリア2と同じく広い砂漠地帯であるエリア5を走り抜け（ガレオスしかいなかった）、向かったエリア9にて二人は目的の存在を発見した。

エリア9は谷間の先にある荒地だ。足元は乾いてはいるが土で構成されており、照りつける太陽や吹きすさぶ乾いた風は依然健在ではあるが、それでも砂漠地帯と比べると幾分マシな環境である。

他にある特徴と言えば北側におあつらえ向きな高台が存在してはいるが、ガンナーでは無く剣士である二人にはあまり関係は無い。

「よし、居たな……ペイントボール、用意」

「は……」

二人の目の前には、《盾蟹》ダイミヨウザザミがノソノソと歩いていた。外見は一言で言うところ「赤くてデカイヤドカリ」であり、今もその背にはヤドにしている《一角竜》モノプロスの頭蓋骨を背負っている。普段は砂中に潜っているが食事時は砂の中から

出てきて小さな虫や植物を食べるらしい。砂の中から探すのは一苦勞であった為に、一度食事時であったのは望外の幸運と言える。

「打ち合わせ通り、投げた後はお前は一時避難。動きを覚えるまでは観察に徹しろ、いいな？」

「はいっ。師匠も、お気をつけて」

「ああ」

レナードはふう……、と呼吸を整え、おもむろに前を向く。彼の盾蟹は未だ暢気に歩いている。

(にしてもデケエな、あの頭蓋骨……)

目算でも4 m前後といったトコロだ。全身で行けば、全長30 mは下らない。そんなサイズのモノブロスがどこかに存在していたという事に、レナードは身を震わせる思いとなる。

「……いずれ、お相手願いたいモンだがね」

言外に今は遠慮願いたい旨を述べていると、ペイントボールが盾蟹に投げつけられた。駆けながら投げたセイデイは大きく横をすり抜け北側の高台へと移動していく。ここからのセイデイの役割は、今後に生かす為の観察と適宜の援護。その際に並行して未確認情報の検証だ。直接の殴り合いはレナードの仕事となる。

『…………?』

未だ攻撃を受けた訳では無いダイミヨウザザミは、現状の把握をする為に辺りを見回している。

「おっせえええええっ!!」

『シユワアアッ!』

盾蟹の両腕部分、巨大な鋏へと抜刀切りで振り下ろす。怪力を誇るレナード、加えて性能の高い武器による一撃。間違はなく今までの相手ならば瀕死、そうでなくとも命中した部分には相当の被害が出ていただろう一撃。

大音量にてガツン、と音が響く。レナードの耳には、まるで車と車がぶつかったかのような激しい音に聞こえていた。

そして。

後には何も変わらぬ鋏が尚も健在していた。

(硬さなら……やっぱり、イヤンクツクを凌ぐな)

「……硬いねえ、無駄に。もう少し柔軟に生きてみる気は無いのかよ、全く……」

「し、師匠っつ!? 大丈夫ですかっ!?!」

一見、傍から見るとレナードは何ら痛痒を感じていないかのように振る舞っていた。実際にセイデイにはそう見えた。しかし同時にそんな事は有り得ないのだ、今まで多く

の獲物達を仕留めてきた自慢の一撃が相手に何のダメージも与えられてはいないのだからとも考える。無傷の盾蟹を前にしている、多かれ少なかれ動揺を見せて然るべきだ。

レナードは、思考する。——本当に何のダメージも与えられてなければの話だ、と。(外側が硬ければ硬い程、相対的に内側は柔くなるもんだ。一撃で効かないなら、二つ三つと重ねて行けばいい。それがいつかは届いてくれる)

それに、硬さとは脆さと反比例している。ダイヤモンドが容易く衝撃で砕け散ってしまうように、硬ければ硬い程に衝撃には弱くなってくるのだ。例えそれが生き物の体の一部であっても、それは例外では無い。

故にレナードは打ち込み続ける。本来であれば切り裂くための牙を持つ大剣でもって、あえて鈍器で叩きつけるように使用する。

「おおおおおっ!!」

強引に上から押さえつけるように、分厚い刀身で叩きつける。低く響き渡る音と共に、ひれ伏すような状態でダイヤモンドウザザミは動かなくなっている。気絶しているのだ。

「予定変更だ……!」

本来ならば、攻撃方法の把握の為じつくりと行くつもりであったが。折角向こうから

動かないでいてくれているのだ、狩りの為に最善を尽くすハンターがその好機を逃さぬ手は無い。

素早く得物のブレイズブレイドを担ぐように構える。押し殺すように漏れる獣じみた呼気に昂る血潮、高まる気合い。それと共に体内に留まり切らなかつた気が赤く踊り狂うように放出される。その様は歓喜、初めて何の躊躇いも無く解き放たれる事への喜びが込められているように渦巻いている。

「カ、チ、割れええええッ!!」

『シユシユワツ……!』

振り下ろされる一撃は、処刑人のそれを彷彿とさせる程に鋭くも重々しくあつた。接触と共に、あれほど頑丈に思えたダイミヨウザザミの頭部が胴体の一部と共に呆気なくも砕け散り、のみならず踏みしめる大地をさえも陥没させ、それを為したレナードの体や頬にはザザミソが飛び散り付着する。以前ドスランポスとの際に放つた一撃と比べてみると、石と土という違いこそあれど、それでも尚威力は大きい。破碎音は既に破碎の域には無く、より相応しく述べるとすれば爆炸音と呼べるほどに大音量でエリア中に響き渡っていた。

無音。

既に絶命しているダイミヨウザザミは当然、安全圏で観察していたセイデイも、あま

りの圧倒的かつ完膚なきまでの完勝振りに身動きが取れずにいた。誰が見ても完全に息絶えているダイミヨウザザミの横で、己の得物が無事かどうかの確認をしていたレナードが発する音のみが僅かに大気を震わせる。

やがて、満足したレナードの安堵が含まれた吐息と共に時は再び動き出す。

「おーい、剥ぎ取るぞー！ ぼーっとしてないで、とつとそこから降りて来いよー！」  
「あつ……！ は、はいー、今行きますー!!」

慌てて、高台から飛び降り、二人してせつせと素材を剥ぎ取っていく。

「いやー、それにしても師匠？ 実質三発であの、大型飛竜と硬さだけなら遜色ないダイミヨウザザミを仕留めちゃうなんて！ もう、化け物みたいですねえ……」

「……っ！ ……ああ、そうだな」

初めて見た己の師匠の尋常な威力では無い本気の一撃。人間を遥かに超えた身体能力を誇るモンスターを一撃で屠り、僅かながら地形すらも変えてしまうその威力を目の当たりにして、セイディは動揺していた。動揺しながらもセイディが放った軽口は、普段通りの自分を、いや『自分達』を取り戻す行為。そんな事は分かっていた。それは分かっていたからこそ、レナードは声を荒げない。過去の苛立ちや嘆きを、自分より年下の少女にぶつける事を、彼は良しとはしなかった。

「……師匠？」

「……行くぞ、帰るまで気を抜くなよ」

「ベースキャンプに戻るまでが狩り、ですもんねっ！ 分かってますよ！ ……しよー？」

「……………」

『ひっ……………化け物っ！』

沈黙の中、レナードはかつての事を思い起こしていた。

かつて、化け物と呼ばれた事があつた。言つたのは家族の様に共に在つた少女であつた。今から思えば決して少女を責める事は出来ない。ある日唐突に、それこそレナード本人すらも知らぬ間に常軌を逸した怪力を手に入れていたのだから。力を振るう素振りも見せずに笑顔であらゆるものを砕いて見せれば、その異常さにそんな感想の一つも出てくるだろう。

(ベル……)

心の奥底で、レナードは幼馴染の名を呟く。確かにレナードの怪力は化け物染みたモノとなつていた。ただ、レナードの心までは化け物となつていなかった。それだけの事だ。ただそれだけで、癒えたと思つていた心の奥底で性懲りも無く傷付いてしまう事実  
にレナード自身驚きを禁じ得ない。

(こんな事で……。女々しいなあ、俺も……)



別に面と向かって排斥された訳でも無く、罵倒された訳でも無いと言うのに。遠い過去も今現在も、周囲の人が優しい世界で生まれ育ってきたレナードにとつては、たったそれだけで心にチクリとする傷が奥底に僅かだけでも残ってしまう。

(今頃、アイツも何してるんだろぅかな……)

そう古くも無い昔を思い出し、レナードは青い空を見る。この空が世界中どこにでも続いている事を知っているから。きつとあの村の人達も、この空の下にいて穏やかに暮らしているに違いないから。

(こんな事考えるなんて、柄にも無い、か……)

防具を外し頭をくしやりと撫で、苦笑する。本当に、柄にも無い。気を取り直すと前を向くと、いつの間にもやら先に進んでいたセイデイがレナードに向けて手を振っているのが分かる。どうやら急かしているようだ。

結局、ベースキャンプに戻るまでレナードの感傷は治る事は無かった。



「ふふふ……遂に、着いた。ここが、ジャンボ村……。名前の割に貧相だけれど、それはこつちの方に置いといて、と」

ジャンボ村の大事な交通路である海路。そこを司る港の棧橋の前に、独りで何やらジエスチャーをしている少女がいる。汚れはあれど傷一つ無いガンナー用の《ランポスシリーズ》に身を包み気の強そうな桃色の瞳を持った眼差しが印象的な彼女は、船を建造しようと木材を運んでいる村の若者達が遠巻きにしている事も気付かずにブツブツと何やら呟きを続けている。

「さて、と。アイツは一体どこにいるのかしら」

手で庇を作り、周囲を見回す動作を行う。彼女の目的はただ一つ。

「絶対、ゼーったい連れ戻してやるんだからねっ……い！ レナード……い！ ……あう」

棧橋の繋ぎ目に足を引っ掛けびたーんと転んで涙目になる様子は、幸い誰にも見られる事は無かった。

「れなーどー……」

情けない声を上げる様子もまた、同様。

## 幼馴染と竜人族のお姉さま

「ミヤフ……ちよおつと、飲み過ぎたかミヤ〜……」

耳を澄ませば、未だに村人達の楽しげな声で構成されている喧騒が聞こえてくる。今日は村にいるハンターが村に迫る飛竜を討伐したという事で、村中大騒ぎの乱痴気騒ぎといった様相を呈していた。

そんな中ネコニヤーは、わんこそばのように酒を飲ませようとしてくる村人を幾分アルコールで摩耗してしまった危機感を辛うじて働かせ退避。ふらつく体を何とか引き摺りながら、愛しのレナードのいる家へと戻ってきたのであった。

「むーん……ごしじんさまはもうお休みになられますかミヤ。——そうミヤ！ 目が覚めた時にすぐに食べ物を口に出来るように、ここはニヤーがいち早くお食事を作っておいてあげるのミヤ！ ミヤフフ……アルコールに侵された気怠い体を引き摺りながら、それでも美味しい料理を作るのミヤー、その真心と愛情のたーっぷり詰まった料理を食べてごしじんさまはこう言うのミヤー……！ 『美味しいよ、ニヤー！ ああ、俺は何て幸せ者なんだ、こんな可愛らしい女の子に朝一番でこんなに美味しい食事を作ってもらえるなんて！』……なーんてミヤー！……なーんてミヤー!!」

いやんいやんと顔に手を当て妄想を仄めかすネコニヤールは、間違ひなくアルコールの影響を受けていた。ここにレナードがいれば、普段から素面で同じような言動を取っているため、平常運転だと言ったかもしれないが。

「……ふむ。やつぱり最近では寒くなってきたし、ホットミートを使った料理で一日頑張つてもらおうかミヤ。朝だけど、ごしじんさまなら体が資本のハンターさんだしきつと大丈夫ミヤ。えーつと、献立は決まつたとして……。ミヤ……トウガラシだけが無いのかミヤ」

ネコニヤールはキョロキョロと首を振つてトウガラシを探す。冷静な頭で考えれば家の中で首を振つて探した所で無いものは無い。精々似た形のものが見つかただけだが、今の酔いが回つた彼女にそんな当たり前の思考など期待できる筈も無かつた。

「ん、おおつ。えらく立派なトウガラシ、発見ミヤ！」

ネコニヤールは、トウガラシとは似ても似つかぬほどに立派な二本の赤い物を発見する。それは敢えて似たものを挙げるとすれば赤い象牙であろうか。とにかく、家の中で一番目立つ場所に鎮座されているそれを彼女は足場を使い手に取る。小さな体では全体を使い一抱えほどもあるそれは、あるいはかつてこの家の主が自慢げに家宝、いやさ村の宝と言つて謂れを話していた事を思い出したならば、ネコニヤールも恐れ多くて触れることも無かつたのだろうか。

残念ながら、いつもならば誰かしらが起きているこの家の住人達も宴会に出てしまい、愛しのレナードも既に夢の世界の住人である。彼女を静止する者などどこにも存在してはいなかった。

「ミヤミヤ、調理出来ないミャー……」

しばしの間、試行錯誤は続いた。ネコニヤの横には包丁を始めとした普段使用している料理器具が軒並み無残な姿となつて積み重ねられているのがその証拠として残っている。象牙のような形状をしたソレは存外固く、細かく刻んで料理に加えるには手持ちの調理用具では全く歯が立たなかつたのだ。だが出来るアイルー、ネコニヤは焦りはしなかつた。ハンターが大枚はたいて性能の良い新たな武器を手にするように、今の彼女には奥の手が存在していたのだ。

「ふっふーん、これを見よー！ ミャ。何と、ドラグライト鉱石で出来たおろし金ミャー！！」

煌びやかな装飾の施された傷一つないおろし金を天に掲げ、胸を張り堂々と宣言をす

る。

「ふんふんふーん♪」

今までの鉄鉱石で出来た調理器具に比べると、別名が輝竜石と言うだけあって煌びやかな光沢を放っており見るからに高級そうな佇まいとなっている。器具に映る己の顔

を見て、みやあ……と溜息を吐く。そして見た目だけではなく、使い心地から仕上がりまでまるで違っていた。あれほどの強敵であったご立派なトウガラシを、アルコールの影響でどこか危なっかしくも手慣れた手つきで削っていく。酷く乾燥していたのか粉末状になるのに一瞬疑問を持ちはしたが、まあいいかと気を取り直して摩り下ろし作業を続行していく。レナードの家族は既に年老いたこの村の村長ただ一人の為正直この量は少々多くはあるのだが、途中で終わらせるのもあれなので最後まで入念に、そして念入りにゴウリゴウリ……とおろし金にかけていく。その後ろ姿はどこか執念めいたものすら感じる。

「はふうー、これで良しミヤ。さてさて、ニヤーもそろそろお休みしておくかミヤー……おっとと」

やがてその作業も終え、ネコニヤーは料理の下準備を無事に終了させた。ありもしない額の汗を拭う仕草をしながら、彼女は酔いでふらつきながらもいそいそと自分の寝床へと歩いていった。

誰もいない調理場で、粉末状のソレは何も語らぬにも関わらず不思議な存在感を放っている。

しかしそれも当然の事、その粉末の正体は天災に挙げられる程の強大な力を秘めたモノの一部であったのだから。

ソレの正体は『歩く天災』『動く霊峰』との異名すら持つ巨体の持ち主、現状確認されている全生物の中でも上から数えた方が早い程の大きさを誇る老山龍・ラオシャンロンの爪。かつて名も無きハンターがこの村に宿泊していった際、一宿一飯のお礼としてこの村長宅に置いて行っただけという逸話のある代物である。古龍の爪などと、村長一家以外には殆ど誰にも信じられてはいなかったのだが。多くの村人は何か飛竜の爪だろうと考えられていた、それでも十分に凄い事なのでそれなりに大事にされてはいた。更に言えばそのハンターは、その老山龍の爪に更に持つだけで力溢れる由緒正しき二つの護符を調査によって一つの物としたとか言う話を、酔いのまわった赤ら顔でもって語っていたという。

レナードがそれを知れば、ゲームの中での名称でこう名前を呼んでいただろう。『力の爪』と『守りの爪』がなんで家にあるんだよ……』と。

18年もの間そこで暮らしていたにも関わらずそんな代物に気付かなかった事を、レナードは割と長い間悔やみ続ける事になるのは余談である。



「どうしたものかな……」

「どうしたのですかねえ……」

村長とパティは酒場の片隅にてヒソヒソと顔を寄せて密談を交わし、二人同時に溜息を吐く。息が合つてまあ素敵、などと今更言うつもりは無い。パティが幼い頃から親子同然の付き合いをしている為に息が合うのは当然の事であるし、むしろ今現在に限つては……この現状が嘘や夢では無い事を示している、ある意味最も消し去りたいものでもある。

再度、故意に息を合わせていないにも関わらずほぼ同時に元凶の存在を見やる。

「……酒があ、たりわいわよお〜」

「ミヤー……ベル姉さま、少しお酒飲み過ぎだミヤー」

「うるしやい！ もー、らんでれなーどはここにいらいのよ……しえっかく、はらしがあつれきたつてーのにく〜！」

真昼間から、酒場のカウンターに突つ伏すようにして酒を飲んでいる人物がいる。桃色の髪を腰の辺りまで伸ばした若いハンターの少女だ、横にはいつもレナードの世話を甲斐甲斐しく行っているネコニヤーが困った様子で相手をしていた。話を聞く限り、どうもレナードの元いた村出身のハンターらしい。

村長達にとつてもハンターが増えるのはこの村にとつても非常に有益な為、本来なら



ば大歓迎をしていた。だが彼女の用件は違う。むしろその逆、既にこの村の専属ハンターであるレナードを自分達の故郷である村に連れ戻そうというものであった。

とりあえず今はレナード達も丁度クエストでいない。肩すかしを食らいふて腐れてしまったベルと言う名の少女は、偶々出歩いていた知り合いであるネコニャーを強引にひっ捕まえて酒のお供をさせている、といった経緯であった。

「村長、レナードさんがいなくなったら多分セイディちゃんもいなくなっちゃいますよね……?」

「まあ、カノジョもこの村つて言うよりカレが目的でまた戻ってきたみたいなモンだからなあ」

最悪、まあ無いとは思いますが、レナードをライバル視しているレオンまで付いて行ってしまう恐れすらあった。どちらにしろ、優秀なハンターは村の宝と共に生命線だ。村長としては許容する事は到底出来ない。共に村を発展させていく仲間を手放すという選択肢が無い事などは言うまでも無いが。

「……ベル、か?」

アチャー、と言った顔で村長とパティは顔を覆う。酔い潰すなりして何とかやり過ごそうと酒を飲むことを提案したのは村長達だ、その目論見は彼女が飲み始めて早々に丁度当のレナード本人が狩りから戻ってきて声を掛けた事でご破算となってしまうた。

「あゝ！ れにやーどいたー!!」

「酒くさ……」

焦点の合っていない眼差しながら妙に力強くレナードに指を突き付けるベルだが、レナードは至近距離からの酒臭さに顔を背けてしまう。

「ちよつと〜！ ちゃんとこつち向きなさいよ、こつち向ーいーてー!」

「……何だよ」

溜息を吐きつつ、渋々とベルの方を向く。彼女が言い出したら聞かないのは小さな頃から何度も学習していた事なのだ。増してや酒が入れば言うまでも無い。

（会った頃は引つ込み思案で大人しい子だった筈なのになあ……）

幼い頃は、心優しくもどこかどんくさくて人見知り。それがいつの間やら、自分や周囲の人間を巻き込んだり引つ張ったりしていくのだから人の成長と言うのは恐ろしい。

それはともかく、実の所レナードは彼女との再会にあまり積極的では無かった。何故ならレナードにとって最も仲の良かった幼馴染であるベルは、かつて自分がいた村の象徴とも言うべき存在であったからだ。

自分が常軌を逸した怪力を発揮した事で、村の空気が悪くなりそこに居辛くなった。なので、村を出た。言葉にすればこれだけの事、当然の事だが様々な葛藤がそこには

あつた。

それでも別に村人に面と向かつて出て行けと言われた訳では無い、村長の孫である訳だし対外的にも礼儀正しくも明るく接していたレナードに悪印象を抱かれる要素はほぼ存在しない。加え村人達の性質は牧歌的な雰囲気、排斥運動を起こすような人種とはかけ離れていた。ただ、一言だけ付け加えるなら彼らは牧歌的であるが故にレナードに、正確に言えば『レナードの得た力』に怯えていた。

例えレナード本人はそんなつもりは無かつたとしても、うっかりその力が揮われることがあつたら？ 例えば酒を飲んで意識が無くなり何かの弾みで誰かを殴ればそれだけでその人はミンチになつて死んでしまう……そういった懸念は、誰からともなく村人達の間で静かに蔓延していった。

レナードは自分から志願したのだ、現村長の孫という身分に胡坐をかく事を良しとせず、村を出てハンターとして生計を立てていく事を選んだ。

レナードは思い悩んでいた。だつて忍びなかつたのだ。事故によつて両親のいない自分に良くしてくれていた村人達の笑みが、自分という存在がいるせいでどこかぎこちなくなつていく。そんな光景はとも見えていられなかつた。

そうしてこのジャンボ村へとやってきた筈なのに、そんなレナードを過去の残滓たるベルは追いかけて来たと言う。久しぶりの再会ではあるが、乗り気にならないのは仕方

が無い事であった。

先程から、自分で呼びかけておきながらもベルは指と指を合わせてもじもじとして話し始めなかったが、意を決したかのように傍にいたネコニヤーが差し出した水をグイツと豪快に飲み干す。酔いは幾分醒めていた。

「あのね、レナード？ その……まずは、ごめんなさいっ！ あの時、アタシあなたに酷い事言っちゃったのをずーつと後悔してたの……」

「いや……いいよ、気にしてないから」

嘘だ。今でも彼女が怯えた表情を浮かべて後ずさる姿は鮮明に思い出せる程にレナードの心の中に深く残っていた。何とか現状を打破したいと考えながらも、どうしようもないと諦めが彼の心を覆い隠していた。

「ううん、それじゃ駄目なんだと思う、きつと。だから、謝らせてちょうだい。……えつと、それでね？ あの後、私やレナードのお爺さん、それからアタシのお父さんが中心になって皆に呼びかけたの。レナードの事を怖がらないでって」

「そんな事を……」

レナードは目を瞠った。いち早く当の本人が見限った事を、この目の前の幼馴染や愛すべき家族である己が祖父は必死になって続けてくれていたのだ。

「みんな、受け入れてくれるって！ 早く帰って来いって、村長さん達も言ってるの！

だから、ね？——レナード、アタシ達の村に帰ろう？」

自分の胸元をギュッと強く握りしめて目を閉じる。瞼の裏に映るのはかつての穏やかな日々。

『よう、レナード！ 村長さんにこれ持ってけ！』

切符のいい雑貨屋の主が新鮮な果物をレナードに差し出して来る。その後奥さんにこつぴどく叱られるまでがいつもの流れだった。

『村長さんトコのレナードじゃないか、ベルちゃんには優しくしとかないといけないよ！』

偶々出会った家の近くに住む奥さんが、小さなレナードに忠告をして来る。彼女のお相手は幼馴染であった為に同じ境遇のレナードとベルに期待をしているのだろう。事有るごとにニヤニヤと色恋に結び付けてくるのが煩わしかった事を覚えている。

『ほれ、ほれ。腹、減つとるじやろ？ 遠慮するな、たらふく食わんと大きくなれんぞ』  
常に笑顔を絶やさぬレナードの祖父である村長、非常に責任のある立場だと言うのにそんな様子はおくびにも出さずレナードをここまで愛情たつぷりに育ててくれただけでなく、ネコニヤも何の躊躇いも無く家族の一員として受け入れてくれた。アイルーのような獣人は、ヒトと獣人は平等という竜人族の考えが無ければ割合差別されがちなのだがこの村ではそんな事も無く、ネコニヤもまた村の一員として受け入れられ

ていった。

『何、安心しろ。ハンターとして大事な事は、この俺が全て叩き込んでやるからな?』

ニヤリとした笑みを浮かべながら、ベテランハンターであるベルの父親がそう言い放つ。常に堂々とした風貌と頼もしさから、レナードは兄や父の様に慕っていた。

「……………」

固く瞑目する。

18年、生きて来たのだ。ジャンボ村の皆を共に開拓する『仲間』とするならば、故郷の村の皆は『家族』。大切なのは時間では無いとはいえ、対抗するのが半年足らずでは紡いできた絆の量が違う。

帰りたい。今までは帰れなかった事情を、幼馴染がこうして懸命に動いてくれたおかげで解消し帰れるようになったという。障害が無くなった事でレナードの心の中に郷愁の念が止めどなく溢れかえってきた。

その様子を察したのだろう、村長やパティ、セイデイといった周囲の人間が固唾を呑んで見守っていた。浮かべる表情には、どこか諦めの想いも込められている。

幾ばくかの時間が過ぎ、レナードは目を開く。答えを出したのだ。

「……………すまん、ベル。俺は、今は帰れない」

「なっ……………どうしてっ!？」

「キミ、最初に渡した契約金の事なら気にしないでもいいんだぜ？ あの時と比べればここを拠点にしているハンターも増えてきてるんだからな。キミがいなくなるのは寂しいし村にとっては痛手にはなるが、なあに別に死に別れて訳でも無いし数日の所に村はあるんだ、いつだって遊びに行けるし来れるだろ？」

「ああ……そうだ、そうなんだよな。別に、大層な事なんかじゃなかったんだよ。ただちよつと、巣立ちが早くなつたつてだけの事なんだよな……」

そう呟いたレナードの顔は、どこか吹っ切れたようなさつぱりとした顔をしていた。奇しくも村を離れることを促す村長の言葉が、レナードをここに残らせる最後の一押しとなつた。

平和な現代日本と違い、道中にモンスターに襲われて命を落としたりする事は日常茶飯事とまではいかずとも、珍しい事では無い。それどころか、村そのものが大型のモンスターに襲われて滅びる事もある世の中だ。家族を置いて別の場所へ離れて住むと言う事柄を、決して安全神話が保障されている場所でのそれと価値観を同じにしている問題では無い。

そんな事はレナードとて百も承知だ、それでも尚この言葉を述べた。

その顔を見て早々に決意の固さを悟つたベルは、流星にレナードの幼馴染と言えのかもしれない。

「……はあ、分かったわよう。昔っから、レナードはいつもそうなんだから」

「ガキの頃から俺を引つ張りまわしてたお前にだけは言われたくないけどな」

「……うん、決めた。少しの間、私もここを拠点にしてクエストを受ける事にするっ！」

「だからお前の頭の中ではないっただいどんな経緯を経たんだ!？」

もう子供とは言えない年になつても、まだベルに引つ張り回される事になりそうだ。

肩を落としてしつっレナードはそう諦める。

「やあ、話はまとまったかな？」

「あ、ジャンボ村の村長さん。はい、アタシも少しの間ですけどこの辺りで狩りをしてみたいと思います」

「ああ、それなら家が必要だな」

「ちよちよちよ、ちよつと待てー!? 何でそんなスムーズに……いや、どうせ反対しても意味ないからそれはいい。良くないけど、いい」

「じゃあ、何なのよ」

「だから凄い目で睨むな。飛竜みた……くは無いな、円らな瞳はブルファンゴを彷彿とさせる感じだ。実に可愛らしい」

結局頬を抓られた事は言うまでもない。

「いたた……でもなベル、お前今ここでそれ決めたんだろ? お前の親父さんとか家の



爺ちゃんとかに伝えずってのはダメだろう」

「んー……確かに、それもそうね。じゃあ後で手紙書いて送っておくわ、帰るのは止めてレナードのいる村で一緒にいる事にしますって」

「……うん、後で一緒に手紙の文面考えような。それだどちよつと好ましくないから」

その言葉に、そうかしら？ などと言い首を傾げているベル。一応彼らに限って無いとは思うのだが、早とちりで色恋沙汰に持つていかれては堪ったものでは無いのだ。以前親バカなセイデイの父親と会った事もあり、レナードはその辺り大変警戒していた。

「あ、あのっ！」

「ああ、そう言えば何なのこの子は？ ハンターみたいだけど」

レナードとベルの会話が一段落した事で、意を決したセイデイが輪の中に飛び込んできた。

ベルの反応に若干の険が含まれているのは、レナードとの話に割り込まれたから……では無く、単に人見知りなだけである。

「あ、はい。私の名前はセイデイって言います。今はレナード師匠と一緒に狩場に出て、色々ハンターの事について学ばせてもらってます」

「ふーん、そうなんだ……一緒に？」

どこか引つかる点があったかのように、ベルはセイデイの口に発した内容の一部を

口にする。

「レナードに限ってそんな事は無いとは思うんだけど。まさかさつきまでの理由は全部嘘っぱちで、このセイデイって子がココにいるから残るんだなんて事は……?」

「無いからな!? 無いと思うとか言いながら、そんなに疑わしげな顔で見てるんじゃないよ!」そこ、セイデイは驚いた顔でこつち見んな! んな訳ねえだろ! ニャーはその口に啞えて引つ張ってるハンカチを離しなさい、ポロポロになんだろうが!」

ぜーぜーと呼吸を荒げ周囲を威嚇するように見渡す。案の定、便乗してレナードをおちよくろうとした村人たちがどこか残念そうな顔で牽制されているのが見て取れる。舌打ちまでして去っていく人物までおり、その正体が憎きレオンである事が分かったレナードは密かに怒りを滾らせる。

「つたく……油断も隙もあつたもんじやない」

額に浮かんだ汗を拭いながら成功を確信する。どうやら善後策が功を奏して最悪の事態は免れたようだ。熱が冷めたように、いつの間にかやら集まっていた村人たちは方々に散っていく。

「何というのか……レナード、アナタ楽しそうねえ」

「どい!」

とぼけたようなベルの言葉に、レナードは心外の極みという思いを込め返すのであつ

た。



「セイデイ、お前今度の狩りはベルと一緒に行って来い」

あれから村長とパティは別の村への来客を迎える為に場所を離れ、他の者はそれぞれ自分の仕事へと戻っていき、レナードとセイデイとベル、それからネコニヤアの三名と一匹がレナードの家の中へと場所を変え、話を続けた。先程までとは異なり三名ともがハンターである為、自然とそっち方面の話になっていく。入った当初にいきなりベッドにポスンとベルが座つたのを見てレナードが男女の間柄を想起してしまい、顔を赤くして椅子に座るように指示したのは余談。

そんな中で出た言葉がこれであった。

「は、ええ!? 師匠、なんでまたいきなり……」

「ちよつとレナード、どういう事よ。何で私がこの子と二人で行かなきゃいけないのよ」

「まあ、前々から考えてはいた事ではあるがな。確かに唐突な感じは否めんけども」

目を丸くして理由を尋ねてくるセイデイと眉根を寄せるベル。

しかしレナードとて、考えも無くそんな考えを述べた訳ではなかった。

「ベルはガンナーだからな、ライトボウガン使い。今までセイデイはガンナーとパーティ組んで行つた事無かつただろ？ いい機会だから一度試してみろ。前回行つた砂漠に行つてベルに狩場の諸々の事を説明つてのと、合わせてそういう意図がある訳だ」

レナードはベルの脇に置いてある得物に目をやつた。そこには女性ハンターが多く使用している《ライトボウガン》が置かれていた。

「でも、それならレナードも一緒に行けば良いじゃない。なんで私とこの子の二人だけなの？」

「あー……まあ、俺は俺でちよつと沼地に用があつてな。毒系の素材を集めたかつたんだけど、ちよつとセイデイにはまだ厳しいかと思つてなあ。かと言つて一人で狩場に行かせるのもちよつと不安だつたから、丁度良かったんだよ。な、ベル？」

頼むよ、と言つて手を合わせるレナードに頼まれた側のベルは隠しきれない感情を口の端に表現しつづつ承をした。

「むー……」

納得がいかなかったのはセイデイだ。いきなりパーティを師弟から見ず知らずの人（しかも何やらこちらに若干悪い印象を抱いているっぽい）と組まされることになつた

かと思うと、その理由が自分が一人だと危なっかしいからだと言う。一応これでも誰の助けも借りずにドスランポスやドスファンゴを討伐し、助けはありながらも（彼女の中心では）飛竜であるイヤンクックを討伐したのだ。それなのに力不足だとは、彼女の小さなプライドはいたく傷つけられていた。

ぷつくりと頬に空気を含み、むすーっとしている様子はどこからどう見てもご機嫌斜めな様子。

結局、彼女を宥めるのに相当の時間暇がかかったレナードであった。彼女が機嫌を直すのに最も効果的であったのが美味しい食べ物であった事は言うまでも無い。



レナード達が場所を移して会話をしている頃、村長とパティはとある人物を出迎える為村の入り口に立っていた。パティはチラリと横に立つ村長の様子を窺う。

「……………」

一見平然としているように見えるが、よく見ると緊張をしているようだ。長年共にあるパティだからこそ気付けた僅かな差異、その事にパティは僅かにドギマギとしていた。

（うう……強面の人とかだったら、まだハンターの皆さんで慣れてるんだけどなあ。村長さんが緊張してるって、一体どんな人なんだろう……？）

パティが持ち前の卓越した妄想力でもってイメージを膨らませ、その中で腕が六本足が四本おまけに角と牙が生えているという取り返しのないような造形をしてみたって頃。果たして、客人は現れた。

「……あら、久しぶりね坊や」

「……流石に坊やはやめてくれないかなあ、もうオイラはこの村の村長なんだけぞ？」

「そうだったわね、ふふ……じゃあこれからお姉さんはあなたの事を村長の坊やって呼ぶ事にしておくわね」

「はあ……もうそれでいいけどさ」

荷物も持たず悠然と歩いてきたのは妖艶さが香る東洋風の美女であった。その横には道中の護衛だろうか、黙したままの老練なハンターが一人寄り添うように立っている。東洋風の美女は赤みがかった紫を基調とした民族衣装の様な服を着ており、物腰も柔らかい。活発で明るい愛嬌のあるパティや、それから友人であるセイティには真似の出来ない色香が漂う大人の女性である。その幾分特徴的な容姿から彼女が竜人族である事が窺い知れるが、それでも村長が彼女を恐れていた理由がパティには分からない。

「あ、あの！……こちらの綺麗なお姉さんは一体……？」

「ああ、そうだった。パティ、この人はオイラの古い知り合いで名前は——」

女性はそつと村長の口元へ手を当てる。それだけの事であっても一つ一つの動作が洗練されて美しく、パティはつい見惚れてしまう。

「お姉さんは、お姉さん……竜人族のお姉さまでいいのよ」

「え、や、でも……」

「野暮は言いつこ無し……ね？　女は少しぐらい秘密がある方が綺麗なものなのよ……？」

その言葉に、村長は諦めたように溜息を漏らす。村長という役職柄、役職名でばかり呼ばれる自分とはもかく、名前までそんな隠さなくてもとは正直思うが、それこそ坊やの頃から自分が彼女に言いつて届いた事はない。なんだかんだで目の前の女性は頑固なのだ、年相応に。そう思った瞬間にニコリと口元だけで笑われたので、村長は縮み上がる。幼い頃からの接触によって、既に体の隅々にまで目の前の女性に対する恐怖心は染み着いていた。

そんな正直情けない村長の横で、パティは将来の為に色々と参考になりそうな立ち居振る舞いを学ぼうと真剣な眼差しを送るのであった。その試みが成功するかどうかは、今はまだ誰にも分からない。

「……さて、楽しいお喋りはおしまい。ここからは本題に入りましょうか。——『古龍観

測局』の一員として」

そう言うと、彼女は妖艶な笑みを浮かべるのであった。



## 砂漠にて、女ハンター二人。

「寒いな……」

クルプティオス湿地帯、通称『沼地』に着いたレナードは、腕をさすりつつ一言そう呟いた。

地理に関しての知識がレナードには無い為理由は分からないが、ここは昼間は常に雨が降り注いでいる場所だ。故に常に薄暗く肌寒い。更に言えばこの地には地面に毒素が含まれている。昼間こそ雨のおかげで毒素が薄まっているが、夜は雨の水分が無い為に毒素が濃く毒沼となって表れてきている。そういった土地柄にも関わらずここにハンターが訪れるのは、『毒』に関連した際には非常に優秀な素材がある事や、天然の洞窟の中には《灰水晶の原石》を始めとした数多の良質な鉱石も存在している。非常に低温だからか本来であれば雪山のような寒い土地にしか存在しない《氷結晶》がある事にレナードが気付き、商人に大枚はたいた事を後悔するのはまだ先の話である。

閑話休題。

「まあ、ホットドリンクが必要な程では無いけども」

如何に気によって体力が向上しているハンターとはいえ、雨に打たれ続けながら長時

間心身を疲弊させるクエストを続けていけば風邪を引いてしまう事は避けられない。念には念を入れ、結局レナードは前言を撤回しホットドリンクをぐびりと飲み干すのであった。

「あいつ等、大丈夫かなあ……」

クエストに出ていく前、レナードが思うのは言うまでも無くセイデイとベルの事である。自分でくっ付けたとはいえ、やはり荒療治な具合は否めない。少々性急に過ぎたか？　とも今更ながら考えてしまう。

「あいつらどつちも何だかんだで意志曲げんからなあ……」

気温の低さとはまた別の理由で、レナードはブルリと身を震わせる。

「とは言え、毒は必ず集めとかねーと。アイツがやってくるのはそう遠くないだろうし」レナードの脳裏によぎるのは、あるモンスターであった。強靱無比にして災害と同等と称せられる程の存在。古龍である。その中の一つ、風翔龍・クシャルダオラ。風を司る存在であり、ゲームでは暴風雨を引き連れ最初に主人公と相対する古龍でもある。

しかし恐れる事は無い、古龍として如何に強大とは言え生物には違いなのだ。人が積み上げてきた知識を基に相手の弱点を攻めていけば必ず討伐出来る筈だ。現実では無いにせよ数多の古龍を屠ってきたレナードは、確かな自信と共にそう確信する。

「ふふん、来るなら来てみる風翔龍……！　あ、いやまだ来るなよ準備出来ないから」

クシャルダオラの弱点は毒だ、毒が付与されるだけで彼の龍は弱体化してしまう。その為レナードはこの沼地で《ドスイーオス》のようなモンスターを狩って毒属性を持つ片手剣を作成しようとしていた。毒にさえしてしまえば、クシャルダオラも恐るるに足らず。この世界の常識を持つ者からすれば根拠のない慢心、レナードからすれば根拠のある確信で以て自信溢れる態度を取っていた。

「さて……行くか」

拙速は巧遅に勝るとい言葉通り、周囲の風景を観察する事も程々にレナードは狩場へと駆け出す。

そうする事で、多少意図的に彼女達の事を考えないようにした事を否定する事は出来ない。



「だから、ここに詳しい私が指示を出すって言ってるんです！」

「アタシに決まってるでしょ！」

ぐぬぬぬ……と二人してベースキャンプの前で額と額を突き合わせて睨みあう。今回も船頭を務めていたリユーズがハア……と重苦しく溜息を吐く。もう30分は言

い合いをしている、いい加減疲れないのだろうかとも思うがそこは流石はハンターという事なのだろう。それに、言うまでも無くこの場の空気は最悪となっている。今回は前回から間を置かずにここに来たので荷物も少ない為、アルトのようなハンター見習いの少年少女もいないので道中は三人旅。口が挟める訳も無いリューズに出来たのは、こんな状況の二人を押し付けたレナードを恨む事だけであった。

「私は師匠と一緒に砂漠で狩りをした経験があるんです！ だから私がリーダーになるのは当然なんです！」

「経験って言うんだったらアタシの方が長くハンターやつてるし、その分だけ臨機応変に事態に対応できるわよ！ それにアタシは後衛、モンスターから離れてる分だけ指示も出しやすいわ！ アンタは道案内だけしてればいいのよ」

「そんな事言つて、ガンナー用の防具は剣士用に比べて薄いんだからもし近付かれたらパニックを起こして指示どころじゃ無いんじゃないですか!？」

「なんですつて！」

「なんなんですかつ！」

再度睨みあう二人。とてもすべてを聞いてなどおれないリューズは無限ループに陥ったかのような状態だと思っていたのだが、話題はいつの間にもややお互いの事に移っていた。

「大体アンタは年上に対する敬意つてモンが足りないのよ！ 全く、何でレナードもこんなチンチクリンを弟子にしたのかしらねっ！」

「い、言いましたね〜!? ベルさんこそ、そんな性格じゃ自分勝手に我が儘な性格じゃ師匠に嫌われてるんじゃないんですか!!」

「……ッ!?!」

その言葉を聞いて、荒ぶっていたベルが突然怯んだように口を噤む。

「ち、違うモン……レナードは、そんな事言わないもん……!」

「もん!? ……ふふん、また随分と子供っぽい口調をするんですねー!」

相手が怯んだと見るや、常よりも数段凶暴と化したセイデイは相手の弱点を執拗に嫌らしくも攻めたてる。狩りにおいて情けも容赦も排除するその有様は、正しくハンターの在り方と言つていいだろう。唯一の聴衆であるリユーズは「女、怖いぞー……!」と言つて完全に引いていたが。

そうこうしている内に、セイデイも口論の熱が冷めてきて幾分落ち着いてきた。途中から上機嫌な様子で目を瞑つて話していたので気が付かなかつたが、互いに言い合う事で熱しあつていた相手のベルが口を閉ざして俯きながらプルプルと震えていた為であつた。如何にも泣きそうと言つた様子に、平静に戻つたセイデイは非常に慌ててしまふ。

「あ、あれ……?」

「……いじめっ子」

「だ、黙ってて下さい!」

「……アタシ。ホントはもつと泣き虫で、人見知りで、引つ込み思案だったんだ……」

「ええー……?」

何か独白が始まった。雲行きが怪しくなってきたのをセイディは肌身で感じ取る。

「でも、何故か知らないですけど。なーんか妙に既視感があるような……?」

「何言ってるんだ、お前とレナードがおいらの船の上で身の上話した時と同じ展開なんだぞー。全く、あの時は中々大変だったのに……」

リユーズの指摘にセイディの頬が引き攣る。あの時自分は村の現状に焦っていつぱいいつぱいだった為にどんなモノか詳しくは覚えてはいなかったが、まさかこちら側がこんなにも胃が痛い物だったとはセイディは想像だにできなかった。

(し、師匠……。今度、何かお酒でも奢ります……)

今ならば、きつと酒場のカウンターでパティも含めて共感しながらお酒を飲める気がする。

やや現実逃避気味にセイディが思考している間にも、ベルの内心の吐露は続いていた。

「昔、ね？ 10歳ぐらいの頃、レナードに聞いた事があつたんだ。近所の悪ガキ達にか  
らかわれた言葉の中に、『お前みたいな根暗女のブスなんか、誰が嫁にもらつてくれるん  
だよ！』つて言われたから。『ねえレナード、レナードもやつぱり明るくて笑顔がかわい  
い女の子の方が好きなんだ……よ、ね？』つて」

眉を困つたように寄せ気落ちした様子で語るベルの髪同様に桜色をした目は、力が抜  
けたように垂れ目になつていた。きつと本当は優しくも穏やかな性格をしていたの  
だらう事はセイデイ達にも予想はついていた。

「そしたらさ。『そうだなあ、ベルはもうちよつと自信を持つて皆を引つ張るぐらいにな  
れば、もつと魅力的な女の子になるんじゃないかな。ああ、今でも十分に可愛いけどね』  
なんて言つてくれちゃつて……えへへ」

（あれ……いつの間にかやら、何か惚気られてる？ と言うかそれつて、お兄さんがおませ  
な女の子に言うような感じじゃないや……）

思ひはずれど、口には出さず。と言うか、性格を意図的に無理して変える程の努力が  
無駄でしたなどは流石に不憚すぎるのでセイデイには口に出せなかつた。

しかし、今までの態度が自分の好きな人の為に背伸びをしていた仮初の姿だつた。そ  
う考えると、途端にセイデイには目の前の女性が好ましく思えてきた。

最早当初の背筋を伸ばし睨みつけてくるような様子は微塵も見せず、未だモジモジと

何やら独り言を呟いているベルに語りかける。どこか恋話が大好物なおぼちゃんの雰  
囲気を醸し出すように口元のニヤニヤを隠しながら。

「いやー、それにしても師匠も隅に置けませんねえ。こんな可愛らしい人に好かれてる  
だな・ん・て!」

「な、にやにをう!?!　ンンツ!　……何を、言ってるの。私はただ、レナードは幼馴染だ  
し?　家族同然と言つてもいい間柄な訳だし?　つまり家族が困っているのを助ける  
のは当然の事だし?　つまり当然の事を当然のようにしているだけな訳であつて——」  
「そうですね、そうですねー。さあさ、時間も押してきましたしちよつとばかり巻きで行  
きましょうっ!」

「ちよつと待ちなさいよー!　絶対分かつてないからね、それー!?!　……あう、またコケ  
た」

既に持参する道具の準備自体は終了していた為、二人とも脇に置いていたポーチを  
引つ掴みぎやーぎやーと姦しくベースキャンプから出ていく。

「ケンカしたかと思えば仲直りか……女心は河の流れより解かりにくいぞー」

後には、勢いに取り残された形となつたりユーズが独り。多分、自分には一生理解で  
きないだろう事を確信し溜息を吐くのであつた。





「いたわね……」

「いましたね……」

互いに息を殺しつつ、最低限の確認をする。遮る物の何も無い広大な砂漠であるエリア2付近にある岩場に身を潜めつつ二人が見ているのは、ゲネポス達の群れのリーダーであるドスゲネポスだ。見ている場所の関係上背中しか見えないが、何の生き物かは不明ではあるものの、とにかく肉をただ一頭だけ傲慢に食い散らかしている最中である。周囲に侍っているゲネポス達は、そのお零れに与るといふ訳だ。

「周囲には……1、2……6頭ですか、結構多いですね」

「でも、二人なら何とかなる数だわ。多少時間がかかっても、無理はせず確実に仕留めましょう。ドスゲネポスへは、今回の接触はペイントボールを当ててマーキングするだけでも構わないわ」

ベルの出したやや消極的な方針は、狩りの際には安全第一なセイディとしては願っても無いものであったが、彼女の一目勝気な態度とは正反対のものであった。やはり目の前の女性は、本来はハンターになど向かない穏やかな女性なのだと思える。思うが、決して口には出さない。それは、理由はどうあれここでこうしてハンターとして

在る彼女に対する侮辱にしかならないからだ。

「分かりました」

そう、言葉少なに返す。ここに来るまでに情報は共有済みであるし、狩りともなれば気持ち切り替えるとは彼女達共通の知り合いであるレナードの言葉だ。弟子であるセイデイが、それを守らない訳が無かった。

「まずはアタシが狙撃して一頭か二頭仕留めるわ。セイデイはその後に駆け出して。死角はアタシがカバーするから」

そう言い得物の《シヨットボウガン・蒼》を構えるベルの様子は、流石に堂に入ったものであった。

「ここから……行けるんですか?」

「舐めないでよね! これでも今まで初弾を外したことは無いのよ」

ライトボウガンは、確かにモンスターに接近する剣士に比べれば遠距離からの攻撃とはなる。だが素人が考える物よりは、意外とその距離は近くなる。少なくとも安全圏から一方的にとというのは無理な話となっている。それは命中精度や威力の減衰を考慮に入れた、ハンター達の長年に渡る経験の賜物なのだ。現在の彼女達はゲネポス達に気付かれぬよう距離を置いて身を隠している。幾ら彼女のライトボウガンに弾速が上がる事で飛距離が伸び、弾道のブレも抑制される効果のあるロングバレルが取り付けられて

いるとは言っても、とてもではないがセイデイの知るライトボウガン使いのハンターではこの距離で獲物を仕留める事など叶わない。

セイデイは密かに舌を巻く。もしそれが本当に為せたならば、先ほど吐露された心の奥底の気性はともかく紛れも無くハンターとしての技量を兼ね備えている事になる。先ほどのハンターに向いていないという感想を撤回せねばなるまい。それもこれも全ては実際に彼女の腕前を見てからの事ではあるが。

セイデイもまた、いつぞやのイヤックツク討伐に用いていた《ハンターカリング改》を更にランポスの素材で強化した《サーペントバイト》の位置をそつと触り確認する。ランポスを素材に使っているだけあって一言で言えばランポスをモチーフとした肉厚な鉈のような形状をしている。そのずっしりとした確かな質感は、セイデイに頼もしさを感じさせる。

「……………」

集中していつているのだろう、見る見るうちにベルの顔から表情が削ぎ落とされて無表情へと移り変わっていく。一人きりの狩りならば、周囲に気を配らねばいけないのでこんなにも深く一点に集中する事は出来ないが、今はベルの横にはセイデイがいる。その為警戒などお構いなしにスコープの中の世界へと没入する事が出来た。

(左……………右……………立ち止まって鳴き声……………左)

始めのうちは目標であるゲネポスの動きを頭の中で言葉に起こしつつトレースしていく。ガンナーに必須技術である獲物の行動の先読み、そしてそれと並行して大気の情報を始めとした周囲の環境の情報を、今度は脳の無意識下で演算していく。僅かに獲物からずらされている《シヨットボウガン・蒼》の銃口は、そのブレをも計算に入れている事は言うまでも無い。

当たる。銃口の安定の為に呼吸を止め、そう確信を持ちながら落とされた引き金は常にならぬに比べ酷く軽い気がした。ターン、と遮る物の何も無いエリアに響き渡る音で放たれた《LV2 通常弾》は、大気を切り裂くように標的のゲネポスの頭部へと、まるで吸い込まれるように命中した。頭部など米粒よりは辛うじてマシ程度の超遠距離から放たれたにも関わらず、その弾丸はゲネポスの頭骨を砕き飛び散った脳漿と共に赤い液体を砂漠の乾いた砂へと染み込ませる。紛れも無く即死であった。

「やった、命中っ！」

「まだよー！」

初めて眺めた妙技を見て浮かれた様子のセイデイを、未だスコープから目を逸らさないベルが短く叱責する。

ゲネポス達は一様にこちらへ向けて吠え立ててきている。まだ岩場等の反射する物体が多ければ反響で出所が判りもしなかっただろうが、今いるこのエリアには殆どそう

いった物が無い。既にゲネポス達にはこちらの居場所が丸分かりとなっていた。

「もう一頭……」

額から湧き出てくる汗を拭う事もせず、汗が入らぬよう目を細めながらベルはそう呟く。汗の原因はこの暑さだけでは無く、極限までの集中が原因だ。

こちらに向かつてくるまでもう一頭仕留めておく。彼女の目論見は疲労と引き換えに達成された。

流石に二度続けてヘッドショットはならなかったが、それでも狙いは対象を穿ち二頭目のゲネポスを撃ち抜いてみせた。

「はふう……上出来！」

やっとスコープから顔を外し男らしく腕で汗を拭う。まだ狩りは続くが、ひとまずは上々と言える滑り出しであった。

「行きます！」

「常に周囲へ警戒を忘れないようにね！」

「分かってま、す！」

駆け抜け様、セイディは一頭だけ突出してこちらに向かつてきていたゲネポスの喉を狙い横薙ぎに《サーペントバイト》を振り抜いた。柔らかい部位なため、勢いよく血潮が飛び散る。

「へえ……！」

無駄の無い鮮やかな手並み、技量のみならずゲネポスの体の構造といった知識にも精通していなければ出来ない芸当に、ベルは片眉を上げる事で賞賛の意を告げる事にする。無論後ろを向いて駆けているセイデイには気付かれないが。ハンターの中でも年若い自分よりも尚2つ年下というのに加えて、互いに力量の分からぬ中でのパーティーという事なのでどうなる事かと思っていたが、どうやらその心配もなさそうだ。

セイデイには突出した天賦の才こそありはしないが、狩りに赴くに向けて為すべき事は為している。その堅実な戦い方はベルに心強さを持たせるに値した。

「さあ、アタシも行くわよー」

ベルもまた、身を隠していた岩場から飛び出し駆け出す。ドスゲネポスを除いたゲネポスの数は残り3頭だ、未だ予断を許す事は出来ない。

先に駆け出したセイデイを囲もうとするゲネポス達を、ベルが牽制をするように《L V 2 通常弾》を撃つ。先ほどの様に悠長に狙いを定める事が出来ないので甘い狙いとなった弾丸は、バックステップを踏んだゲネポスに容易く躲される。

「チツ、すばしっこい……！」

「ベルさん、閃光玉使えますか!？」

「まだよ、まだ取っておいて！ これぐらいなら囲まれた内に入らないわ」

合流し背中合わせになつたところで短く問い掛けてくるセイデイに、同じくベルは短く指示を出す。

と同時に、ガンナー用のポーチから通常弾とはまた違う、新たな弾を取り出し手早く装填していく。

剣と盾を構えるセイデイよりも、一見無防備に見えるベルを狙おうと考えたのかゲネポスが一頭ベルの喉元へ食らいつきに来る。

「――残念」

ゲネポスの牙がベルの柔肌に食い込むよりも、僅かに装填が完了する方が早かった。《シヨットボウガン・蒼》の銃口が大口を開けて間抜けにも飛び掛かつてきているゲネポスに向く。精密な狙いを付ける必要などない、この弾はそういう代物なのだ。

《散弾》。それが新しく装填した弾の名前だ。そもそも名前からしてシヨットボウガンなのだ、シヨットガンのように対象に複数回命中してくれる《散弾》の運用に重きを置く事は容易に想像が付く。

その弾の威力の一つ一つは、通常弾の一撃に比べれば弱いと言わざるを得ない。だがその一撃の弱さを扇状に弾をばら撒く事で補う。すばしっこく小さな相手には有効であるし、逆に凶体のデカイ獲物にも複数で命中していく為に有効となる弾なのである。

ゲネポスも軽やかなフットワークでこちらの攻撃を本能的に躲そうと動き回っている。ここは避けられない散弾で相手に傷を与え、然る後に動きが鈍ったゲネポスを別の弾で止めを刺す――。

という常識を。ベルは容易く覆す。

ほぼ零距离で放たれた《散弾》は、飛び掛かってきていたゲネポスの体に数十の弾丸となつて襲い掛かる。翼を持たぬゲネポスでは回避できる訳も無い、散弾はゲネポスの体をまるで蜂の巣のようになるまで穿ち続け、その勢いは鱗を貫きその肉を抉り取るに十分な威力となつていた。ボロ雑巾のようになった体で、それでも微かに鳴いた声だけがそのゲネポスが生きていた証拠であつたが、それも砂漠の乾いた空気に露と消え形も残りはしなかつた。

「よしつ、次……つ！」

考え得る最上の結果で撃破出来た事に浮かれず、再度ライトボウガンに装填する弾を通常弾へと変えつつ鋭さを増した眼差しで次の目標を見やる。

先程まではセイデイと背中合わせであつたが、敵同様軽快に動き回るのを特徴とする片手剣のセイデイではいつまでもそうしている訳にもいかない。それでも常に目まぐるしく体を回転させながら戦う事でセイデイはゲネポスに死角を突かれぬように戦つ



ていた。その刃が見事一頭のゲネポスを捉え息絶えさせていたのをベルは確認する。

死角を突かれぬようにしているのはセイデイだけではない。

周囲の空間の把握を怠るのは命取りとなつてゐるベルにとつては、既に近付いてきてゐるゲネポスにはとうの昔に視認してゐた。

そして、同時に。ガンナー特有の卓越したベルの目には、一頭を斬り倒したセイデイの後ろに襲い掛かる存在もまた見えていた。

ゲネポスよりも一回り大きい体格にV字形のトサカ、裂けた頬の辺りからは隠す事も無く涎が滴り落ちている。

マズイ事にセイデイは斬り倒したゲネポスへ残心をしている為、未だ後ろから近づくとドスゲネポスの脅威に気付けてはいない。常ならば問題にならぬ程の僅かな時間の立ち止まり、賞賛されるべき仕留めたモノへの残心。この時に限つては、それらが合わさり最大の悪手となつていた。

「……ッ！」

一瞬の逡巡すら己に許しはせず、ベルは行動する。銃口をドスゲネポスに向け、射出する。碌に狙いも付けてはいなかった為に僅かにドスゲネポスの鱗を掠めるに留まるがそれで問題は無い。狙い通りドスゲネポスは僅かに後ろに下がり、セイデイに己に迫る危機を気付かせる事が出来た。

「くっ、うあつ……!?!」

「ベルさんっ!!」

しかしその代償は大きかった。己自身に迫りくる脅威への対処を放棄しセイデイを助けたベルは、ゲネポスの牙から出ている麻痺毒が皮膚より染み込みその場にうつ伏せに倒れ伏してしまった。

ゲネポスの麻痺毒は致死性こそ無いものの非常に悪辣で、五感はそのままに対象の運動能力のみを奪ってしまう代物だ。つまり、ゲネポスの麻痺に囚われた生き物は自分が食べられていく様を尋常では無い激痛と共に味わわされるものとなっている。

幸い他に比べればそこまで強力では無い為、体内の気を高める事で急速に毒素を分解する事が出来る。しかしそれでもすぐにとりかかるとい訳にはいかず、10秒ほどはどうしてもかかってしまうのだ。

倒れ伏す砂の熱せられた暑さ、そのざらついた感触は肌で鮮明に感じられるというのに身体に力が入らない。そんな奇妙かつ絶体絶命の状況下で、瞼もまた例外では無く力を失い徐々に下がっていく。

少しずつ黒が占めていく世界、そんなジワジワと迫ってくる絶望を。ベルは心の中で笑い飛ばす。

「よーこよおっしー!」

『ギアアツ!?!』

眩い光は目を閉じていても尚眼球へと到達してくれる。目を閉じていてもゲネポス達の困惑が目には浮かぶ。

麻痺毒が抜けてきたので薄らと目を開けゆっくりと立ち上がる。まだ痺れは残っているが、精密射撃で無ければ問題は無い。ニギニギとしながらそう判断する。

セイデイの投げた閃光玉が、間一髪のタイミングで投擲されたのが目と鼻の先で眼を灼かれもがき苦しむゲネポスの姿によって否応なしに理解させられる。

「助かったわ、セイデイ。命の恩人ね」

「それなら。その前に助けてもらったのでチャラですよ。むしろそれが原因でベルさんが……」

「はい、ストップ。それ以上はベースキャンプに戻ってから、ね?」

この場で反省会をはじめようとする勢いのセイデイを留める。まだ狩りは続いているのだ、そんなものは安全地帯で存分にやればいい。その提案にセイデイもまた言葉無く頷き同意する。

ゲネポスに限らず、視界に頼るモンスターには閃光玉は相当有効な手段である。あれ程鬱陶しくフットワークを使っていたゲネポス達が、立ち止まってあたり吠え散らして

いるのだ。

セイデイへ、顎で残った一頭のゲネポスを狩る事を指示し、自分は麻痺の残る指先で以て落ち着いた動作で別の弾を装填する。

そつと銃口を前方へと向ける。未だ視界の回復しないドスゲネポスのいる、前方へだ。痺れによる震えも無い、距離や風の有無もまた外れる要因にはなり得ない事を瞬時に判断する。妨害しようとするモンスターも周囲にはいない今、ベルの弾丸がドスゲネポスの頭に当たらぬ道理など有りはしなかった。

『ギャウツ……?』

トスツ、と。音が聞こえるようなぐらいに呆気なく、絶好の機会で放たれた一撃はドスゲネポスの頭部に見事吸い込まれた。が、未だ健在。怒りに打ち震え視力の回復した血走った眼でベルを見つめるドスゲネポスは、まだ生きていた。

しかしベルは動じず、真っ直ぐにドスゲネポスを見つめ何も動こうとはしない。彼女は知っていたからだ、彼女の撃った弾の効果はまだ出ていない事を。そして、もう目の前のドスゲネポスの運命は決まっている事を。

『ギャアウツ!?!』

「いよしっ! 完璧っ!」

突如、ドスゲネポスの頭部が爆発をしたのを見て小さくガッツポーズを見せる。ベル

が最後に放った弾丸は《徹甲榴弾》。標的に突き刺さった後、時間を置いて爆発する強力な弾だ。徹甲の名の通り、堅い飛竜の甲殻を貫く事を目的としている弾である。

値段・効果共に現時点でのベルの切り札と言える一発であった。

飛竜の甲殻すら破壊してしまう爆発に鳥竜種であるドスゲネポスの頭部が耐えきれぬ筈も無く、徹甲榴弾の爆発にドスゲネポスの頭部は無残に消し飛んでしまい、僅かに残った部分も砂漠の砂に虚しく飛び散っていく。

最後に首なしの死骸となったドスゲネポスが、パタリと倒れ伏すのを見て二人はようやく緊張の糸を解く。

「やりましたね、ベルさんっ!」

「そうね、お疲れ様! さ、さっさと剥ぎ取って汗ふきましょ? アタシもう汗だくだわ」

「賛成! 私もそれに加えてゲネポスの血までかかっちゃってるから、実はスツゴク気持ち悪いんですよねー」

過酷な環境で命を預け合ったからか、思いを曝け出したからか。砂漠に来た頃とは全く違う様子で、剥ぎ取りを終えた二人は和気藹々と帰っていくのであった。

仲睦まじくお話をする二人の様子に、一人船を漕ぐリユーズが寂しがったのは余談である。

## 嵐の前の・・・

『グルルル……』

暴風雨が場を支配するその中心に、「ソレ」は堂々とした態度で居た。大地に根を張る大木すらも吹き飛ばされてしまいそうな風の中、一切揺らぐ事も無く悠然とした態度で地を踏みしめていくその態度は、周囲に己が命を脅かす天敵のいない強者特有の態度であった。

「ソレ」は、退化した前足が翼へと変わっていった飛竜の形状とは違い四本の脚で歩んでいた。飛竜が《ワイバーン》と呼称されるのなら、「ソレ」は英雄譚に登場するような《ドラゴン》と言うのが最もしつくりと来るだろう。背に生える翼ですら鋼の如き強さを思わせる。

「ソレ」は現在、周囲に群がり小賢しくも食物連鎖の頂点に位置する力を利用しようとする者達を意に介する事も無く、ただの気紛れによって世界を回っていた。

『ガアアアアッ!!』

暴風雨にもかき消されぬ程の大音量で咆哮を上げ、「ソレ」——風翔龍クシャルダオラ——は天高く飛び上がる。自由気ままに、縛られるものなど何も無く暴虐を尽くすの

だ。人知を超えた力を持つ強者ゆえに、それを為す自身は無自覚なままに。



「レナード……お前、自分の言ってる事が解っているのか？」

単刀直入にレオンはレナードへ問い掛けた。ここはジャンボ村の西部にあるレオンの住む家、その中に入ったレオンとレナード、そして現在のレオンのパートナーであるジャニスという修行中のハンターが席を共にしていた。

「ああ、俺の言ってる事が馬鹿馬鹿しい妄言に聞こえる事は分かる。でも、そこを押しつけて頼みたい。——俺に、二人の持つているダイミヨウザザミの素材を売ってくれ」

ひたすらに真摯な態度でレナードは二人に頭を下げる。何も素材を依頼で欲している者に渡す事は特段珍しい事でも無く、何らおかしい事では無い。ギルドを通さずにと言うところは咎められる点だが、逆に言えばそこしか咎められるところは無い。

その点で言えば、レナードの態度は必要以上に仰々しいと言えた。だが、そこに含まれた意味も加味すればそれほどおかしいものではない、いや、むしろ足りない程であった。

「悔しいが、レナード……お前の腕なら、一か月もあれば十分にダイミヨウザザミの素材

は集められる事は認めざるを得ないだろう」

「そんな時間は無いんだ……お前も分かっているだろうが」

「……だとすると、お前本当に……」

「ねーねー。一つ質問！ レナード君、キミホントに古龍を狩ろうとしているの？」

部屋にあつた椅子に逆向きに腰掛け、背もたれにあごを載せながらジャニスは疑問を投げかけてくる。

「ああ、そうだよ」

何も恥じることは無いといった態度で言い切るレナードに、レオンとジャニスは眉を寄せ難しい顔をした。

「村長にそう進言したつて言うのは嘘じゃ無かったか……！ 馬鹿か、お前！ オレ達は所詮雇われハンターだぞ、英雄譚の主人公にでもなったつもりか!? そんな妄想を考えるより、早く村長の所に行つて発言を撤回しろ！ 急がんと村人の避難も間に合わない事になるんだぞ!!」

苛々とした様子でレオンはレナードに言い募る。レオンの言う事はこの世界の常識であつた。最も被害の少なく済む方法、古龍という脅威が現れそれが避けられると言うのなら避けるという考えだ。レナードの考える脅威自体を無くしてしまおうなどという発想は、この世界においては全くもつて非常識な考えであつた。古龍という名称は、



あまりにも高すぎる壁なのだ。

「……すまん。俺がやろうとしてる事は博打だつて事は解つてるんだ」

「だつたら……！」

「それでも……根拠はある。勝つ可能性の高い博打なんだ」

「……………」

レオンは腕組みをし押し黙る。一応はその古龍という天変地異の化身とも言うべき存在に勝つ可能性というものの根拠を聞こうとしてくれたようだ。

「ふーん……で、その根拠つてのはいったい何なのかな？」

興味を惹かれた風なジャンニスに促され、レナードは彼が知る限りのクシャルダオラの情報話を話した。無論確定した情報のみだ、憶測が入った情報は話さない。

「毒で内臓機能を低下かあ、なるほど……確かに、それだけ分かれば付け入る隙はあるかもしれないね」

「ジャンニス！ お前まで何を言っている！ いいか、ハンターは稼業だ。時に危険な賭けに出なければいけない時もあるだろう、だがそれは今じゃない！ 今のこの状況は、自分の命を最優先にして動く場合だ！ ギルドでもそう戒められただろうが！」

ハンターは、つい自分の実力を過信して退くべき時に退かず致命傷を負つてしまうことが多々ある。これは新人熟練腕の良し悪しは関係なく起こり得る事態であり、優秀な

人材の損失を恐れたギルドがある時『あくまでハンターは稼業であり、危険だと判断すれば自分の命を最優先にするように』とのお達しを告げた事があった。

「ギルドでもそう戒められた……か。又ハハハハ！ そう出来れば苦労はすまい！」

「この声は！ ……って、何かこんなセリフ実際に言う事になるとは思わなかった」

レナードの若干歪められた表情などお構いなしに現れたのは、予想通り教官であった。いつもの通り自信満々に腕組みをしてレオンの家の入口に立っている。

「話はそこで、全て聞かせてもらったぞ！」

「いや、何でいるんスカ……」

「ウム、あまりに我輩の訓練所をご利用する者が少ないのでな！ 人生の限りある時間を無駄にせぬよう、ちよおつと草花を愛でながら村の散策をしていたのだ！」

「ふーん、要は誰も来ないから暇つぶしにお散歩してたって事かなー？」

小首を傾げながら言うジャンニスの要約を聞くまでも無く既にレナードとレオンの二人は察しが付いていた為、今も腕組みをしながら冷や汗を掻いている教官を突き詰めるのも面倒だなどという理由から、さらりとジャンニスの言葉を無視していた。後、僅かながらのデリカシーでもって。

「——戒めるといふ事は、逆に言えば、それでもせねばソレを皆守れてはいないという事だ」

空気が、変わった。

咳払いと共に気を取り直して語られた教官の言葉は、張り上げるように語られてはいないというのに、常とは違い重み……言わば『経験の重み』とでも言うべきものが存在していた。

「我輩は現役時代、己の命を最優先にと冷徹に狩りの前に述べていた者達が、いざその時になつたらば家族を、恋人を、親友を、総じて仲間達を守る為に自らの命を投げ打つても助けようとしている光景を幾度となく見た事があるのだ。我輩自身、投げ打つ側にも、そして投げ打たれる側にもなつた事がある」

腕組みはそのままに、教官はそつと目を閉じる。まるで命を散らしたかつての戦友達を脛の裏で思い浮かべ、黙禱を捧げているかのようだった。

「そんな若輩者は自分の事をレオン、貴様の言う所の雇われハンターなどとは考えず、村の一員であると認識しておるのだろうか」

そうだな？ と問い掛けるように見てくる教官に対し、レナードは力強く頷く。実際その通りであつたのだ。そもそも話、古龍を避けるために集団で避難をするとして、だ。一体ドコに避難をするというのか。まだ発展途上とは言えジャンボ村の村人の数は既に100を超えている。当然、着の身着のままでも向かう訳も無い。家財道具一式も含めれば、相当な集団となる事だろう。そんな集団をいきなり受け入れてもらえる都合

のいい場所などありはしない。

何故なら純粋に土地が無い。正確に言うると、人間が安全に過ごせる土地が、だ。現在この世界の人間達が住む街や村は、一部の例外を除けば強力なモンスター達の縄張りに入らずかつ地形的にモンスターに攻め込まれにくい場所に作られている事が殆どだ。当然際限なく広げる事など出来はしない。そんな状況下で村一つ分の人間を受け入れる事など不可能に近い。では村人達を少数に分ければ、と考えるだろうが。例えば弱い草食の獣が群れを成すのと同じ理屈で、襲いやすい少数で狩り場を横断する事など自殺行為に近い。弱者は群れるのが最良の方法なのだ。

それに関連してくるが、ハンターの護衛の数も問題になってくる、如何にレナード達が獅子奮迅の活躍をしたとしても僅か数人で100人以上の村人は絶対に守りきれない。ただでさえ過酷な旅路だ、あるいは体力の無い老人や女子供から落伍者も出てきてしまうかもしれない。

頭の中で考えただけでこれだけの問題が山積しているのだ、一人でも村人が死んでしまいかもしれない方法はレナードにとって看過出来はしなかった。それが現代日本人の感性から来る物だったとしても、狩りの合間であるならともかくこんな時にまで非情ぶって直そうとは到底思えなかった。

最小限の被害で済ます方法では無く、被害ゼロ。今までの生活の基盤を無くさずに、

かつ誰一人の犠牲者も出さずに済む方法。それこそがレナードの目指す目標であり、その手段が原因となる古龍の排除という事なのだ。

「まあ、一匹狼の貴様に分かれと言う方が難しいのかもしれないが。一所に身を置き暮らす村人にとって、村とは大地であり小さな世界なのだ。そうも容易く生きる場所を変えるなどという決断は出来んだろう」

「……チツ、もうオレは知らん。勝手にしろ！」

「……！　ありがとう、助かった！」

腕を組み、顔を背けながら吐き捨てるように言い放たれたレオンの言葉は、少々分かりにくいながらもレナードを支持する何よりの証拠であった。

この時ばかりはレナードも、レオンに頭を下げ素直に感謝の意を告げる。

「私もその話に乗っちゃおうかなー！　意地っ張りのレオン君も、素直になった事だしねー」

「……フン！　オレは意地っ張りな訳でも、素直になった覚えも無い！」

「ジャンヌも、ありがとう！　これで防具を作れるよ」

「ウム、これで貴様も万全の準備が出来ると言うものだな！　精々我輩に感謝するが良、ヌワツハツハツハ！」

「おい。お前ら、オレを無視するなッ！　……おいッ！　おいと言っているんだ!!」

独りがなり立てるレオンは、結局誰も相手にする事は無かった。



「……本当に、良いのね？」

「ああ、もう決めた事だ！」

酒場の前で、村長と竜人族のお姉さまは深刻な様子で話をしていた。議題は言わずもがな、現在この村に近付いてきている古龍・クシャルダオラについての対処方法であった。

先程のレナード達と同じく、竜人族のお姉さまはここから逃げ出す事を提案。逆に村長は、一人のハンターが古龍を倒す事に賭けるのであった。

「……けれどその決断は、破滅へ向かう選択よ。坊や、アナタは、そしてアナタ達はあまりに古龍の事を軽く見過ぎている」

竜人族のお姉さまはどこか気だるげに、しかし瞳の奥に真摯な想いを込めて昔馴染みである村長の翻意を促す。長年《古龍観測局》の一員として働いてきた彼女は、この場にいる誰よりも古龍について精通していた。当然その脅威にも。

「お姉さん……オイラだって言わせてもらおう。きつとオイラはお姉さんの言う通り、

古龍の事についてお姉さんからしてみれば何にも知らないんだろう。でもね、一言だけ言わせて欲しい——アンタは、あまりにこの村のハンター達の事を軽く見過ぎている」

「……………」

暫しの間、両者は無言で見つめ合う。やがて、視線を外したのは竜人族のお姉さまの方であった。

「…………分かったわ、好きになさいな。古龍観測局の調べでは、この村に最接近するまでには後五日から七日。精々、対策をしつかりとなさい…………全く、あの洩垂れ坊やが立派になったものね」

「よしてくれよ、照れるだろ?」

「…………まあ、失敗も人を成長させるためには必要って言う訳だしね。精々被害が少なくなるように心掛けなさいな、坊や」

昔馴染みの女性に褒められ、顔や頭をつるりと撫でてむず痒そうに鼻の下を指でこすっていた村長は最後の言葉に身を固くする。結局、この女性にはいつまで経っても自分には叶わない事を再認識する。スタスタとどこかに歩いていくお姉さまに、村長は情けなさそうな顔をしながら見送るのであった。



「付いてくるなって言うのは一体どういう事なんですか！」

「そーよ、アタシ達はそんな言葉なんかじゃ納得できないわよ！」

「お前ら、帰ってきた途端に息ぴったりなの何でなんだよ……?」

息を合わせて抗議をする二人に、レナードははつきりと辟易とした顔を浮かべた。自分の知り合い達が仲良くなって、おまけに力を合わせて何か事を為すのは誠嬉しい事ではあるが、その矛先が自分自身に向けられているとなると溜まったものでは無かった。

「そんな事はどーでもいいの！」

「そうです、どうでもいいんです！」

「ああ、どうでもいいんだ……」

自分が少なからず頭を悩ませていた案件を一蹴され、レナードは若干顔が引き攣るのを感じていた。

「そんな事より！ 古龍討伐に向かう事はまあ百歩譲って良しとしましょう？ 危険だけれど、レナードが決めた事だもん。どうせアタシ達が言ったところで変えないんでしょう?」

でもどうしてアタシ達がお留守番なのよ！ ……そんなに私達の事、役立たずだと思ってるの?」



「違う、そうじゃない」

哀しげに述べるベルに、レナードはきつぱりと否定の意を込めた言葉を告げる。

「じゃあ、どうして……?」

「……古龍が出現する時にはな、決まってあるモンスターの群れが現れるんだ。名前を《蛇竜・ガブラス》って言う。こいつらは必ず結構な数で群れていて、普段は古龍のお零れを狙って集まる習性にある。そしてそんなこいつらの区分は……飛竜種だ」

二人の息を呑む音が鮮明にレナードの耳に聞こえたが、まるで何も聞こえていないかのように説明を続けていく。

「ガブラスの特徴は、飛行能力が優れていて常に空を飛んでいると言ってもいい程長い滞空時間を持っている所にある。その為体は細く、その割に長大な翼を持っている訳だが。それを生かして上空から毒液を吐いて来たり、鋭い鉤爪で襲い掛かってきたりする……。弱点は大きな音だ、一度下に落ちてしまえば体の構造上しばらくは起き上がって飛び立てないからそこを狙え。それと、弱いやつを優先して襲いかかってくるみたいだから気をつける、弱みは見せないようにしろ……まあ? 幸い一頭一頭を見てみれば、イランクツクよりは強くない奴らだから。問題はその物量って事だな、何せ一頭二頭というレベルじゃ無いんだ。何十、あるいは何百と村にやってくるかも——」

「ちよちよちよつと、ちよつと待って! ……え、飛竜が何十頭もこの村にやってくるつ

て言うの?」

ベルは戸惑うように聞き返してくる。当然だ、一頭一頭を狩るのにも綿密な準備の元に行われるのだから。及び腰になるのも致し方ない事ではあった。

「……正直、な。ガブラスがクシャルダオラに付いてるって聞いて、迷ったんだ。例え俺の方が上手く古龍を追い払えたとして、ガブラスに村が襲われたら何にもならないからな」

レナードは、溜息と共に隠していた心情を吐露した。自分が行くと言った手前決して誰にも話はしなかったが、目の前の少女達には気が緩んだのかつい弱音とも取れる発言を口にしてしまっていた。

「大丈夫ですよ! 私達が手を合わせれば、きつと一山いくらの連中なんて一ひねりです!」

「セイデイ……。アナタ、一体どこからそんな自信が出てくるのよ……。でも、うん。確かに、そんな気がしてきたわね! 私達ならきつと大丈夫だわ!」

「そうですよ、それに私達だけじゃありませんし! レオンさんとかジャンスさんとか、後教官だって戦ってくれますよね流石に」

「それはそーでしょ。普段誰も訓練所使わないからって、毎日前を通るたびに暇そうにしてるんだから。こんな時にくらい動いてもらわないと、ただ騒がしくてはた迷惑なだ

「けよ」

「ですよねえ、現状無駄飯喰らいなのは否めません」

「む、う……確かに、教官やアイツ等もいる訳だから、意外といけるのか……？」

意外と辛辣な女性陣の評価はさて置き。

熟練のハンターである教官や、現役ハンターが数人存在している。それだけでは無く、村長を始めとした村の皆も色々と動き回ってくれているらしい事をレナードは思いつく。戦えないからと言って決して自分達ハンターに丸投げにしたりはしていないのだ。団結力という言葉が相応しい、村人全員で事に当たっている。その事にレナードは笑みを零さずにはいられない。

村の一体感が、生まれてきた勝ち目の要素が、徐々にレナードの心から憂いを消し去っていくのを感じる。

「大体、今回レナードが一番危険なんだからね！ こっちの事を心配してる余裕があるんなら、少しは自分の心配してなさい！」

「……よし、分かった！ 村の事は皆に任せるから！ 必ず守ってくれよな、村も……勿論、お前等の命も」

「当つたり前です！ まだ美味しいものいっぱい食べたいんですから、こんな所で死んでいられませんよ！」

結局食い気かよ、そう苦笑しながらレナードは工房へと向かっていった。先ほど譲ってもらったダイミヨウザザミの素材でもって、今から工房のばあちゃんに突貫作業で作り上げてもらう予定なのだ。

憂いを消したレナードは、前を向き意気揚々と歩き始めた。

◇

「……行ったわね」

「……行きましたね」

その場に残っていた二人は、レナードの歩いて行った前方を見つつそう呟いた。その表情には、レナードと会話していた時とは違い途方に暮れた表情をしていた。

「何十もの飛竜だつて……どうしよつか？」

「それどころか、何百かもしれませんし……はは。もう笑うしか無いです、はい」

一体どうすればいいというのか、まさか村人達を戦力に加える訳にもいかない。幾ら自分達だけではないとはいえ、現状戦える者は自分達含め約5人だろうか。具体的な数は分かっていないため概算になるが、一人当たり十頭は見なければならぬだろう。連戦の経験も無い二人の心に暗雲が立ち込めるのはむしろ当然と言える事態であった。

「でも……やりましょう。遠くに出ていく男にとつて、見送る女は港のようなものなんですから。しつかりと、帰るべき場所を守っていかなきゃいけないですよ……！」

ベルは横にいたセイデいの発言の内容に驚き、次に普段の様子とは雰囲気が違う事に再度驚いた。驚いたので、まあ疑う訳ではないが一応確認をしておく事にする。ハンターとは用心深くあらねばならないのだ。

「セイデイ……それはとてもいい言葉だと思うわ」

「ええ、私も我ながらそう思います」

「で、一体誰がアナタに教えたのかしら？」

「……い、イヤハヤ。言っている意味が何とも分かりかねますが……これは、大人の魅力溢れるわたくし自身が今までの人生経験から導き出した持論のようなものでして……」  
「嘘おつしやい。アナタがそんな年経た余裕と理解溢れる大人の女性みたいな事思いつく訳ないでしょうが」

ばつさりと、隠す気がないのかと言いたくなるほどおかしな様子で言い訳をするセイデいの言を切り捨てる。

切り捨てられたセイデイは顔を引き攣らせていたが、やがて諦めたように肩を落とす。

「故郷の、素敵な奥様方です……」

「やっぱり……」

概ね予想通りであった。今の発言は、実際に待つ身となった女性。つまりは誰かしらの妻となった女の発想だと推理していた訳だが、それが見事に的中した形となる。

「アハハハハっ！……まだアナタにはそんな言葉は早いわよ」

「あー、ば、バカにしないで下さいよー！ 私だって日々成長してるんですからね、あんなトコとかこーんなトコとか……」

「そういう事じゃ無くって。セイデイにはセイデイにしか無い魅力があるって事よ。――

―それにしても、ふう。笑ったら、何だか気が楽になつてきちゃった」

どうせ、今この場でヤキモキしたとしてもやる事は同じなのだ。ならば精々、堂々とこの村に来る脅威とやらを迎えてやろうではないか。日々、尋常ではない命の危機というギリギリのストレスと対峙しているハンターならではの思考でもってベルはそう決着をつける。

それに、それこそレナードの方が為すべき事の難易度は高いのだ。いつまでも自分達が無駄ウダとしているなど、自身のハンターとしての矜持が許さない。

ベルは、それまでとは違いどこか冷静さを残すこざっぱりとしたハンターの表情となる。後は突然の変貌に目を白黒させるセイデイの陰鬱とした気分を変えるため、ベルは頬に笑みを浮かべながらその作業に取り掛かるのであった。

## 激流上り

普段であれば多くの者が寝静まり、村に唯一ある酒場にのみ人がひっそりと集う深夜。そんな刻限に村全体が不夜城を思わせるほどに煌々と篝火が焚かれ、眠気に勝てなかった小さな子供を除く村人たちが忙しく支度をしているのが見て取れた。

ここ数日で、ジャンボ村の雰囲気は一変と言つていい程に剣呑なものへと変貌していた。

普段は家や交易の要となる大型船を造る為に日夜材木を運んでいる大工たちが、侵略者に備える為に気休め程度ではあるが柵や家の補強を行っている。女達も日頃の家事や畑仕事を取り止め、食材を日持ちするような料理へと変え蓄えたり素人でも使えるタール爆弾の調合に勤めたりしていた。村人達の中で力自慢な一部の者は、ハンターが使用するような装備（ハンターナイフとレザーシリーズという簡素な物ではあるが）に身を固め、短期間で最低限身を守るような教育を教官より教え込まれている様子まで見るとれる。

（絶対に、密林から追い出して……いや、討伐してやる）

正に村人総動員なその様子を改めて目にし、レナードは静かに気を引き締めた。そんなレナードの装備もまた、一時期と比べるとガラリと姿を変えている。

武器は《デッドドリイタバルジン》、レナードが普段手にしている大剣では無く片手剣となっている。剣、と言いなながらもその見た目は小斧となっており、凄まじい毒性を秘めた武器となっている。素材とした《毒怪鳥》ゲリヨスや、その亜種である《紫毒鳥》の怨嗟の声が聞こえてくるかのような禍々しさを思わせるが、これから挑む相手を思えばそれは頼もしさには感じられない。

防具もまた、今までとは全く違う。《盾蟹》ダイミヨウザザミという守りに長けたモンスター、堅牢さを思わせる素材から作られた防具は一言で言えば『赤いアメフト選手』だ。少々視界の確保が困難な所が難点と言えば難点だが、その頑強な作りは内にいるハンターの肉体をモンスターの強烈な猛攻から防いでくれる事間違いないの逸品だ。

(ザザミシリーズは火と雷属性に物凄く弱い特徴がある……でも、今回の相手は主に龍属性。その弱さは今は関係が無い。防御珠と加護珠も付けているからか、防御力が更に上がってるし、精霊の加護も付いている。鉄壁の守りと言って良いはずだ)

本来のレナードの狩りの進め方であれば、それらの情報もまたしつかりと精査して確かめておくのだが、今回は流石にその時間が無い。実の所、つい三日前まで沼地に出かけてゲリヨス亜種を狩ってデッドドリイタバルジンの素材を集めていたのだ。ゲームの



ように一瞬で出来上がる訳も無い事を考慮に入れると正にギリギリの時間であり、全身鎧にも関わらず動きを阻害しないザザミシリーズと言ひ、迅速かつ丁寧な仕事ぶりに工房のばあちゃんには頭が上がりえない思いであった。

「でも師匠……やっぱり片手剣より使い慣れた大剣の方がいいんじゃない？」

「そうよね……万全は期すべきじゃない？」

不安げな表情のセイディとベルが、直に旅立つレナードの傍で忠告をしてくる。彼女達の言う通り、レナードの怪力を最大限生かすには大剣やハンマー、あるいはランスといった重量を利用した武器の方が良い事には違いない。

「でもな、毒を持った大剣なんて作れやしないし。毒が奴の厄介な《風の鎧》をかき消してくれるって言うんだから、やっぱり毒は必須だつて」

心配してくれるのは嬉しいが、クシャルダオラが毒に弱い事は竜人族のお姉さまにも確認して裏を取っている事実だ。クシャルダオラは生態が不明な点の多い古龍の中では、比較的研究が進められている種だ。自身の確定情報では無いゲーム知識を100%頼り切らずに済むと言う点で、彼女の存在は大いに役立ってくれていた。馬鹿みたいな量の酒飲み勝負をさせられたが、辛うじて勝つことが出来たのは奇跡のようなものだろう。

いずれにせよ、十分信頼の置ける二つ以上の情報が同じ内容を指しているのなら、ま

ず間違いはない。レナードはそう判断をした。

「それより、二人とも頑張れよ。皆を守ってやってくれ。大丈夫、お前等二人とも強いからー!」

「女の子に向かって強いつて言うのは、果たして褒め言葉なのかなあ……?」

「まあ、レナードだから」

納得はしていないが理解は出来た。そんな表情を浮かべる二人に向け、レナードは激励の言葉を告げる。結局その言葉の影響で、二人は苦笑を浮かべながら船で出るレナードを見送る事になるのであった。

「ミヤミヤ、昨日は緊張のあまり寝過ぎてしまったのミヤー!。ご、ごしじんさま!?!  
どこですかミヤ〜!。まだ、絶対の勝利を約束するニヤーのキツスをほっぺにしてま  
せんのみゃー!!?」

今にも泣きそうな声で騒がしい白猫のウツカりは、皆が皆触れる事は無かった。



「普段はアプトノスより穏やかなこの河……それが今日は獰猛な飛竜みたいだ。ふふん、腕が鳴るぞー!」

間延びした口調ながら、中々に頼もしい様な笑みを浮かべつつリユーズは呟く。

「行けるか、リユーズ？」

目の前の普段使用しているテロス密林へ繋がる河は、水源がテロス密林となつてい  
る。地勢の関係上、テロス密林は夜に必ず雨が降る。その為夜には水かさが増し、幾分  
流れも速くなるのだ。普段は殆ど上流下流の高さに差が無いため特に苦も無く目的地  
へ迎えるが、今日は雨どころでは無く暴風雨という事でいつもの夜に輪をかけて酷く荒  
れている。穏やかな頃ならば清流と呼べる程に澄んでいる水が、いつそ見事なまでに泥  
土を含んだ濁流と化していた。これでは權で漕ぎ人力で向かう事など不可能だろう。

普段より多めの荷物を棧橋の上に持つて来はしたもの、心配になつたレナードが窺  
うように声をかけるのは無理もない事であつた。

「ふふーん、任せとけ。実は言つてなかつたけどなー、この河は流れが急になるとあんま  
り色んな流れが入り乱れすぎて、中には密林へ遡るような流れ何かもあるんだぞー」

「おおー！ そいつは凄いいー！」

「ふつふつふー、そーだろー、凄いだろー？ まあ一つ難点を言うならその見極めが尋常  
じゃないくらい難しいから、まだ一度も成功した事は無いとこなんだけどなー」

「おいこら待てや」

ジト目で突つ込むレナードに、しかしリユーズは不敵な態度を崩さない。

「その事を考えておいらがここで途方に暮れてたらだなー、丁度親方達が通りがかつたんだなーこれが、それでまあそこから先は文字通りトントン拍子だ。ちよつとした舟の補強でもしてくれるモンだと思つてたら、なーんかおかしいぞー？ あれー？ とか言つてる間に、トンテンカンとほれこのとーり」

どこか疲れた様子のリユーズが指さす方向に目をやる。そこには以前までのリユーズが乗っていた舟に比べれば二回りは大きく、そして明らかに豪華な素材を用いられた、小型ながらも船と称される物が濁流も意に介さぬように平然とした表情で係留されていた。

「おお……頼もしさしか感じられねえ」

「ギリギリ人力で扱える代物らしいんだよなー、權も力任せに扱つても折れないようにガノトトスの素材使つてるらしーし。まー元々、世界の海を渡れるだけの交易船を造ろうとしてる人達だからなー。これぐらいのサイズならお茶の子さいさいって感じだったぞ、何せ半日掛かつてないからなー」

その辺りはやはり本職といったところか。彼らも同じ備えるというのなら船に関連していた方がモチベーションが高く保てるのだろう、割り当てられた他の村の補強もきちんとこなしてくれているのだから批判など出来る筈も無い。

「ともかく……これで問題は無いって訳だな」

「いやー……さつきも言ったけどなー……? おいらはまだ夜中の河は行けた事が無いんだー……すまん」

悔しげに言うリューズ。先ほどは冗談めかして伝えたが、実際のところ彼の心の内に自信などと言うものは殆どありはしなかったという事だろう。それは、遥かに乗りこなす船が豪華になったとても何ら変わりはしないと。

「大丈夫、何とかなるって」

そんな心の暗雲を吹き払うかのように、あつさりとレナードはリューズの懸念を否定する。

そのあつけらかなとした様子にリューズはつい目をぱちくりとしてしまう。

「だってお前……荒波や大時化も乗り越えて船を漕ぐんだろ?」

どこか聞き覚えのある言葉をレナードに言われ、リューズは目が覚めた心地となる。聞き覚えがあるのも当然だ、何故ならそれは普段リューズ自身が歌う調子つばずれな歌の歌詞なのだから。

「……よーし、そうと決まれば出航だぞー!」

「おー!」

若き船頭はその瞳に静かに火を灯す。彼もまた、立派な村の守り人なのだ。



「い、行けるか!？」

「ちよつと黙つてろー! 今集中してんだからなー!」

不可思議な光景であつた。

二人を乗せた船は、激流と言うのも相応しくない程に荒々しく暴れている河を遡るよ  
うに上つていくのだ。

あまりにも自由気ままに流れ行く暴れ河の流れは、常識である筈の上から下へ流れる  
という事にすら喧嘩を売るように下剋上を果たそうとしているのだ。

リューズは自然の奇跡とでも言うような、そんな細い一本の流れ、テロス密林へと迎  
える唯一つの道を見極めそれを利用し遡つて行つていたのであつた。

「うおおつ!？」 ちょ、超怖ええツ!？」 帆、帆は畳んでもいいんじゃないやねーか、コレえ!？」

「駄目だー! 今丁度下流から上流へ向けて吹いてんだから、それを利用しないでど  
うすんだー!」

リューズの新たな相棒である船は、どんな素材を使ったのか、暴風雨にも関わらず帆  
でもつて大きく風を受けていた。

それでも折れるような不穏な軋みは見られないのが、実に頼りになる。

常時ならばレナードもそういう感想を持たただろうが、生憎今は激流下りならぬ激流上りの真つ最中だ。僅かな波紋でも揺らぐ笹の船の様にグラグラと頼りなく上下左右に揺れる船の上においては、そんな暢気な感想は出て来はしない。

ジェットコースターもかくやといった状況に、レナードは柱にしがみつく様にして耐える。普段はのんびりとした印象を与えるリユーズだが、船尾にて櫂を持ち河の流れを睨みつけている姿はレナードには別人のように見えた。

「……もう少し、右かー」

轟々と鳴り響く水音の中、かき消されそうな独り言を呟きながら慎重に船を進めていく。

僅かでも間違えれば上流から下流へ向かう水流に乗ってしまうのだ、そうすれば帆が受ける下流の方角から吹き付けてくる暴風と激流の間に挟まれた船は、如何に頑丈とは言え浸水、あるいは瓦解してしまうだろう。

凄まじいまでの集中をしながら、船自体はスイスイと進んでいく。その様子を見て先程までは柱にしがみついていたレナードもホッと息を吐きしがみつくのを止める。未だ予断は許しはしないが、それでもリユーズならば問題無い筈だ。必ず自分をテロス密林のベースキャンプまで送り届けてくれる。

「……………」

何か、レナードの人間離れした聴覚に聞こえてきたような気がした。荒ぶる水の音に紛れて、何か生物の鳴き声の様な声があった気がするのだ。

妙に気になり、目を瞑り耳をそばだてる。絶えず続く轟音のその先に、意識を伸ばしていく。

「……ッ！ ガブラスか！」

レナードが視線を上げると、即ちレナードとリューズが向かう先であるテロス密林の方から、空を覆い尽くす勢いで騒々しくも空を往く死肉漁りの集団が現れた。

蛇竜ガブラス、その大群と言って良い程の数を誇る集団はけたたましく耳障りな声を上げながら村の方へと向かっていった。

「……………」

今の所は作戦通りだ。レナードがクシャルダオラと相對している間、村は村でガブラスの大群と相對する。心配だったリューズも快調に密林へと向かっているのだから、順調極まりないといっても良いぐらいだろう。だが実際に敵の勢力を目にした今、それでも心の中で皆が無事な事を祈ってしまうのは仕方が無い事だ。

『ギヤアアア！』

「……つちにも来たか！」

数の少ないコチラを弱者と見たか、群れから離れて数頭のガブラスが船へ舞い降りて



きた。

咄嗟に迎撃を行おうとしたレナードは、己の得物を見て齒嘯みする。今の彼は普段の大剣では無くリーチの最も短い片手剣だ。滞空時間の異常に長いガブラスとは立つことも儘ならぬ程な足場も相まって非常に相性が悪い。

「くっそ……船を壊されても面倒だしな」

ゴソゴソとポーチを漁り、音爆弾を取り出した。ガブラスは大きな音が弱点で、耳元で大きな音を出されると落下してくる。そこまで豊富にある訳でも無いので、貴重な消耗品をこんな所で使用してしまうのは少々痛い。背に腹は代えられない。そう思いレナードが投げようとすると。

「——使うなーッ!!」

「うおっ!?!」

リユーズの一喝が周囲に響き渡った。投げる絶妙なタイミングで叫ばれた為に手放してしまった音爆弾がコロコロと船の上を転がってしまう。レナードが何をするんだと恨めしげな表情でリユーズを見ると、ハッと息を呑む。普段は垂れた眼を吊り上げ、正しく敵を見るような顔でガブラスと目の前の河を眺めていたのだ。先程までの、真剣に河の流れを読み取るうとしていた表情とは似て非なる剣呑さが滲み出る。

「持つてく道具は一個も使うなよー! おいらが責任もって向こうに送り届けてやるか

らな—！」

「リユーズ……」

未だ轟々と鳴り止まぬ音の中、リユーズは静かに決意を固めていたのであった。

「必ず、自分の船に乗るハンターを無傷で送り届けてみせる」と。それは身体的な傷だけで無く、道具の消耗としての意味も含まれていた。もしもここで自分達を守る為に何か道具を使ったのが原因で、それが巡り巡って本番の狩りで何か不幸が起きれば一体どうすると言うのか。きっと自分は死んでも死に切れない。

だから。

今ここで船頭リユーズは命を懸ける、死んでも死にきれぬ後悔を抱えぬ為に。

「行けるのか……？」

「ふふーん、おいらを誰だと思ってんだー？ 荒波大時化に加えて、モンスターだってドンと来いなリユーズ様だぜー！ レナードがつけえモンスターを狩るみたいに、おいらはこれが仕事なんだ。こんぐれえへっちやらさー」

任せたと、言う必要すら無くレナードはただ頷く。リユーズもまた何も語らず、口の端に笑みを浮かべるに留まる。

「それでも……何か困ったら言えよ！ お前は今独りじゃ無くって、俺と一緒に船に乗ってんだからな！」

「……おーよ」

言葉少なに述べるリユーズは、既に河の先へと想いを馳せていた。狩りへ向かうハンターを安全無事に目的地へと届ける、これは紛れも無く彼の戦いと言えるものであった。

『ギヤアアアア!!』

「ごんのーッ!」

早速飛来してくるガブラスを、流れから外れぬように左右に動いて躲す。躲した事では生じたズレを、また別の要素で補い船を先へと向かわせる。言葉にすればたったそれだけの事に、リユーズは全神経を傾けていた。額から汗が絶え間なく滴り落ちてくるが、それを拭うなどという事すらせずに、船の後方で權を持つ。

リユーズの操船技術は全く見事なものであった。激流と暴風という二つの難題を同時にこなし、考え得る中で最速のスピードでもって船に群がるガブラス共を引き離す。ギヤーギヤーと耳に障る鳴き声を背にしながら、二人はホツと息を吐く。

「ごーりやマズイ……!」

先程から流れを見ていたリユーズ、だが一瞬、ほんの一瞬だけ遠ざかるガブラスに意識を向けたが為に、その先にある大岩の存在に気が付くのが遅れてしまった。

「ぐ、ぬぬーッ!」

全力で櫂を動かし右に躲そうとする、だが足りない。荒れ狂う濁流に我を通そうとするには、リユーズ一人の力では余りに非力に過ぎたのだ。

と。櫂を持つリユーズの隣に立ち、櫂に手を伸ばす存在があった。言うまでも無くレナードだ。

「おい、レナード……！」

「悪い、でも力貸して悪いって事も無いだろ？ 俺達ハンターだつて二人以上で狩りをするんだからな。今はお前と俺がこの船の上にいる、一蓮托生の仲間つて訳だ」

「ったく……！」

どこか照れ臭げに鼻の下をこすり、リユーズは再度気合を入れる。

「せーのー……！」

「ぬおおおりやああっ!!」

レナードの剛力が加わり、ガノトトス製の櫂は軋み音を上げながらも折れず仕事を全うしていく。船は徐々に右へと向きを変えていき、船体を豪快に擦りつけながらも無事に大岩をすり抜けて先へ進む。目的地であるテロス密林は目と鼻の先であった。



「うだー……疲れたぞー」

無事に役目を終えたリユーズは、ベースキャンプのベッドの上で精根尽き果てた様にだれていた。しかしレナードはそれを責める事はしなかった。リユーズは既に大事な役目を果たしたのだ、今度は自分がそれを無事に成し遂げる番なのだ。

命芽吹く常に比べ遥かに鬱蒼とした密林に目を向け、そう意志を固くするレナードであつた。

## 前哨戦

「村長……お気をつけて」

「ああ、パティ。キミもな」

レナードがやる気に燃えるリ्यूーズと共に激流を上って行く頃、村は静かに準備を終えようとしていた。

つい先程まで怒涛の如く降り注いでいた雨は、不思議と止んでいた。ぬかるんだ地面と湿気た空気だけがその存在を証明していた。静かな、あまりに静かすぎる周囲の光景。正に嵐の前の静けさと言える。くゆる篝火だけが、その存在を殊更に主張するように揺らめいていた。

そんな中、村人たちの指揮をする為に村に残る村長と、碌に歩く事も儘ならぬ老人と幼子を纏めて一所に避難させる役割のパティが、蛇竜・ガブラス襲撃前における最後の会話をしていた。

「村長……やっぱり、貴重な戦力を私達の洞窟に回すのは止めた方が良いんじゃないでしょうか」

「いや、それはちょっと待ってくれ。ガブラスは狡賢い、弱った者を優先的に狙ってくる

習性があるらしいからな。どうしても、年寄りや子供が集まった所にも最低限の戦力は置いておきたいのさ。……それにしても、あの時のワンワン泣いてた子供が今や立派なお嬢さんで、オイラ達の心配をしてるなんてなあ。ホントに、人間って言うのは成長が早いモンだよ」

どこか感慨深げに呟く村長。パティを見る目は、慈しみに溢れていた。

「……村長の坊や、ここにいたの。向こうで最後の確認をしている所だから、坊やも立ち会ってきなさい」

「ああ、分かったよ。……それじゃあな、パティ。ちょっと騒がしくなるけど、もう泣くんじゃあないぜ?」

「もうっ! さっきは成長したって言ったのに、私をいつまでも子供扱いしないで下さいー!」

腰に手を当てむむつと怒るパティにハハハと笑いを返しつつ、村長は軽やかに駆け出す。その後ろ姿を見て、パティはどうにも心配が馬鹿らしく思えてきた。いつだって、村長は自分が寂しがらないように尽力してくれていたのだ。今度だってそうなるに決まっている。

愛おしげにコチラを見つめてくる竜人族のお姉さまにペコリと頭を下げながら、どこか軽やかにその場から立ち去っていく。

「……血は繋がらないけれど、親子ねえ。歩き方がそっくり」  
クスリと口元に手を当て笑い。妙齡の美女はそう漏らすのであった。



「乾杯っ！」

ガツリと木製のジョッキがぶつかり、辺りに鈍い音が響く。勢いよくぶつかった拍子に中身が跳ね零れ落ちる。透明な液体、その正体は人を酔いに誘う酒では無くただの水であった。

「んぐ、んぐ……ふはあ！ あーやつぱりマズイなあ、オイ!!」

「又ハハハハッ！ まあ、キンキンに冷えたビールはゼーんぶ事が終わった後の方が上手いと300年ぐらい前から決まっているからな！ 多分だが」

「違うないわい」

教官と親方は主のいない酒場の片隅、いつもの場所で二人並んで最後のちよつとした儀式を行っていた。

「……それより、親方よ。貴様本当にその腕、問題は無いのであろうな？」

敢えて教官は親方の顔を見ずに、ちびちびと生温い水を飲みつつ問い掛ける。教官が



言っているのは親方の左腕、かつてハンターであった親方がハンターを辞める事となつた原因だ。

「……ビールの入ったジョッキを握る事は、出来る。出来の悪い若造の頭をこれでもか  
とぶん殴る事も、出来る」

(……が、自在にハンマーを振り回す事は出来ない、か)

言葉に出さない次の言葉を、教官は心中で察する。その事実を、決してこの男はそれを認める事はしないだろう。先の言葉とて、負けず嫌いな親方にとつては最大限の譲歩と言えるのだ。

その直接の要因となつた巨大なガノトトス、彼の仲間が皆死んでしまい彼自身こうして後遺症を残す事となつたとしても、それ自体は恨んではいけないだろう。いつだって自然とは命がけの戦いだ、それまでは自分達が勝ち続け、その時は負けたというだけの事。だがその怪我を理由にして十全に戦えぬ言い訳としてしまう事だけは、自分自身が許しはしないといったところか。

「ハーハッハッハ、だが俺にはまだこの右手がある。この、ハンターを辞めてからも只管に鍛え続けたこの右腕が！」

確かに、鍛えに鍛えたのだろう。その右腕は自慢するに相応しく、あまりに逞しく力強かつた。現に今まで腕相撲では負けなしと言う連勝記録まで作り出していたのだ。

……とある夜にレナードに負けるまでは。

（あの時は名勝負だった。「今日はものすごく調子がいいわい」と言っていた親方と、酒によつて僅かに酔いが回り狩場にいるかのようによ段よりも気が昂っていたレナード。長時間のせめぎ合いの果て、親方は実に豪快に投げ飛ばされたものであったが）

何せ台にしていたブレスワインの入っていたタルが粉碎してしまったのだから、そこに加わっていた両者の力の凄さがよく分かる。

とにかく、問題は無いという事だろう。何やら自信有り気な表情を浮かべる親方を見て教官は結論付ける。

そもそも、左腕で心配なのは筋力では無く握力なのだ。包帯で腕を固定するなりすれば、特に問題は無くかつての凄腕ハンターの再臨だ。現役時に比べ、少々腹が出てしまったというのが気に掛かるところではあるが。

「まあ、あのちびすけも中々やりおるわい。……俺の事より、教官。お前はどんなんじやい。まさかとは思うが、現役から離れて腕が鈍つとるんじやなかるうな？」

「それこそまさかだ！ 我輩の信念的なポリシーにして心中への戒めを加味したモツトーたるは、常在戦場であるからしてっ！」

「お前、ホントにその辺の言葉理解して使つとるんだらうな……」

親方はナマズのような髭を撫でつつ呆れたように漏らす。傍らに置いてある手入の

行き届いた武器を見る限りは問題は無いのだが、どうしても言動までを評価に加えることやこしい物となってしまう。

(まあ、詰まる所個性の強いキワモノと言う事だわい)

自分の事を棚の上に挙げ、そう結論付ける。

談笑の合間に時折豪快に笑いを混ぜつつ肩を並べて不味そうに水を飲む。お互いに同じような行動を取っているその後ろ姿は、どう見ても似た者同士という印象しか第三者に与えないことに、親方は気付くことは無かった。

◇

「……よし、爆薬の方は問題無さそうね」

彼女の確認していた爆薬は、高熱を秘め爆発性を持つニトロダケと、火に触れると爆発する性質を持つ火薬草を挿り潰し、一定の配分で合わせた物だ。

その為、乾いている火薬と比べると粘度が高く湿気には強い。流石に直接大雨を被れば保証は出来ないが、空気が湿気ている程度であれば問題無く爆発してくれる筈だ。

「こつちも、ざつと見た感じじや問題無いみたいだぜ。……それで、遂に来ちまったみたいだな」

徐に声を低くした村長に釣られ、彼女はどんよりとした曇り空を見る。

時折吹く風に紛れ、ギヤーギヤーと甲高く耳障りな音が聞こえてくるのが分かる。

「……もう、ゴメンナサイなんて言ったってどうしようもないわね」

「おや、いつにも増して弱気じゃあないか？」

「……アラ、坊やの事よ？ アナタ昔、悪戯して大人に追い掛け回された時に泣いて謝ってたじゃない」

「お、オイラの事はどうだっていいんだよ!!」

クスクスと笑うのを苦み走った表情で見やりながら、村長は溜息を吐く。そこにガブラスに対する恐怖など、一欠けらも存在してはいなかった。



村の男達には自信があった。何も根拠の無いものではない。

その根拠が、牙を持たぬ無力な獲物では無いことに起因している事は言うまでも無い事だ。確かな腕前の鍛冶師が作り上げた捕食者への反抗の牙、短い時間ながらも確かな手ごたえを感じるほどに濃密な習熟時間。手に持つハンターナイフという金属の光沢放つ牙が、彼らの心を安定させる役割を果たし、身に纏う同じく鉄鉱石とケルビの皮で出来た《レザーライトシリーズ》も着用している。更に言えば、傍らには同じ訓練をこ

なしてきた家族同然の仲間達。総勢60名強。如何に飛竜種といえど、これで対抗できない訳が無い。

「き、来た……」

その、どこか弛緩にも似た僅かな心の落ち着きを。

『ギヤア、ギ、ヤアツ……!』

世界の食物連鎖の上位に位置する飛竜の姿と鳴き声は、さながら陣風に吹かれる木の葉のように容易く吹き飛ばしていく。

「あれが……俺たちの、敵……」

「あんな数を、俺たちが……」

「お、多いだろう……?」

「む、無理だ……! やっぱオラ達じゃあ、無理だったんだあ!」

通常、古龍に付き従うかのように現れるガブラスの数は20〜30、多くとも50前後と言われている。

それですら対処しきると断言するには多すぎると言うのに。

「……目算で、200ってトコロかしら」

「想定の上4倍以上って訳か……!」

ジャンボ村に迫りくる飢えた飛竜は、余りにもその数が多すぎた。

「……今からでも、村人たちをパーティ達のいる洞窟へ避難つてのは」

「……無理ね。あの洞窟の大きさでは中に入れるのは今入っている人達で限界。ガブラスの攻撃を凌ぎ切れる場所なんてそんな都合のいい場所は早々見つかりもしないし。……なまじその点が上手くいったところで、私達が中でブルブルとおっかなびつくり震えている間に、家畜やらなにやらを食い尽くされてはいオシマイ。晴れて村人全員路頭に迷う事になりましたとき、なんて事になるわよ」

隣に立つ女性の懇切丁寧な説明に、村長は溜息を吐く他無かった。村長とてそんな事は知っていた、ただ確認をしたかっただけなのだ。

問題を回避できるかどうかの確認、では無い。

困難な問題に立ち向かわねばならない事を、だ。

一つ二つと深呼吸をした村長が顔を上げた時、見違える程自信に満ち溢れた表情で以て指示を出し始める。

「……あら。てつきり、怯える村の人達を一人一人励まして回るかと思っただけれど」

「ホントなら、オイラもそうしたいけどさ。でも、そいつは後回しだ。——今はココに並んだコイツ等を、一頭でも多く奴らにぶち当てる事だけ考える」

村長の見やった先、そこには大量に並べられた《打ち上げタル爆弾》が用意されていた。

(……お見事)

彼女は言葉に出さず、村長への賞賛の言葉を頭に思い浮かべる。

この状況下で、怯えきつた村人一人一人を鼓舞していくには余りにも時間が足りなさすぎる。それに加え所詮は見た目と数だけを最低限揃えた即席ハンター、ハンターモドキだ。恐怖心を取り除いたところで百戦錬磨の活躍などしてくれる訳も無い。

それよりは、コチラだ。彼女の目の前に鎮座しているのは村の資財を投じて用意された打ち上げタル爆弾、総数およそ三百。更に添えられるように音爆弾も取り付けられている。ガブラスは音に弱い、おまけに滞空時間を増やすという理由で長年の淘汰によって軽量化された為に、翼を広げた大きさはイヤンクックよりも大きいというのに、その体自体は実に脆弱なものとなっているのだ。これら三百にも及ぶ打ち上げタル爆弾は、今回の戦闘における最大の戦力となっている。

打ち上げタル爆弾の爆発、あるいは爆発音で驚かせ地に落とした後、ハンターや武装した村人達でトドメを刺す。大雑把に言えば、今回の作戦はこのようになっていた。そしてこの打ち上げタル爆弾による第一段階こそが、最もガブラスにダメージを与え得る攻撃なのだ。ならばソコに最も力を入れると言うのは上に立つ者として当然の事。怯えた村人を励ますのには他に適任者は存在するが、こちらはこちらで気候や風向き等の条件を加味して発射のタイミングを計ったり、先程までの豪雨によってタル内部の爆薬

が湿っていないか等々と、数え上げて行けばキリがない程に作業が存在しているのだ。そしてそれらには竜人族の知識と知恵が必要となってくる。

（まあ、後ろに女性や雑用程度は出来る子供達が居るって言うのが、何ともアレなのだけれど……）

武具を身に付けた男達の後ろを見ると、そこには手に包丁や鍋を持った女性達や六歳から十二歳程度の子供達。各々、何か自分でも振るえる物を手にしていた。

純粹にガブラスとの戦いを考えれば、彼女達は何処かに避難していた方がいいに決まっている。だが、村の財政面がそれを許してはくれなかった。

前述の打ち上げタル爆弾と村人達の武具、この二つが村を苦しめている原因であった。いつの世も軍備には金が食うという事だろうか。村を守る為に致し方ないとは言え、とにかくこれらを用意したが為にジャンボ村の財政は、方々に借金や借りを作り倒し既に限界を迎えていた。

これから襲来してくるガブラス、既にこれ等の素材を剥ぎ取らねばジャンボ村は緩慢に死ぬ他無いという所にまで追い詰められているのだ。

ガブラスに食われて息絶えるか、財産が無くなつて緩慢に死に絶えるか。

どちらも選択する事は出来ない村の人間にとつて、生き残るにはガブラスを倒すだけでは無くその後剥ぎ取りまでをこなさねばならないという事だ。



怪物を倒してハッピーエンドの英雄譚とは違い、何とも世知辛い話である。

「……まあ、とは言え」

一見すると何の気なしに、竜人族のお姉さまは一步二歩と前へ歩む。その実、一頭でも多く確実に仕留める為に忙しく脳内を様々なデータで埋め尽くし、処理をしている真つ最中であつた。

「世知辛かろうと、少々泥臭かろうと。英雄譚は英雄譚」

すつ、と右手を挙げる。打ち上げタル爆弾の前に位置していた面々が緊張に身を固くした。その手が下りた時、全ての打ち上げタル爆弾が天に向かって突き進み、そして花開くのだ。

「——ならば、私も。この一手でもつて、その末席に加えてもらおうかしら」

力が抜けたかのように、自然と降ろされる彼女の右手。その動きとは裏腹に、一斉に天へ向け薄闇を切り裂く様に舞い上がる。その様相は昇り竜の如し、天を駆け登る昇竜が、小賢しき知恵を身に付けた飛竜を食い荒らさんと近付いていく。

爆音、と呼ぶにも相応しくない程苛烈な音が辺り一帯に響き渡る。一帯を席卷するか  
の如く衝撃波が一陣の突風となつて吹き荒れる。

世界が終つてしまうかのような凄まじい音はあらゆる物を呑みこんだ。男達の雄々しい歓声も、女子供の甲高い悲鳴も。そして、ガブラス達の断末魔の叫びすらも。

「いよーし！ ドンピシャ、大成功！」

村長は飛び跳ねながら喜びを表す。

大量のタル爆弾は、見事にガブラスの大群のど真ん中に的中し、次々に衝撃波や爆風によつて空を舞うガブラスを地上へと無慈悲に叩き落としていった。

「……確かに上手くはいったけれど。でも、まだよ」

横にいる彼女の、殊更に冷静さを保った言葉に頭を冷やされる。改めて、村長は場を観察する。

地上へと叩き落とされた数はざっと見ただけで百頭近く。——二百頭の内の、百頭だ。

天を見上げれば、先程とは違って散開したガブラス達が各々ジャンボ村の空を我が物顔で旋回していた。

(まるで、弱い獲物を見定めているみたいじゃないか……)

唇を噛みしめつつ、村長はそんな印象を覚えた。

「……おそらく、ガブラスの大きな体が邪魔をして他のガブラスへ十分に爆発音や衝撃波が届かなかったのね。それであの位置で爆発したにも関わらずあれだけの数が……さあ、とにかくこれから作戦は第二段階へ移るわよ」

気持ちを切り替えるように、そう述べていく。

第二段階、村人達による飛竜との白兵戦が幕を開けようとしていた。